
正義の反対はまた別の正義？

せぶんすたあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の反対はまた別の正義？

【Nコード】

N4763M

【作者名】

せぶんすたあ

【あらすじ】

ダメニートが妄想の果てにまじで転生？チート能力もらって暴れまくる！でもまあ、現実そんなに甘くはないってことを思い知るんだけど……。ネギまのオリ主二次創作です。むしゃくしゃしてやったのではつきり言って自己満です。それでも楽しめたらなーと思います。

第零話 テンプレ・・・とはいづらいなにか（前書き）

処女作です。

突発的に書いたから面白くはないかもです。

どうか暖かい目で見てやってください。

第零話 テンプレ・・・とはいづらいなにか

俺の名前は――このまえ悠斗ゆうと。

今年二十歳になる…二トだ。自分で言うのもアレだがな。

なんでこうなったかは、正直言ってわからない。
強いて言うなら流され易いこの性格だろうか？

Noと言えない日本人を地でいつてるからな。

高校も流されるままに入って卒業まで大した思い出もなく、大学入試は失敗。

親が公務員だからと公務員専門学校に行くも、途中で投げ出す。
どれもこれも自ら悩んで決めたとは言い難い。

だから勉強も続かない…のだと思う。いや、そう思いたいだけかもな。

今は専ら家でネット小説や動画を楽しんだり、ゲームしたりの毎日だ。

楽しいには楽しいが、ずっとやってれば飽きも来る。

ふとした時に何時も独り言のように呟いては自嘲する。

「はあ…二次創作みたいにアニメや漫画の世界にいきたい…」

そんなこと現実では有り得ないのは理解してる。
理解っているが、こつも変化のない毎日をおくっていると酷く心が
病んで来る。

それが、空想や妄想の世界への介入など馬鹿げたことを望む原因と
なっているのは明白だ。

ああ、変な事考えてたから頭が痛いな。
頭痛が痛いなんて言いそうなくらいだ。
まだ昼間だが、寝ちまうか。

そんな事を考えながら、意識は徐々に徐々に闇の中へと引きずり込
まれる。

ここから俺の人生は狂^{ハジマ}っていく。

「んん、よく寝・・・た？」

目を開けると、そこにあつたのは深い深い暗闇。

夜かとも思つたが、何も見えなくなる程暗くなる訳がないと、この考えを否定。

床？の感触は妙な感じだ。

そこにあつて、それでいてそこにないような感覚。

足で立っていると確信できるが、足裏には何も触れていないような。

ここは自分の部屋？ - - - - - 恐らくNoだ。部屋なら布団の感触がないと変だし。

なら地下？ - - - - - これも違う。地下なら床の感覚に説明がつかない。

・・・夢？ - - - - - ありえそうだ・・・。とりあえず保留。

死後の世界とか？ - - - - - リアルに未練はないが・・・。
これも保留。

幾つかの自問自答をしていると、不意にパソコンの起動音のような音が耳に入ってくる。

音の方に目を向けると、使い慣れたパソコンが置いてあった。

「ちょ・・・なんで俺のパソコンがあんのよ。」

考えても判る訳がないのでとりあえずディスプレイを見つめる。
しばらくして、黒い画面のままで固まった。

「おいおい、起動すらまともにしないのかよ・・・っ！」

固まったままのパソコンに内心舌打ちをした俺は、その直後に目を見開いた。

流れるように文字が打ち込まれているのを見て。

『ようこそ！あなたは選ばれし者です。』

ここは、あなたの願いが叶う部屋。

あなたの今最も叶えたい願いがある条件と引き換えに叶います。

条件は願いの大きさや価値によって変わりますが、基本的には極簡単なものです。

そしてあなたの願いは異世界に行くこと。

条件は元の世界には二度と帰れなくなることです。

では行きたい世界の名前と欲しい能力を一つ入力してください。』

うん。言いたいことは色々ある。
あるが、とりあえずは後回しだな。
行くこと確定みたいだが、さして問題はない。
そう簡単に叶う願いでもないから大して期待もしてない。
だが、もし・・・もし本当に叶うなら。
これは願っても無いチャンスではある。
ほんの少しだけ期待してみるか。

行きたい世界・・・ファンタジーの世界が一番興味がある。
f a t e は、シリアスすぎてなんかなあ。
りりなのは介入時期を決められないと入りづらい。
フェアリーテイル・・・どう介入していいかわからん。
G S は横島がいるから論外。
セキレイは俺の能力関係ないから除外。
ゼロ魔は政治が絡むしなあ。
ここは手堅くネギまで行こうか。
個人的に原作破壊したい作品第一位だし。

後は能力だが、これはもう決まってる。
伊達に妄想してないぜ。
自慢にもならんがな。

「これで完了つと。」

最後にe n t e r キーを押して、すべての入力を終える。
ここまでくれば期待もかなり膨らんでいた。
これで何も無ければ・・・。

『それでは今からあなたの願いを叶えます。

Good luck!』

その文字を認識した直後、俺はまた意識を失った。

その頃、裕也がいた世界ではある男性が原因不明の死を遂げたことがニュースになっていたのを本人は知る由も無い。

第零話 テンプレ・・・とはいわずらいなにか（後書き）

無事プロローグを書き終えました。

率直な感想などありましたら、今後の精進のため気軽に書き込んでいただけたら幸いです。

稚拙な文ですがこれからよろしくお願いします。

第壱話 不幸？いやある意味幸運（前書き）

やっと本編です開始です。

主人公の能力は話の中で説明入れると思います。

はつきりいつてチートもいいところですが。

誤字脱字などあればご指摘いただければ嬉しいです。

ゆっくりでもいいから続けたいなあ。

第壱話 不幸？いやある意味幸運

やあ、みんな。

俺は夢かどうか判断しづらいことを体験した悠斗だ。

俺としては別に夢でもよかったんだがなあ。

今の状況を一言で表すなら、それは・・・

「あつあつ（転生かよ）。」

第壱話 不幸？いやある意味幸運

マジで漫画の世界に来れるとはね・・・。

正直予想外です、はい。

予想外と言えば目の前の人たちもただけだね。

少しきつそうな目をした特徴的な眉毛の綺麗な女性と

赤げの髪を持ち、子供っぽい笑顔が似合うイケメン男性。

『災厄の魔女』として知られるアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。

そしてこの物語の主人公の父親であり、『サウザントマスター』と謳われる紅き翼のリーダー

英雄ナギ・スプリングフィールド。

どう見てもネギの両親です本当にありがとうございました。

なんか感動。

あの非現実世界の人物が実際に現実として見ることができるなんて。

いや、最初は「え、俺ネギのポジション？」とか思ってたんだよ？

けど・・・よく見たらお父様が赤子抱いてんのよ（ちなみに俺はお母様に抱かれている）。

二次小説の中にもいくつかあったけど

どうやらネギの双子の兄弟設定らしい。

ん？俺がネギかもしれないって？

ハハ、んなの認めるか。

主人公に憑依or転生なんてやだよ。

「よし、お前の名前はネギだ！」

「ならそなたの名前はアリアじゃ。」

お父様が自分で抱いている赤子に向かってネギと名づける。

ここまではよかった。

ここまでは。

でもお母様。

私に微笑みながら名前をつけるのはいいのです。

笑顔もとても綺麗だと思います。

けど、けど・・・

それは女の子につける名前では？

え、おれ女の子？

――

結論から言つとそんなことはなかったです。

ちゃんとついていましたとも。

男の象徴シンボルといえる物が。

TS（性転換）物かと思ってかなり焦ってしまったが、正直双子の兄弟設定でお腹いっぱいだからね。

さすがにTSはね・・・。

でもまあ、両親があのだ二人ならある意味幸運かな？

魔力や才能とかやばそうだし。

いくら能力もらっても、不安は残るしなあ・・・。

貰った能力がどの範囲まで使えるのかわからないのもある。

大して使えなかったら・・・泣ける。

まあそれは追々、かな？

ちなみに今は『あの』村に預けられるとこ。

そつ、悪魔の襲撃がある村ですな。

目の前にいるのはスタン爺さんと思われる人物。

「それじゃあ、爺さん。この二人を頼む。」

「・・・この子達には親が必要じゃ。なぜそれがわからん。」

「それでも、それでも俺はこの二人とは一緒にいられないんだ。

だから・・・頼む。」

顔を歪めて真摯にお願いするお父様。

正直この姿を見て、胸が熱くなった。

今までは『子供の面倒もきちんと見ることができない駄目な親』って

そんなイメージだった。

けど、違う。

この人はそんな人間じゃあない。

心の中では誰よりも俺達の傍にいたい。

一緒に生きたい。

そう思っているはずだ。

人の顔色ばかり伺ってきた前世の俺だからわかる。

このお父様の表情は、悔しさと悲しみ。

たぶん、俺達二人の面倒を見ることができない自分の状況に対する悔しさ。

そしてなにより、こうすることしかできない悲しさ。

そんな感情が渦巻いてるって想像できる。

俺は初めて、父親ってものを尊敬したかもしれない。

「わかった。この子達二人のことは何があっても守ると誓う。

だから・・・必ず帰って来い。

それがお前とワシ、スタンの誓いじゃ」

「ハハ、変わってねえな。」

爺さんだけはいつも俺自身を見てくれたよな。

・・・わかった。

全てが終わったら必ず、帰ってくる。

それじゃあまたな爺さん。」

「ああ。」

そう言って、お父様は去った。

俺達二人はスタン爺さんに抱かれて

スタン爺さんはお父様が去っていった方を見つめている。

「馬鹿者が・・・。」

そう呟いた爺さんの表情は、色々な感情が混じり合っていて
俺には読むことができなかった。

ただ、爺さんの呟いた言葉だけは

やけに耳に、心に響くものがあつた。

第壱話 不幸？いやある意味幸運（後書き）

第一話終了です。

所々勝手な想像がありますが、大目に見てやってください。

次は村での生活から悪魔襲撃までになると思います。
能力も次に出すかな。

でわ、またつぎの話で。

第貳話 まさかここまでとは・・・やりすぎた感が否めない（前書き）

今回少し長めです。

能力解禁の回。

作者自体がやりすぎたかな、とか思ってたりなかったり。

悪魔襲撃まではいけなかったorz

皆さんの感想が怖いかも・・・。

第貳話 まさかここまでとは・・・やりすぎた感が否めない

新しい人生を歩みだした、悠斗改めアリアだ。

いやあこの村はいいね。

空気が清んでて、村人は優しく明るい。

もうずっとここに住んでいたいよ。

・・・現実逃避は止めにしよう。

さっき言ったことは事実だし

村が襲撃されるのはどうにかしたい。

けどさ

俺、正確な襲撃の日なんて知らねえよ・・・

第貳話 まさかここまでとは・・・やりすぎた感が否めない

この村に来て三年が経った。

俺とネギは今のところ健康に育っている。

これまでも色々あったさ。

一番はあれだな、おむ・・・

うん、忘れよう。

あれは羞恥プレイにも程がある。

敢えてヒントをだすなら

転生者が一度は通る道だな。

「ネギー！アリアー！遊びに行くわよー！！」

「あ、待つてよアーニヤ！」

「そんなに急ぐと転ぶよ。アーニヤ、ネギ。」

気がつけば三人仲良くいることが多くなっている俺達。

ネギ、アーニヤは漫画のまんま。

俺は背中に届くぐらいの髪を一つに結び

ネギより頭一つ高い身長。

はつきりいってお母様にそっくりな容姿だね。

一応体も鍛えてるけど、本当に筋肉ついてんのかってくらい細い。

女と間違えられることも多々あるのが悲しい現実だ。

だからと言って髪を切ろうとしたらみんなが『もったいない!』とかいって

切らせてくれない。

女に間違えられるのは勘弁願いたいよ……。

最近は三人の位置関係も大体決まってきた。

アーニヤ親分。

ネギはアーニヤの子分。

そして俺は……見張り?

見張ってるのは親分と子分の行動だけど。

まあそんな感じさ。

「今日はどつするの?アーニヤ、兄さん。」

「んーそうねえ……アリアは何かある?」

「特にはないよからなんにでもつきあうよ。

けどネギ、たまには自分の意見も言わなきゃ。

いつもアーニヤの意見ばかり聞いてちゃ

大事なときに何も決めることができないよ?」

「うう・・・兄さんの話難しくてわからないよ・・・。」

「ほんとよねー!ネギとは大違い!

というかほんとに年下なのか

しょっちゅうギモンに思っわよ?」

ぎくう。

この子は本当に鋭い時があるなあ。

そりゃあ前世で二十歳までの記憶もありますから。

君達は親戚の子供感覚で見てるからね。

子供好きだからつい世話焼いてしまう俺がいる。

・・・決して、けつつして、ロリでもシヨタでもないぞ。

そして今の会話からわかる通り、ネギの思考誘導中です。

光源氏計画みたいなものだ。

けど、効果があるのか・・・。

あつたら僥倖ぐらいに考えているが。

あんな驕り高ぶった正義の狂信者にはなって欲しくない。

「まだ難しかったかな。

まあ『そんなこと言われたな』くらいに覚えていればいいよ。

ネギは頭いいからね。」

「うん、わかったよ！

「というか頭いいのは兄さんの方な気がするんだけど・・・。」

「そうね、ほんとに三歳には思えないわ！」

まったく、としうえのいげんつてものが・・・ブツブツ。」

「ハハ、まあ俺はいいんだよ。」

二人ともその年にしてみれば十分すぎるさ。」

こっちは前世の知識があるのに、会話ができるってこと自体がおかしいだろ。

少しはわかるように話してるつもりだけどさ。

結局、アーニヤの提案により

村の外にある湖に行くことになった。

俺は専ら監視しながら本を読んでるけど。

今日もいつもの如く、童話（といっても原典に近い）に見せかけた魔導書を読んでいる。

あ、そうそう。

最近は能力について大分理解ってきた。

俺が欲した能力、それは『あらゆる能力、物質を創造する能力』だ。
定義が曖昧すぎたのが少し不安だったが、色々試してみた結果

はつきり言ってチートすぎる事が判明。

まず最初に実験したのが、インデックス禁書目録の能力

アクセラレータ
『一方通行』。

これができたら死なない確立が大幅に変わる。

前世では平穏な世界にいた俺としては、第一に死なないことを考えなければならぬ。

敵の攻撃は受けたくないし、どんな攻撃がいつ襲ってくるのか

そんなのわかる訳がない。

悩んだ末、『一方通行』の能力の一端である

反射があれば・・・と思っただのが切欠。

結論から言うと、実験は成功。

一方通行の能力を身につけた瞬間に、能力の使い方も頭に流れ込んできた。

これは思わぬ副産物だといえる。

ただ超能力は、よくわかんないが魔力とも気とも違う力を使っらしい。

能力が発動した時（一方通行ならベクトルを変化させた瞬間）に減り、もちろん空になれば使えない。

・・・ただ半日は使い続けられたけどね。

で、今日までに身につけた他の能力は

フェアリーテイルのエルザとグレイが使う魔法

『換装』と『アイスメイク』。

禁書目録からは黒子の

『瞬間移動』。

GSの横島が使う超稀少能力

『文珠』

あとは、みんなも知ってる真祖の吸血幼女エヴァ様が使う

『^{マギア エレベア}闇の魔法』。

これはちと改良してるけどね。

物質はもっと時間があるときにやろうと思ってる。

まあでも、一応悪魔対策はばっちりだ。

ん？そんなに必要ないだろうって？

備えあれば憂いなし、だ。

なにせ初めての戦闘だからな。

いつでもきやがれ、悪魔共。

俺の糧^{けいけんち}にしてやるよ。

第貳話 まさかここまでとは・・・やりすぎた感が否めない（後書き）

はい、もうなんか色々とごめんなさい。

感想は好きにお書きください。

こうなりやけだ！おれは自重をやめる！

第参話 悪魔襲来！RPGで言うスライム狩みたいなもん（前書き）

悪魔襲撃編です。

初めての戦闘なので上手く書けていないと思います。

ご指摘いただければ嬉しくて小躍りします。

第参話 悪魔襲来！RPGで言うスライム狩みたいなもん

俺は今村に向かって全力で翔けている。

ついに始まってしまったのだ。

悪魔襲撃が。

『一方通行』で移動速度を上げながら

景色が線に見える程の速度で飛ぶように駆け抜ける。

アーニャやネギ、お世話になったひとだけでも必ず助ける・・・！

第参話 悪魔襲来！RPGで言うスライム狩みたいなもん

その日は朝から嫌な天気だった。

空一面を覆う雨雲。

湿気でじめじめした空気。

けど降りそうで降らない雨。

何もかもが嫌になるようなそんな天気。

「ネギー！アリアー！外にいくわよ！」

「わかったー！ほら、兄さんも！」

だからだろう。

完璧に油断していた。

心の中で「まだ大丈夫なはず」と決め付けた。

「んー・・・今日は天気も悪いし家にいよう。

急に降ってきたら大変だろう？

服を汚したらきつと怒られちゃうよ。」

「えー！？

それじゃつまんないじゃないのよ!」

「ならアーニヤは怒りたいの？

アーニヤの両親、特におばさんは怒るとかなり恐いのにな・・・。」

「うつ・・・し、仕方ないわね！」

「うん。アーニヤは物分りがよくて助かるよ。」

そしてなにより

俺は彼女達を理解してあげてなかった・・・。

魔導書に読みいってしまい、気づくとアーニヤとネギの姿が見当たらない。

外を見れば雨がポツポツと降り出している。

俺はため息を一つ吐くとあいつらを探しに行くために腰を持ち上げ

る。

ふと頭に過ぎ^よったことがあったが、すぐさま否定し

外へと歩みを進めるのだった。

あの時、目をはなさなければ

外に出たのにすぐ気づいて追いかければ

頭に過ぎ^よったことを警戒していれば

また違った結果があったのかもしれない。

以前来た近くの湖まで着いた時、村の方から轟音が聞こえ
目を向けると煙が上ってえいるのが見える。

俺はすぐに理解した。

「っ！悪魔襲撃か！」

『一方通行』の力で足の裏にかける力を進行方向に全て向け

今もてる全力で村に引き返す。

『瞬間移動』は使えない。

あれは想像した場所に移動するので探索には向いてない。

ネギとアーニヤがどこにいるのかわからない以上

風漬しに探していくしか方法が考え付かなかった。

原作では助かっていたことを思い出したが、原作とは違い『俺』という存在がここにいる。

もしこのまま放置していたら、あいつら二人が助からない可能性もあるかもしれない。

それだけは、なんとしてでも避けたい。

俺ら二人の面倒を見てくれていたネカネさんも・・・。

そんな俺の視界に、見たこともない異形の者共が映る。

あれが悪魔。

正しく認識した瞬間に『換装』の魔法で天輪の鎧を引き出す。

全身が光に包まれ、光が収まると

金色の鎧を身に纏い周りには剣が何本も舞っている姿に変化する。

換装の光によって敵の一体がこちらに気づき、飛びかかろうとしてくる。

足が竦^{すく}み、全身が震えるが・・・それを気合で押さえつける。

殺^やられる前に、殺^やるしかない！

『瞬間移動』で相手の真横に移動し、舞っている剣の中から一本掴み腕を振り上げ

ベクトル変化を加えて剣速を上げながら腕を振り下ろし、一体の悪魔を切りつける。

そこから舞っている剣を操作し、追撃をかます。

「てんりん
ブルーメン
フラット
天輪・繚乱の剣！」

すれ違い様に流れるように連激を叩き込むと

相手の腕が飛び、足が胴体と離れ

胸に大きな傷が平行して二本ついていた。

相手は断末魔をあげ、消えていくが気にしている余裕などない。

一瞬でも気を抜けば・・・死ぬ。

他の悪魔達にも今ので気づかれてしまった。

かなりの数が一斉に飛び掛ってくる。

正直泣きたいほどに怖い。

頭のとっぺんからつま先まで死への恐怖に震えている。

足も上手く動きそうにない。

このままなら死ぬのは一目瞭然。

なら考える・・・考える！

思考を止めるな！生き残る術を探し出せ！

這いつくばってでもいい、無様な姿を晒してでも！！

っ！そうか！

足は上手く動かないけど

俺には物理法則を捻じ曲げる『^{ちから}一方通行』がある！

「邪魔を・・・するなああああ！」

サークル
ソード
循環の剣！！」

数本の剣を俺を中心に円状に高速回転させながら、足裏のベクトルを地面と水平に向け

莫大な推進力で悪魔の群れに突っ込み、次々に切り刻んでいく。

すれ違う度に悲鳴が聞こえ、霧散していくのを感じる。

それでも無我夢中で敵に向かって突き進む。

雄叫びをあげながら

視界に映る敵を全て消し去るまでは止まらない。

止めることなんて、できなかった。

何秒経ったかわからない。

何分経ったかわからない。

そして、ふと気がつくと周りには何もいなくなっていた。

「今のでとりあえずこの辺の敵は一掃したか・・・。」

初戦闘がいったん終了となり、興奮した心が幾分落ち着いてきた。

初めての戦場は思った以上に辛いものだった。

冷静さを全く保ってられないし体力の消耗も激しいときた。

経験つてもものが如何に大事か、身体で理解した。

けど、これで終わりではない。

「とりあえず、あいつらを探さなきゃ。」

奮える心を無理やり押さえつけ

震える体を無理やり動かし

全速力で探し始める。

立ちふさがる悪魔^{てき}をすべて切り伏せながら・・・。

第参話 悪魔襲来！RPGで言うスライム狩みたいなもん（後書き）

戦闘描写って難しい。

つい説明口調になってしまう気がする。

今回は、平穩に暮らしてきた人間の初の実戦。

その緊張感が伝われば・・・と思いました。

上手く伝わったらうれしいなあ。

でわまた次回、よろしくお願いします。

第肆話 なんといい噛ませ犬（前書き）

悪魔襲来編の中盤まで。

今回長め。

尚、この次まではまだぶろろーぐのようなものです。

だからあまり深くつつこまないでくださると・・・つつこまれたら対応や改変はすると思いますが。

ってかネギまつて語られてない部分がありすぎて脳内補完するのがめんどろだつたりorz

第肆話 なんといい噛ませ犬

「ネギ！アーニャ！」

俺は声を張り上げてあいつらを探す。

だが中々見つからない。

それに、悪魔サコの数が多すぎてキリがない。

焦りを押さえつけられないまま、とにかく突き進む。

くっ、急げ！

第肆話　　なんという噛ませ犬

あれから、冷静になって考えて見ると

ある事実に気づいた。

「俺、『一方通行』のおかげでまともなダメージ食らわないんだっ
た……。」

物理攻撃しかしてこない下級悪魔なら、攻撃の全てを反射できるだ

ろっ。

俺の理解を超える攻撃があるならわからないけど

下級にそんなのあるわけがない。

そもそも、そんなのあったら『下級』なんてつかないだろうし。

あれだ、ドラ○エのスライム。

そんなレベルの敵だし。

「なんか・・・一気に落ち着いたよ。

バカみたいじゃないか、俺。」

けれどこれが戦場の空気なんだろう。

独特の雰囲気、冷静に思考する力を尽く奪う。

まともに息をするのさえ許されない。

ずっと呼吸をしてないようにすら思えてくる。

その原因の根底にあるのは

死への恐怖。

「どうにか、慣れるようにしないと・・・。」

今後の第一目標にしよう。」

反省はここで一先ず終わり。

全てを終わらせてから、反省も後悔もすればいい。

今はしなきゃならないことがある。

ネギとアーニヤ・・・無事でいろよー!!

s i d e

アーニヤ

今日は天気が悪くて気分も最悪！

おまけに、アリアったら外に出たくないって言い出すし。

ま、まあ確かにウチの母さんは怖いけど・・・。

けどそんなのにひるむアーニヤ様じゃないわ！

「ネギ、ネギ。」

「どうしたのアーニヤ。小声で話して。」

「しっ！小声で話さないこのバカネギ！

アリアに内緒で外に出るわよ。」

「え、えええ・・・ムガッ。」

「バ、バカ！大声出すんじゃないわよ！」

私は小声で怒鳴り？ながら、ネギの口をふさぐ。

ちらりと横目でアリアの方を見るけどバレてはいなさそうね。

私はほっと胸をなでる。

「バレたらどうすんのよ！全く・・・。」

「ごめん・・・でもいいの？」

「ちょっとだけよ。すぐに戻ればいいじゃない。」

「うん・・・。」

なら出発よ！

そう、すぐに帰るつもりだった。

そしていつも通りにしかられて

またいっぱい笑って

毎日楽しくすごす。

そんな幸せな生活が待ってる。

けど、そんな日常は、簡単にくずれてしまう。

「なによ・・・これ。」

村の様子が変だと気づき

急いで帰ってきた私の目に映ったのは、いくつもの石像。

よく見ると、どれもこれも見たことのある顔だった。

いつも畑仕事をしているおじさんおばさん。

孫のようにかわいがってくれるおばあちゃん。

いつもしかられてばかりだけど、本当は優しいおじいさん。

「どっなってるの・・・何で石に・・・？」

そこで気づいた。

私の一番大切な人たちがいない。

私の・・・お父さんとお母さんが。

「ア、アーニヤ！」

何も考えられないまま、走っていた。

ネギの声も聞こえないままに。

今までで一番じゃないかってくらい速く走って

ようやく、自分の家にたどり着く。

息を整えもせずにドアを開いて見つけたのは、お父さんとお母さん。

石になりかけの・・・お父さんとお母さん。

私に気づいても、動くことのできない

お父さんとお母さんだった。

「お父さん！お母さん！」

夢中で叫んでいた。

叫ぶことしかできなかった。

何も考えられなかった。

いや、たぶん考えたくなかったんだ。

「アーニヤ……逃げなさい……。」「

真剣な顔を見せるお父さん。

「私達なら・・・大丈夫だから・・・ね？」

微笑みを浮かべるお母さん。

どう見ても、大丈夫なわけがない。

子供の私でもわかる。

人が石になるなんて・・・大丈夫なわけ、ない。

私は声を出そうとするけど

なぜか、なぜか声にならない。

自分の体じゃないみたいに言うことをきかない。

その間にも、お父さんとお母さんの石の部分は広がっていく。

もうすぐ

村の人たちと同じようになってしまう。

それでも声は、出してくれない。

「アーニャ・・・私達は大丈夫・・・だから。」

「アーニャが無事なら・・・それでいい・・・だから。」

「「幸せに・・・なりなさい・・・。」」

そして、お父さんとお母さんは

何もしゃべらなくなった。

「お、とうさ・・・おかあ・・・さん？」

私の目から、しずくがあふれてくる。

それはほっぺを流れて

あごからぽつぽつとたれていく。

次々と止まることなくあふれてくる。

「おとう、さん・・・！おかあ、さん・・・！」

本当は抱きつきたかった。

抱きついて、目からあふれるナミダが止まるまで

泣いていたかった。

けど、今抱きついたらいけない。

少しでも触れたら、壊れてしまいそうで

くずれてしまいそうで

それが怖くて

だから私は、その場に立ち尽くしながら

ただ泣くことしかできないのだ。

どのくらいそうしていただろう。

何分？何十分？何時間？

時間の感覚がなくなっていた。

ふと聞こえた、ドアが開く音でようやく意識が戻ってくる。

振り返るとそこには、今まで見たこともないような人の形をした何かがいた。

なんとなくわかった。

コレが・・・犯人だ。

お父さんとお母さん

村の人たちを石にした、犯人。

怒りが・・・憎しみが・・・

私の中でまるで台風のように渦巻くのがわかる。

こいつが・・・こいつが、コイツが！！

私から皆を奪ったんだ！！

「ふむ、人の気配をたどってみればまだ生き残りがいたのか。

お嬢さん。

すまないが、皆と同じように石になってもらうよ。」

けど、私は、わかってしまった。

これはヒトじゃない。

ヒトの形をしたもつと別の・・・そう

化け物。

目を見ただけで、理解させられた。

ああ・・・私・・・死ぬんだ。

怒りや憎しみ以上の感情が私を支配する。

「大丈夫だ。痛みはないよ。」

すぐに終わらせてあげよう。」

嫌だ、やめて、来ないで。

そう声に出したつもりだが、思いとは裏腹に口は開かない。

怖い・・・怖い、怖い！

まだ、死にたくない！

誰か助けて・・・

急に頭に浮かんできたのは

一つ年下だけどしっかりしてて

女の子みたいな顔だけど

それでも頼りになって

いつも一緒にいた

アリアの顔だった。

なんで浮かんできたのかはわからない。

だけど、だけど・・・

もう考えている暇なんかなかった。

私は目を精一杯とじる。

「たす、けて・・・お願い・・・。」

お願いだから・・・。」

「命乞いかね。まあ無理もない。」

だが、それも無理な相談だ。

そろそろ・・・。」

「お願いだから、たすけて・・・たすけてええ！アリアああああ
！！！！」

私は、大きな声をだした

今まで出したことのないほどの声で助けを呼んだ

届くはずのない声が・・・それでも

あいつに届くと信じて。

「助けを呼んでも誰も来ないさ。

この辺の人達は皆、石になった。

今更誰が来ると言うのかね？」

「俺だよ、阿呆。」

いつも聞きなれた優しい声

怒っているのか、少し低いが

それでも聞き間違えることのない声。

目を開けると、そこにはアリアがいた。

化け物の後ろから剣を突き刺し

とても怒った顔で相手をにらみ

けれど、誰よりも頼りになる

私には、私達にはやさしい・・・やさしい

アリアが立っていた。

アーニヤ side end .

第肆話　なんという噛ませ犬（後書き）

初めてのアーニャ視点。

ネギ視点より先に出すとはね・・・。

女の子視点難しいなあ。

上手く書く方法ないものか。

感想、お待ちしております。

第伍話 お父様再び・・・ってか呼び方が定着してる件（前書き）

悪魔編完結のお話。

次の話からやっとな原作に入れる気がする。

ここまでで、ひとまず主人公の能力をまとめようと思います。
次は主人公の設定資料書きましようか。

第伍話 お父様再び・・・ってか呼び方が定着してる件

「とりあえず、消えとけ。」

俺は悪魔から剣を引き抜く。

すると、煙のようになって散っていく。

でも死んだわけじゃあないんだよな。

確か魔界？に帰るだけ。

つか、今のやつどっかで見たことある気がするんだが・・・。

第伍話 お父様再び・・・ってか呼び方が定着してる件

やはり、原作知識はあてにならん。

参考にしかなんねえよそんなの。

危うくアーニヤ死ぬとこだったじゃねえか・・・。

「アーニヤ、無事か？」

ちなみに、今は俺にしがみつながら泣いている。

さすがに四歳にはきついよなあ・・・。

村は崩壊寸前だし、村人はみんな石にされ

そしてなにより、

「おじさん、おばさん・・・。」

親まで石化してるんだもんな。

下手したら、目の前で・・・とかありそうだし。

あー、完璧俺のせいだよな。

原作はこの辺あんまり詳しくないけど

少なくともこの世界では助けられたかもしれない。

IFの話しても仕方ないんだけどさ。

それでも、助けたかったなあ・・・。

悔いばっか残ってんなあ、おい。

「アーニヤ、じゅめん。」

この言葉に反応したのか、アーニヤは顔を上げる。

わかってる。

わかっては、いるさ。

ここでの謝罪なんて何の意味も持たないって事くらい。

ただの自己満足でしかないって事くらい。

それでも、謝らなきゃ気がすまなかった。

「おじさんとおばさん、助けられなくて・・・ごめん。」

考えりゃあわかることさ。

前世も含めて、今まで平穏な暮らしを送ってきた人間が

他力本願で生きてきた人俺が

他人を簡単に救うことなんざできるはずもない。

それが自然であり、必然でもある。

俺は天才でも神でもない。

チート能力があっても、所詮は一般人だっ たって話だ。

なら俺のできることは、 たったひとつだけ。

自分の手の届く範囲の他人

所謂大切な人だけでも、守りきる。

まずはその力を身につけ

必要ならば一の為に九を切り捨て

その一に手を出す者^{てき}には、等しく死を与える。

敵に情けをかけてやれるほど俺は強くも

優しくもない・・・からな。

「アリア、ありがとう・・・。」

俺は一瞬、思考回路がショートした。

ありがとう？

誰が、誰に言ったんだ？

アーニヤが、俺に？

なんで？

頭の中に疑問が次々浮かび上がる。

正直頭がいてえ。

意味が全く理解できない。

「なんで、だよ。」

「だって、アリアは私を助けてくれたじゃない。

お父さんとお母さんは無理だったけど

私は助かった。

それにさ・・・お父さんとお母さんは、まだ助かるかもしれない。

今は無理でも、いつか必ず助けてみせる。

そんなにあきらめのいいアーニヤちゃんじゃないわ!」

辛そうに、それでも笑顔を浮かべて言い切るアーニヤが眩しかった。

ああ、そうか、そうだよな。

まだ死んではないじゃないか。

何諦めてんだよ。

最後まで足掻いて足掻いて

足掻きぬこうぜ。

好きな漫画にもあつたじゃねえか。

「諦めたら、そこで試合終了ですよ。」って言葉がな。

今まで、諦めてばっかだったけど

一度くらい死ぬ気で頑張ってみようぜ。

前世で貯めてきた分、今世で使い切っちゃまうか。

「アリア？どうして泣いてるのよ・・・？」

「ううん、なんでもないよ。」

「ありがとうアーニヤ。」

「変なアリア・・・。こっちがお礼言ってるのに。」

これで合ってるんだよ。

気づかせてくれて、ありがとう

だからな。

この日の涙は、一生忘れないと思う。

俺の決意の証であり

責任の印でもあり

そして何より・・・

初めて、暖かい気持ちになれた涙だったからな。

s i d e

ネギ

僕は、たまに思うことがある。

僕と兄さんのお父さん、お母さんはなんでいないのか。

周りの人たちに聞くと『死んでしまった』らしい。

でも僕には死ぬってことがよくわからなかった。

死ってなんだろう、死って・・・なに？

お父さんの話はよく聞く。

『ピンチになったら現れる正義の味方』なんだって。

正義の味方・・・うん、かつこいい。

僕たちのお父さんはかつこいい正義の味方なんだ！

僕は、たまに思うことがある。

お父さんが正義の味方なら、僕が・・・僕の村が

ピンチになったら助けに来てくれるんじゃない？

だって、そう言ってた。

お父さんはピンチになったら、来てくれるんだ！って

そんなこと、思ってしまったから。

だからこんなことになっちゃったんだ・・・。

村に帰ってきた僕たちは

多くの村の人たちに出迎えられた。

ただ、動いてる人は一人も居ない。

みんなみんな、灰色で

まるで石みたいだった。

僕はぼーっとしていた。

今、なにが起きているのかわからない。

わからないけど、もしかしたら

ピンチになってしまったんじゃないだろうか？

でもお父さんに会えるかも、とは全く思わなかった。

それよりも、なんでこうなってしまったのか。

村の人たちはどうしてしまったのだろうか。

なんで動かないのだろう。

本当に石になっちゃったの？

お姉ちゃんとスタンおじいちゃんが来て僕の手を引いて村から出る。

なんだか急いでるみたいだ。

なんで急いで村から出るんだろう。

途中で変な男の人が現れる。

スタンおじいちゃんが話しているけど、耳に入ってこない。

今度はお姉ちゃんと二人で走る。

スタンおじいちゃんはあるのとお話があるのかな？

周りにいる変な人たちは、だれ？

ああ、そうか。

僕は、僕の村は今ピンチなんだ。

だから村から逃げてきたんだ。

僕があんなこと思ってしまったから

ピンチになってるんだ。

これは、僕のせいなんだね。

僕のせいなら、僕が責任とらなきゃいけないよね。

今一緒にいるお姉ちゃんだけでも

僕が守らなきゃ。

「お姉ちゃん、ぼくがまもる！」

ピンチってよくわからないけど、怖い。

怖いけど、責任とらなきゃいけないから。

お姉ちゃんを守る。

お姉ちゃんの前で手をひろげて庇うようにして立つ。

大きな声を出して、震える足を我慢する。

あまりの怖さに目をつぶってしまっ

けど、なにも起きない。

僕はどうなってしまったんだろう。

石になってしまったのかな？

痛くはないけど・・・目が開かないや。

ふと、頭の上になにか暖かいものがのっていることに気づく。

そーっと目を開けようとする。

今度はきちんと開いてくれた。

すると目の前には、僕とおんなじ色の髪の毛をした

男の人が笑顔で立っていた。

何か話しているけど、やっぱり聞こえない。

なんとなく懐かしい感じがした。

持っていた杖を僕に渡すと、「強くなれよ!」と言って背を向けて走り出す。

今度はちゃんと聞こえた。

僕は、大きな声でお父さん呼びながら決意した。

たったひとつ聞こえた、お父さんの言葉の通りに

お父さんみたいな強い人になることを。

ネギ

s
i
d
e

e
n
d

悪魔襲撃は終わった。

結局、生存者は四人。

それ以外は皆石になってしまった。

救助隊がきて、あれから気絶してしまったアーニヤを預け

そこでネギとネカネさんと合流。

お互いの無事を祝った。

無事お父様との再会も果たした。

・・・ネギがね。

自分の背より大きい杖を持っていたので会えたんだろう。

不満なんてないさ。

アーニヤを助けられたから。

でも、もし俺のこと忘れてたんなら・・・ねえ。

ふふふ。

再開が楽しみだ。

悔いは数えきれないくらい残ったけど、こう言っちゃあなんだが

いい経験になった。

しなきゃいけないこともわかったし。

これから原作開始までは特に何も無いから、準備だけはしておこう。

慣れない努力、してみようじゃないか。

どこまでいけるかわかんないけど。

いけるとどこまで駆け上がってやるよ。

魔法学校卒業までの約6年間、能力をつかいこなしてみせる。

待ってるよ？麻帆良！！

第伍話 お父様再び・・・ってか呼び方が定着してる件（後書き）

悪魔編終了！

自分の中ではここまでがプロローグ。

ようやく次から原作開始です。

よかったら見てやってください。

主人公設定（前書き）

主人公の細かな設定。

飛ばしても別に問題はありません。

w i k i が大分役に立った・・・

わからないところや疑問などあったら感想めをお願いします。

主人公設定

括弧の中は前世のもの

主人公の名前

アリア・スプリングフィールド（一 悠斗）

年齢

現時点で三歳（享年二十歳）

原作開始時期で九歳

身長

現時点は省略（182cm）

原作開始時期で160cm

体重

現時点は省略（68kg）

原作開始時で54kg

備考

小さいころからアリカそっくりの容姿。

成長すればするほど似ていつている。

よって女の子に間違えられることがしょっちゅう。

でも間違えられたら目のハイライトが消える。よって禁句。

いつも背中まで届く長い髪を後ろでひとつに束ね（ポニーではない）
ている。

本人は切りたいのだが、周りから「もったいない」と言われ中々切
らせてもらえない。

ちなみに、いつもネカネが髪を整えている。

口調は基本丁寧だが、本人がそう思っているだけで所々おかしい点
もみられる。

沸点は高い方。その分キレたら中々止まらない上、地の性格が出て
毒舌になる。

ほっとけない性格ではあるが、自分の器を理解しており身に余る行

動はしない。

（自分の人間性を下方修正しすぎているため、行動に移せないこと
もしばしば）

どこか合理的で諦めるのが早い。けど自分の決めたことは最後まで
貫き通す。

九の人々を切り捨ててでも一の人々を救う決意をする。

本人曰く「十を救うのはネギの役目」。

たまに天然っぷりを発揮。

鈍感なときもあれば鋭い時もある。

恋愛に関して言えば、自分がそういう感情を向けられるはずが無い
と決め付ける節があり

その可能性を真っ先に否定する。

前世で色々（ここでは割愛）あったせいで精神面がかなり歪んで育
っている。

人の表情を読めるようになったのはこのせい。

ネガティブ七割ポジティブ三割の思考回路。

実は前世で一 悠斗は死んでいるのだが、本人は全く知らないし今
後も気づかない。

死因は一切不明。

始動キーは『アマリス・クラリス・ヘルダリア』で由来は花。

本人は普通だと思い込んでいるが魔法に関して言えば実は天才。

前世から集中力は人以上にあつたことも原因の一つ。

集中しだすと自分の世界に入り周りで何があっても気づかない。

王家の魔力を受け継ぎ、魔力の運用だけで言えば既に魔法界トップクラス。

ネギよりも少ないが、それでも膨大な魔力を併せ持つ。

得意属性はネギと真逆で、闇・氷・影。

ナギとアリカに関しては、責任放棄してる駄目親として認識。

理由は簡単。

「責任も果たせないならこどもなんてつくんな。」だと。

でも別に嫌ってるわけではない。

この分は利子をつけて返してもらうつもり。

主にネギのために。

あの強さには個人的に憧れていたりもする。

能力

あらゆる能力、物質を創造するというある意味神に近いチートスキル。

ただ、もちろん限界はあるので劣化版と言ったところ。

想像力が必要で、すでにイメージがあるものが簡単。

アニメやゲーム、漫画の知識が多いアリアにはかなり万能的。

本人自体まだまだ把握しきれてないが。

今はチートスキル持ちの一般人程度。スキル持つてる時点で一般人とは言えないんだけどね。

今身につけている能力

超能力

禁書目録の能力。

使い方は理解しているが、原理は全くわかってない。

ただこの世界では魔力・気とは違う力を使うようで、主に脳を酷使する。

頭痛さえ我慢すれば半日は使用し続けられるらしい。

脳を使う理由は、頭で計算や状況判断でないと大惨事に至るから（自爆とか）。

アリアが一番頼りにしてる能力でもある。

『一方通行』

すべての力のベクトルを変化することができる、これだけでチートな能力。

だが計算が面倒だったり。

デフォルトで反射に設定しているので不意打ちには無敵。

原作のような無効化能力の持ち主でない限り攻撃を当てることすら不可能だと思われる。

ただ、ひよつとするとベクトル変化できないものもあるかもしれないので過信は禁物。

アリアが最も使う能力である。

『テレポート
瞬間移動』

頭で想像したところにテレポートできる素敵能力。

戦闘でも役に立つ。

だが、かなり正確な情報がないと発動しない。

目に見える範囲なら成功率は99%以上。

集中力がものを言う力。

距離によって力の消費量が変わる。

フェアリーテイルの魔法

独特な魔法が多い。

そんな中でも遠距離から攻撃できるものを選んでいる（恐いから）。

使用には魔力が必要。

『換装』

エルザの使用する魔法。

正確には『^{ザ・ナイト}騎士』と言う。

『換装』により自身の装備品（武器と衣服）を一瞬で変化させる魔法で武器のバリエーションは「剣」「槍」「斧」などがあり

衣服、鎧は100種類以上も所有している。

魔法空間に入れて持ち運び、そこから取り出して換装する。

・天輪の鎧

同時にいくつもの武器を操ることができる鎧。鎧の周りに剣が舞っている。

天輪・繚乱の剣

すれ違い様に、無数の剣で相手を連続で切り裂く。

循環の剣

数本の剣を円状に高速回転させ、相手を複数巻き込む。

乱戦用。

・黒羽の鎧くれば ようい

一時的に攻撃力（筋力）を大幅に引き上げる鎧。跳躍力も上昇する。

実はデザインが少し違うVer2があったり。

『アイスメイク
氷の造形魔法』

グレイの使う魔法で氷を様々な形に造形して攻撃する。

頭で想像したものを作り出せ、両手で動きをつけることにより氷を動かす。

（ハンマー大槌なら右の拳を上に向けた左の掌に打ち下ろす。なるほどの
ジェスチャーの激しい感じ。）

・シールド
盾

八方に広がる花のような形状の盾。広範囲を護ることができる。

・ランス
突撃槍

手先から無数の氷の槍を造り出し敵を貫く。

・フロア
床

辺り一面の足場を凍らせる。

ハンマー
・大槌兵

巨大な氷のハンマーを作り上げて落下させる。

ブリズン
・牢獄

相手を氷の檻で閉じ込める。

バトルアックス
・戦斧

氷の斧を作り上げる。

ランバード
・城壁

氷の壁を創り出す。

アイスゲイザー
・氷欠泉

地面から大量の氷を間欠泉のように噴き出させる。

アイスキヤノン
・冰雪砲

巨大な大砲を造形し、攻撃する。

『文珠』

GSから横島の持つ超稀少能力。

霊力をビー玉程度の大きさに凝縮したもので、漢字一文字の念を込めることで様々な効果を起こす事ができる（例：「爆」「防」等）。

「力の方向を完全にコントロールする能力」である。

攻撃、防御、治癒、攪乱とその能力は多岐にわたる。要するに万能。

一度作り出した文珠はアリア本人以外にも使用できる。

使わなければ消滅せず残るのでストックすることも可能。

複数の文殊を組み合わせることにより強力な効果を生み出すこともできるが、そのコントロールには超人的霊力が必要となり、誰でもたやすく出来るものではない。

アリアはまだ一つしか使用できない。要修行。

効果は必ずしも本人の意図に沿うものではなかったり、対象の状態が不適当だと能力は発揮されない（限界があるということ）など、

制限や問題点もある。

また持続時間と持続能力にも限界がある（防御に使った場合には一定以上のダメージを受けると壊れる）。

作成するのに時間が掛かる為連続使用をするとストックがなくなる（現在、一日に一個から二個。修行で使っているためストックなし）。

『闇の魔法』

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが開発した、究極技法「咸卦法」に匹敵するとまで言われる技能。

魔法を圧縮・掌握し、自らの思いのままに操る。

また、術式兵装として魔法を肉体に固定し、身体能力なども底上げできる。

感覚としては、身に纏うような感じらしい。

アリアはこれを自分が使いやすいうちに独自に改良した。

そして敵の力を自分のものとする究極闘法をも完成させる。

（エヴァンジェリンも完成形を思い浮かべながらも、技術的問題と使用対効果の関係で開発を断念した）。

切欠は敵の攻撃を受けたくない一心による。

発想としては、「あれ、敵の魔法を吸収できたら最強じゃね？」と
なんとも阿呆。

でもそれを実現するあたり、実は天才でもある（本人は能力のおかげだと思っており気づいてない）。

しかも、まだ試したことがないので本人は完成したことに気づけていない。

ここまでくれば正直闇の魔法であるかどうかすら疑わしい。

根本は同じだが全くの別物といっても変わりはない。

名前も独自でつけるつもり。

使用にあたり、闇が侵食するのだが

本人が大きな闇を抱えていることもあり、上手くコントロールできている。

だが、この先どうなるかはわからない。

物質の創造

能力開発ばかり行っていたため、まだ全然試せていない能力。

開発できた力を考えると、こちらも相当なものが作れると予想される。

なんにしても、想像力が必要。

必然的にコピーが一番楽になってくる。

これから次第。

主人公設定（後書き）

前世の話は番外編でいつか書くつもり。
いつになるかわかりませんが・・・。

やっと原作をはじめられるぞー！

第陸話 原作開始！けど特に何も考えてはいない。（前書き）

卒業までのお話。

主に修行内容とか。

第陸話 原作開始！けど特に何も考えてはいない。

あれからというものの、変わったことがいくつもある。

村は移動しなきゃならなかったし

メルディアナ魔法学校にも入学した。

ネギは魔法にのめりこんでいったし

俺も独自に修行した。

あ、そうそう。今アーニヤも一緒に住んでいるんだけどさ・・・

気づいたらたまに横で寝てるんだよねー。

なんで？

第陸話 原作開始！けど特に何も考えてはいない。

悪魔たちの襲撃のあと、まず俺が行ったのは『物質創造』。
どの範囲まで創れるのか、の実験だ。

マジックアイテムなど創れるのなら、エヴァの別荘なんか欲しいじゃない？

後は魔力封印の装飾品とか。

封印の方は、学校で鬱陶しい正義共が寄ってこないようにだね。

こっちは割と簡単に創れた。

だけど別荘が問題だったのよ。

外観やらミニチュアやらは能力ですぐにできた。

問題は、時間の設定の方。

能力で創るにはかなり無理があっただよね。

時間の概念とかイメージできるかよ。

仕方ないから試行錯誤しながら自分で作ってたさ。

それだけで三年かかったけど。

ま、まあでも、これからは一時間で二十四時間分の修行できるし？
結果おーらい・・・だよな、うん。

別荘の凄さ（造るのの難しさ）に泣きそうになったけど、なんとか頑張った。

今は専らその中で修行している。

最初は独学で色々やってたんだけど・・・うん無理。

何かいい案ないかなーって探してたら、ピキンとひらめいた。

あれ、フェイト・アーウェルンクスって人工生命体だよね？

どうにか創れないかなーとか駄目元でやってみました。

一発でできたけど。いや、まじで？

てか本当に人工生命体だったんだーとか、なんとなく思っていると

「アリカ姫！？」とか言いながら攻撃してきた。

記憶もちゃんとあるみたい。

少しむかついたから、返り討ちにしてやったけど。

女と間違えられたからじゃあ・・・きつとないよ？

ふふふ。

んで拘束しながら話をする、どうやら人形同士つながってるらしい。

こつちの話を軽くすると、『正直敵対したくないね・・・こつち側に来ないかい？』と宗教勧誘された。

別に嫌いじゃあないから保留しといた。

あつちも掲げる正義があるってだけだし。

「戦闘技術教えて」って素直に言ったら馬鹿を見るような目で見られたのは印象的だった。

それ以上強くなってどうすんの、みたいな目。

理由を説明するとなんか考えながら了承。

・・・交換条件出してきそうだな。

無理なやつじゃなければいいがね。

教えてもらったのは、主に近接と戦術。

それに、命のやりとりの経験。

近接は拳法を主に、体の動かし方を学んだ。

気の使い方も教えてくれた。

意外と丁寧でびっくりだよほんとに。

というか近くで見て気づいたけどフェイトまじでつええ。

動きに無駄がないし、隙もない。

能力がなきゃ瞬殺されるわ。

戦術は、とにかく模擬戦。

組み手に近いけどより実践的だ。

魔法、能力なしの真剣勝負。

これはきつかった。

何度気絶したかわかんねえよ。

フェイトも心なしに顔に笑みが・・・。

え、なんで笑ってんすか。

まさか最初のアレ根に持ってたたり？

いやいやいや、まじ勘弁願いたいよ・・・。

後で聞くと違ったらしい。

思ってた以上に楽しかったんだって。

教えるのとか俺との戦闘とか。

なんか、フェイトのイメージがここへきて完全崩壊だよ。

ここに、異端者と人工生命体の友情が芽生えた事を追記しておこう。

別荘にいるときに、今身につけてる能力の修行も行った。

あんまり芳しくないが。

『一方通行』が便利すぎるけどね。

『文珠』がまだ使えないってのがなあ。

今現在、二文字が最高だし。

剣、誰に習おう？

そして、今はメルディアナ魔法学校の卒業式。

ネギと同じく二年の飛び級で、アーニヤが一年の飛び級。

みんな同時に卒業できてよかったね！。

俺はたぶん学園長が無理やりねじ込んだんだと思うけど。

ん？理由？

だって魔力封印して通ったし、周りから落ちこぼれて言われてたから。

通ったって言っても年に数回しか行っていないけどね。

ナルトの影分身つかってほとんど行かせました。

くだらん授業なんざに時間を割く余裕なかったし。

けどさ、落ちこぼれて呼ばれるようになってからほぼ毎日

アーニヤがベッドに潜り込んでくるようになった。

襲撃以来、俺の前でだけ甘えるようになってはいたんだが……

初めて潜り込まれた時は焦った。

視界がピンクに染まってて身動きとれないんだから。

ちなみにピンクはアーニヤのパジャマの色だ。

いやさ、たまに寝ながら泣いてる時もあるんだよ。

それ見たらあまり拒否はできなくてなー。

甘いかもしれんがね。

話が逸れまくったけど、成績はよかったよ？

実践以外はネギよりいいし。

スタンスとしては、タカミチみたいな感じ。

だから、たぶん麻帆良で教師……主にネギのサポートになるんじゃないかな。

学園長が二人まとめると思うし。タカミチに任せられるし。

けどなあ。漫画読んでても思ったけど、立派な魔法使いはひどい。

見てて反吐がでる。

傲慢そのものだし。

ネギが染まってないか心配。

この六年間は接点なかったし。

お互いにひきこもってたからね。

俺は別荘だけど。

おかげで実年齢が二十歳突破。

強力な認識阻害魔法がかかるマジックアイテムが必須になった。

風呂のときも外せないし。

身長が175cmまでのびました。

なんかこれまずくね？

いずればれるフラグがビンビンに立ってるし。

『日本で教師をすること』

うん予想通りだね。

さてさて、麻帆良ではどこまで騙し通せるかな？

あ、原作どうするか全く考えてないや。

第陸話 原作開始！けど特に何も考えてはいない。（後書き）

次はいよいよ麻帆良へ。

サブヒロインはもしかしたらアンケートとるかもしれません。
そのときは、よかったら皆さんの意見をお聞かせください。

でわまた次話で。

第漆話 麻帆良到着！予想外の出来事？（前書き）

エヴァ編早く書きたいな！。

というわけで、どうぞ。

第漆話 麻帆良到着！予想外の出来事？

やってきました麻帆良学園都市。

原作キャラに会えるから俺としては楽しみ。

・・・エヴァ様の反応が怖い。

ネギは初っ端からやらかすんだろうなーとか考えてたんだけど・・・。

あれ？何、この状況。

第漆話 麻帆良到着！予想外の出来事？

今日は麻帆良に出發する日。

これまでにしたことと言えば、

フェイトに色々な技術習ったり

力を使いこなす為の修行したり

体鍛えたり

魔法や薬の研究したり

上位古代語呪文を暗記したり

挙げたらきりがないつす。

薬に関して言えば、自分で色々調合できるようになると便利だから。

あとフェイトさんは様々な技術を持ってます。

流石としか言いようがありません。

拳法なんてかなりの数使いこなせるし、主に中国拳法だけど。

少林拳・太極拳・翻子拳・八極拳・螳螂拳・鷹爪拳

どっから取り入れてんですかあなたは。

どうでもいいけど、ナルトの日向が使う八卦掌って中国拳法からきてるっばいね。

ええ、教わりましたとも。

型がものすごく似てたから聞いてみたら「八卦掌だけど、知ってるのかい？」だって。

く拳って名前だけじゃなかったんだね、中国拳法。

おかげで大分体の動かし方がわかってきた。

最初はほんつとに瞬殺されてたけど、今じゃ何時間かは持つ。

勝てはしないけどね。

どのくらい強くなったかは全然わからないのが難点ではある。

フェイトとしか戦ってないから当たり前だけど。

タカミチにはまだ勝てないかな？あくまで素の戦闘力での話だけど。

感卦法はまだ使えないし。

一度試したら暴発してさあ・・・

なにあれ怖くね？

やっててよかった魔法薬の研究。

治癒より役に立つよ。

お金を除けば、ね。

そうそうお金だけど、創造したものに魔法効果を実験としてつけて

適当な闇市に流して工面しました。

雀の涙程度の値段の物から、車が買えるような値がついた物まであってびっくり。

いやあ嬉しい誤算だね。

なんでも試してみるものだ。

ネギは相変わらず引きこもっていました。

日本で教師ってわかった時から今度は日本語の勉強をね。

それでも凄いいんだけどねえ。

三週間ってなにさ？

日本語難しいんだよ？？

俺はイギリスと日本が半々くらいだから大丈夫だけど。

アーニヤとネカネさんを誤魔化すのに苦労した。

「本場で学ぶのが一番」とか言ったら何とか納得してくれたみたい。

おかげで日本語の本に見せかけて、魔導書とか読む羽目に。

つてかネギとまともに顔合わすの久々だねえ。卑屈になってないかな？

ただいま日本に向けて空の旅としゃれ込んでいます。

見送りのネカネさんとアーニヤの顔ときたら、なんかもうね。

ネカネさんは心配で今にも倒れそうな

アーニヤは・・・泣きそうな。

やめて、そんなめで見ないでよまじで。

「行くのやめようかな？」なんて考えてしまった俺は悪くないはず。

それも無理なんだけど・・・やっぱり心配ではあるよ。

ちゃんと手紙出さなきゃね。

けど、久しぶりに二人っきりになったからやっぱ気まずいわ。

ネギがさっきから口を開こうとしては、閉じるを繰り返してるの。

今まで放置してたからなあ。

正直すまんかったと思ってる。

だから普通に話しかけてもいいんだよ？

「ネギ、これから不安だろうけど・・・二人で頑張ろう。」

俺にはサポートしかできないけどね。」

このままの空気は耐えられないので話しかける。

するとネギは驚いて、それから笑顔を浮かべた。

「うん！頼りにしてるよ兄さん！」

やばい、本当にごめんな、ネギ。

こんなにいい子に育っちゃって・・・。

罪悪感がメーター振り切ってます。

こんな俺をまだ兄と呼ぶこの子の純粋さが眩しいです。

「俺なんか頼りにならないさ。」

魔法もつかえない知識だけの頭でつかちだからね。

だから、こっちが頼りにしてるよ、ネギ？」

ネギが一瞬泣きそうな顔をする。

やばいやばいやばい。

罪悪感があああああ。

「うん！まかせてよ！」

「いよいよじゃのう。」

「ええ、どれだけ成長してるか楽しみです。」

ここは麻帆良学園女子中等部内にある学園長室。

そこで会話をしているのは、麻帆良の重鎮近衛 近右衛門と

魔法界では超有名人のタカミチ・T・高畑の二人だ。

タカミチは、ナギの息子である二人とは面識があり、来日を楽しみにしていた。

「けどのう……この資料は本当かね？」

「ええ。ネギ君はとても優秀ですよ。」

ナギさんの素質を確実に引き継いでいます。」

「それもなんじゃが・・・兄の方もじゃ。」

途端にタカミチは顔を顰める。

過去に会った時のアリアの反応を思い出していた。

「なんとも言えませんね。」

魔法を使うところなんて見る機会がありませんから。

ただ・・・彼もまた、天才であることは確かです。」

ナギとは違う、アリカ姫とそっくりな顔にどこか丁寧な対応。

いや、丁寧すぎる対応に最初気圧された事があった。

まだ年端もいかない子どもに、だ。

それからというもののタカミチはどことなく監視していたのを覚えて
いる。

けど何もわからなかった。

彼の考えや彼については何もかも。

「成績は魔法を除けば全部、ネギ君より上じゃからのう。」

「ええ。話によると、僕と同じ体質らしいですが……」

こればかりは見てみないとわかりませんね。

ただ、僕と同じなら……。」

「うむ。そのときは頼むぞい。」

このままにしておくのは勿体無さすぎる能力じゃ。」

それぞれの思惑が交錯して、夜は更けていく。

日本に、麻帆良に着くまで色々な話をした。

まるで今までの分を取り戻すかのように、ネギの話は止まらない。

それを微笑ましく見ながらも、本国や正義馬鹿の魔法使いにならないように

思考を誘導しながら、俺も話をする。

エヴァ様の話も使わせてもらいました。

勝手に話してごめんよー。

けど効果は抜群だったみたいで、深く考え込んでいた。

うん考えることはいいことだ。

「すぐにはわからないかもしれない。

けど、いつだって思考するのを放棄しては駄目なんだ。

ちゃんと自分で考えて、そして行動に移す。

流されたり、深く考えずに行動するのはよくないことだよ。

自分でやったことには責任を持たなきゃいけない。

それなら、納得のいくまで考えてからでも遅くはないだろう？

考えるってことはそれだけ大切なことなんだ。」

「んー……。相変わらず兄さんの話は難しいなあ。」

「今はわからなくてもいいよ。」

ただ、迷ったときは思い出してごらん？

きつと悪いことにはならないから。」

「うん、わかった！考えて行動するかあ……。。」

自分の世界に入るネギ。

これで茶々丸を襲うことはないだろう。

その原因であるカモはどうすつかな。

なんだかんだ言って、あいつも必要なんだよな。

んー、現物を見て判断・・・が一番かな？

バスの中ではネギのくしゃみにより、かなり目の保養ができた。

拳骨はしといたけどね。

暴走させるのはまずいっしょ。

けどさ、黒とか赤、紫はまだ早いんでない？

何がと言わないが。

「迎えがないね・・・兄さん。」

「いないね・・・ネギ。」

道わからんつつうの。

まあこの女の子達についていけばいいんだけど。

仕方ない。

「流石に二人そろって遅刻はまずいかな。」

ネギ、先に行って連絡頼むよ。

「この女の子達についていけば大丈夫だから。」

「え？ぼ、僕？」

兄さんはどうするの?」

「身体強化できるネギの方が速いからね。

俺は後から追うよ。」

「う、ううゝ・・・すぐに来てよ・・・?」

不安げなネギの表情がかわいいです。

実際は俺のほう速いけど、俺は『落ちこぼれ』だからねー。

いや、本当に面倒です。

けど立派な魔法使い（笑）に目をつけられるよりかは・・・ねえ?

守る対象が増えるのも考え物なのよ。

今考えてるのはネカネさんとアーニヤだけ。

ネギ? いやいや必要ないでしょ。

あの子は自分で頑張るさ。

そのお膳立てくらいはやらせてもらっけど。

だから、A組の生徒達とは近すぎず、遠すぎず

やっていこうと思います。

あ、エヴァ様は別。

あの人は守る必要ないし、あの知識は欲しいし。

できれば協力関係を結びたいところです。

さて、ゆっくり周りを見ながら歩きますか。

「こんっつのガキーーーー！！取り消しなさいよ！！」
「！」

「あわわわ・・・ほ、本当ですよ!？」

「本当って言うんじゃないわよっ!！」

・・・ああ、忘れてた。

そっいえばこんなあったなー。

今じゃ話の大筋しか覚えてないや。

一応、メモは残してあるけど。

「はあー・・・なにやってんだか。」

「ごめんなー。あの子の知り合いなん？」

「あ、どうも初めまして。

あの子の兄であるアリア・スプリングフィールドといいます。」

「ほえーやっぱり外人さんなん？

うちはこのか言っんよ。よろしくなー？」

生このかきたー。

いやーかわいいね。

このおっとりした雰囲気がなんとも。

嫁にはいらないけど、うん。

とにかくよろしく願いしますっ。

後は、こっちの方だなあ。

「あの一、すいません。

この子が何かしましたか？」

「何かしたなんてもんじゃ・・・って、え？」

それから起こったことは、俺には全く理解できなかった。

いや俺は悪くない。

誰がこんなこと予想できんだよ。

誰にもできないだろ、これは。

「きゃー！」とか「な、なにしてるんですか!？」とか聞こえるが
今はそんなことより、だ。

なんで、アスナに抱きつかれてんのさ。

s i d e アスナ

今日は朝から気分がよかった。

すっきり起きたし体調もバッチリ！

さあ、楽しい一日が始まる！

・・・ハズだったんだけど。

登校中にいきなり「失恋の相がでてますよ」とか言われて

キレた私は悪くないわよね？

そりゃあ、高畑先生との恋が叶うはずもないなんてわかってる。

けど、他人に言われんのはムカつくわ！

しかも私のだいつつ嫌いなチビ餓鬼によ！？

絶対許さないんだから！！

「あー、すいません。

この子が何かしましたか？」

何かしたなんてもんじゃないわ！

そう言おうとして、話かけた人の方を向くと言葉に詰まった。

そこにいたのは、私と同じくらいの身長の外子さん。

私には外人さんの知り合いなんていない。いないはず。

だけど、どこか懐かしくて、何故か悲しくて。

気づいたときにはもう、私はその人を抱きしめていた。

アスナ s i d e e n d

「あ、あのー。どうかしました？」

一瞬固まった俺を許してくれ。

決して、柔らかいとかいいにおいとか

ましてやもうちょっとだけ、なんて思っていないからな？

ほんとだよ？

すいません、ほんとはちょっとだけ思いました。

「あ・・・あ、あああ、あの！」

「なんでしょう・・・とその前に。」

「これ、使ってください。」

「へっ？」

「涙、拭いてください。」

「これでは俺が泣かせてしまったみたいだ。」

うん、なんとなく、理解した。

そう言えば俺って益々アリカお母様に似てきてるんだった。

だから少し思い出しかけた・・・ってのが真相かな？

本人も無意識だったみたいだし。

泣いてるってことは、懐かしかったのかな？

「ハンカチ、ありがとうございます。」

えっと、あなたは？」

「俺はその子の兄で・・・。」

「おーい！ネギくん！アリアくん！」

タカミチ空気読め。

いや、でもちよつとよかったと言えばよかったのか？

「あ、タカミチ！」

パタパタと高畑に駆けてくネギ。なんか犬みたいだ。

尻尾が見えるぞ。

「えと、ちょっといい、ですか？」

「はい？ああ、先ほどは弟が失礼しました。

弟はネギ、私はアリアと言います。

よろしくお願いしますね。」

「あ、えっと私は、神楽坂明日菜・・・です。

さっきはごめんなさい。

あと、ハンカチ、ありがとうございました。」

「ああ、いいですよそんなこと。」

女性の涙は苦手なもので・・・ね。」

これは本音。

武器にする人もいるのが信じられない。

見分けつくから俺には通用しないけどねー。

「それで、あの、どうしてここに？」

「ここ、女子中等部ですよ?。」

「彼等は良いんだよアスナ君…久しぶり、アリア君」

「た、高畑先生！」

んーやっぱり好きなのね、タカミチのこと。

勿体無いなあ。

アスナなら男がほっとかないのに。

「お久しぶりです、高畑さん。

学園長室までお願いできますか？」

「ああ、このままじゃ遅刻してしまうからね。

アスナ君たちもついてきてね。」

ようしいざゆかん、大妖怪ぬらりひよんの根城へ！！

あの後頭部を早く拝みたいぜ。

あ、俺ってなんの教科なんだろう？

英語・・・の補佐かな？

第漆話 麻帆良到着！予想外の出来事？（後書き）

補足として、アリアの身長は165程度です。

九歳でそれはねーよとかの突っ込みは・・・できる限りなしのほうで。

突っ込むなよ！いいか、絶対突っ込むなよ！

認識阻害のかかるネックレス以外には

魔法封印

幻術

のかかるマジックアイテムを身に着けています。

幻術は、九歳のときの姿に設定中。

ほかに何かあれば感想へどうぞ。

第捌話 初対面、2・Aの乙女たち！・・・見た目から明らかに普通じゃねえ。

昨日投稿するつもりが気づいたら日にち変わってたという。

ちかれた。

第捌話 初対面、2 - Aの乙女たち！・・・見た目から明らかに普通じゃねえ。

俺は2 - Aの教室を見渡す。

実はちょっとした夢でもあったんだ。

教職につくことがね。

だからなんか感慨深いものがある。

しかも漫画のキャラ達の副担任だなんて・・・。

けど、一目見て思った。

こいつら本当に中学生か？

第捌話 初対面、2 - A の乙女たち！・・・見た目から明らかに普通じゃねえ。

「ふむ、よくぞきたな。ネギ・スプリングフィールド君

アリア・スプリングフィールド君。

まずは卒業証書などを見せてくれんかのう。」

やってきました学園長室。

中で待っていたのは……。

いや、人間ではないでしょう？これは。

ぬらりひょんとか仙人とか、そう言われたほうが納得できるって。

「ええと、あなたは日本の妖怪か何かでしょうか？

学園のトップに人外を置くなんて……。」

「ちょ、兄さん!？」

「ふぉ!？わしはれっきとした人間じゃよ!？」

だって信じらんねーもん。

脳みそどうなってるの？

まさか、魔法でなんかしてるとか設定が実はあつたり？

ネギの顔は相変わらず面白いです。

なんか、「思っても言っただめです!」みたいな顔。

タカミチは苦笑してるだけだし。

その顔は同意してるのと同じだ。

「ま、まあいいじゃろ。」

「ここでの修行はとても厳しい。

それでもやるかね？」

「はい!!」

「勿論です。」

「あいわかった。

せいっぱいがんばるんじゃぞ。

それと、アリア君はちと残るってくれんかの？」

ネギが退室して部屋には学園長とタカミチ

そして俺だけが残る。

最後までアスナがうるさかったが気にしないでおう。

気持ちはわかるんだけどね。

問題は、残された理由だ。

恐らくは魔法についてのことだと思っんだが・・・。

実年齢とかばれてないよな？

「・・・なんで残されたかわかるかね？」

「魔法のことについて、と予想していますが。」

「まあそのとおりだよ。」

それで、魔法が使えないというのは？」

よかった。

たぶんまだばれてはいないようだ。

けど気を抜かずに隠し通せるところまで隠し通さないと。

にしても、タカミチがここにいるってことは

俺が呪文詠唱できない体質なら修行をつけるつもりか？

んーどうしようか・・・。

感卦法は欲しいが、居合い拳はいらねんだよなあ。

とりあえずは、保留かな？

エヴァに教えてもらえるかもしれんし。

「私自身よくわかっていません。

呪文詠唱ができないのか、それとも・・・。」

「ふむ、ここにいる高畑君も生まれつき呪文詠唱ができない体質でな？」

「ええ、存じています。」

呪文詠唱できないながらも居合い拳と呼ばれる技を用いて

AA+の領域まで上り詰めた魔法世界の超有名人。

噂によれば、究極技法である感卦法アルデマ・アートまで使えるとか。」

「ほう、よく調べているね。」

まあこのくらいは普通に調べるでしょ。知ってたけど。

知らないところに足を踏み入れるんだから。

ねえ、この学園最強の魔法使いがくえんちようさん？

「君の情報は正しいぞ。」

なにかあれば、高畑くんをたよりなさい。」

「ええ、そうさせてもらいます。

これからよろしく願いますね。

それでは、あまり遅くなつてはいけないのでこの辺で失礼します。

」

さてこれからどうなることやら。

学園長は愉快犯だと思つんだ。

だから警戒は怠らないでおこう。

ネギの魔力を頼りに2・Aまで来ると、ネギがもみくちゃにされていた。

あの顔もなんと面白いが、このままじゃ話が進まない。

「はあ・・・仕方ないか。」

俺は扉の影に身を隠しながら、震脚を使って大きな音を出す。

こんなことで実力をばらすなんて真似はしない。

教室が静まったのを見計らって扉をノックする。

「失礼します。ネギ先生、説明お願いできますか？」

話しかけてからやつとネギが再起動する。

そんなんじゃあやってけないぞ、ネギ。

強く生きろな・・・。

「あ、えっと、このクラスの新しい副担任です。

自己紹介お願いします、兄さん。」

「わかりました。

今日からこのクラスの副担任となりますアリア・スプリングフィールドです。

主に英語をネギ先生と二人で教える形になります。

ネギ先生とは血のつながった兄弟ですので、弟ともどもよろしく
お願いしますね、皆さん。」

シンと静まり返った教室内。

俺、何か間違った？

そう思って皆の顔を見ると、一人の眼鏡っ子が手をあげて質問して

くる。

朝倉か？

「あの、先生って・・・女性、ですか？」

「ふふ、ふふふ・・・。」

先ほどネギ先生が『兄』と言ったはずですが・・・？」

髪切ろうかなー、本気^{まじ}で、真剣に。

じゃないと、いつか衝動で人を殴ってしまいそうですよ・・・ふふ。

小声で「あんなに綺麗なのに？」やら「うそ、負けた・・・。」やら聞こえるのは気のせいだ。

ああ、気のせいだとも。

「でも、よく見るとかつこいい・・・。」は誰だ？

名乗り出たら飴をあげよう。

ってか髪は切ろう。うん、そうしよう。

「えと、なら兄ということは、今何歳？」

「ネギ先生とは双子ですので同じですよ？」

数えて現在は九歳ですね。」

あ、また静まり返った。

これは・・・総員対ショックに備えて！

「「「ええ~~~~~~~~~!!?」」」

変に纏まりあるよなあこのクラス。

その後はとにかく質問ばっかでした。

女性体験とか聞くなよ。

九歳に何を期待してるんだか。

メールアドレス教えてとかもあつたなあ。

まだ携帯持っていないから買ったら教えてあげようか。

学園の経費を落とさせましょう。

必要だしね。

にしてもだ。

こいつら、一部を除いて一般生徒だろ？

いくら魔法の素養があつたり、他の才能があつたとしても

一つのクラスにまとめるのはよくないんじゃないか？

はつきり言つてこのクラスは異常すぎる。

魔力や体捌きを見たら大体わかる。

その辺が普通なのは、四葉、長谷川、村上、那波、早乙女、鳴滝姉妹、釘宮、

和泉、柿崎、椎名、雪広、葉加瀬、宮崎、ザジぐらいか？

その中でも本当に普通なのは村上、那波、釘宮、和泉、柿崎、鳴滝姉妹、宮崎、ザジか？

判断しづらいが（運動能力とかはね）。

四葉は料理屋やってるし長谷川はネットアイドルでハッカー。

早乙女は腐だしラブ臭かぎ分けるし。

雪広は社長令嬢、葉加瀬は天才で超一味。

まあほんとはみんな魔法になんて関わんない方がいいんだけどね。

けど、そんな中に俺ら英雄の血筋を投下するってことは

パートナー候補って意味もあるだろ。

ほとんど魔法を知らないのに、秘匿はどうしたんだってまず言いた

そして、学園長。

あんたは自分の生徒達の命をなんだと思ってるんだ？

魔法に関わること、しかもそれが英雄の息子だなんて

危険なことは魔法使いなら誰でもわかる。

それをこんな・・・外道だ。正しく外道。

タカミチ、あんたも同罪だ。

この辺に『立派な魔法使い』を毛嫌いする理由がある。

正直、反吐が出るなんてもんじゃない。

傲慢すぎる。神か何かと勘違いしてるのかお前らは。

放課後、住む部屋を聞いてないことに気づいた俺は学園長室まで訪

ねる。

全く、馬鹿だよなあ俺も。

「失礼します。」

「ふぉ？どうかしたのかの？」

「いえ、私の住む家を聞いてなかったもので。」

「おお、そうじゃった！すまんのう、わざわざ来てもらって。」

ボケたのか？じじい。

まあ確認しない俺も悪いんだが。

「いえ、別にかまいませんよ。」

それで、どこの住めば？」

「ふおおっふお。まあそう慌てなさんな。

もっじき来るわい。」

「じじい、入るぞ。」

・・・そうきたか。

恐らく、監視の意味もあるんじゃないか？これは。

あの『闇の福音』が同居人なんてな。

いや、まてよ？

これは逆にチャンスでもあるか・・・。

上手く協定を結べれば、だが。

「彼女が私の同居人ですか？」

確か、エヴァンジェリンさんでしたよね。」

「そうじゃ。彼女のところに住んでもらえんかの？」

「まあ、元より選択肢なんてないわけですが。

わかりました。

今日からお世話になります。」

「ふん。好きにしろ。

まあ無料では住^{ただ}ませてやらんがな。

着いて来い。」

「では、失礼します。」

さあて、交渉開始、かな？

あんたの好きにはさせんよ、クレンジイ学園長。

「まさかあの『闇の福音』と同居することになるとは・・・ね。」

「ほう。貴様、私を知っているのか？」

「六百年を生きる吸血鬼の真祖。」

魔法世界では『不死の魔法使い』『悪しき音信』『禍音の使徒』

などの通り名で恐れられている元六百万ドルの悪い魔法使いの筆頭。

立派な魔法使いの敵ですね。」

まずは、こつちが知ってることを示す。

そのくらいはしないと興味すら持たれない可能性があるから。

とりあえずはこんなもんか？

「ほう、なかなかの知識だ。」

「まあ、このぐらいは。」

あとは研究者でもあると噂にありましたかね。

その知識はすごいものがあると。」

少しの嘘も混ぜて相手を持ち上げる。

これに乗ってくるかどうかで交渉のし易さが大幅に変わる。

「ハハハ！そうかそうか。」

中々話のわかる奴もいるもんだな。

私は研究者でもあるし知識は大量にある。

なんせ六百年分の知識があるからな！」

「流石・・・大魔法使いは違いますね。

私にとって脅威そのものですよ。」

「そうだろうそうだろう！」

もつと敬え！崇め称えろ！」

乗ってきたのはいいんだが・・・。

エヴァンジェリンってこんなキャラだったの？

随分ぶつとんでるなあ。

立派な魔法使い目指してるなら崇めても称えても

敬つても駄目な気がするし。

まあいいや。

交渉し易くなつたことで深く考えないでおこう。

「しかし、サウザント・マスターに負けてその力を封印された．．．らしいですね。」

こんな所で中学生をやってるのには驚きましたが。

呪いでも掛けられたんですか？」

「．．．そうだ。あの忌々しいナギの奴め。」

適当なことばっか言って結局呪いを解きに来ないまま．．．。

聞けば十年前に死んでいるではないか！

大体、貴様らの父親だ！」

「まあ、大体知っています。」

「まあ、いい。」

こっちには餌が自分から転がり込んできたんだからな。

フッフ、覚悟しろよ?」

まあ、死なない程度なら血くらいあげますけど。

その前に、交渉を決定づける餌を撒こうか。

上手く食いつけ、エヴァンジェリン。

「それよりも、サウザンド・マスターの情報、いりませんか?」

「なにっ!？」

奴は死んだらう!!

いや、それよりも・・・お前何を考えている?」

「その辺はゆっくりと家で話しましょう。」

今夜は付き合ってもらえますよね?」

「・・・っち! いいだろう。」

つまらん情報なら血を吸い尽くしてやるからな!」

餌には食いついたな。

これで交渉はほぼ上手くいくだろう。

てか入れ食い状態だし。

さてさて、これからどう立ち振舞おうかね。

その後、歓迎会に参加してご飯食べた。

いや、四葉さんの料理半端ないっす。

まじで今まで食べた中で一番上手かった。

騒がしかったけど。

でも、このクラスなら退屈はしないな。

頑張って教師しますかね！

・・・できるだけ巻き込まない方法で。

第笈話 盟友は吸血幼女？だけど見た目に反して彼女はすごかった（前書き）

間違いや気になる点がありましたら感想へお願いします。

第幾話 盟友は吸血幼女？だけど見た目に反して彼女はすごかった

今の状況を整理しよう。

俺、エヴァハウスでソファに腰掛けている。

茶々丸、こちらを黙って見つめている。

時々「録画中」なんて聞こえるが無視だ無視。

エヴァさん・・・俺の膝の上で首に噛み付いている。

あれ、もっと他の方法でいいんじゃないの？

第笈話 盟友は吸血幼女？だけど見た目に反して彼女はすごかった

「で、さっきの話はなんだ。」

「そう急かさなくてもいいじゃないですか。」

「その前に約束して欲しいことがあるんですが。」

「只今、エヴァさんのログハウスで交渉中。」

「大分急かしてきます。」

「これはもう決まったも同然だな。」

「どれだけの条件をつけられるか、が勝負だ。」

「ならさつさと言え。」

条件次第ではのんでやらんこともない。」

「そうですか。それなら・・・

あ、結界お願いできますか？

監視とかついてそうなんです。」

「なぜそこまで・・・いや、わかった。

それだけの価値があるってことか。」

そういうことですねえ。

個人的に聞かれたくない話もあるし。

・・・もう結界張り終えたみたいだ。

すっごいなー。展開速度はんばねーっす。

それにしても、魔法は完全に使えない訳じゃなかったのね。
それを試したのもあつたんだけど。

「うん。これでいいかな？」

ええとまず、サウザンド・マスターの情報からでもいいですか？」

「いいから話せすぐ話せとつとと話せ！！」

なんかここまでくると・・・うざいなあ。

胸倉つかまないでよね。

苦しいから。

「・・・父は生きてますよ？」

六年前にネギが杖もらってます。」

「それは本当か！？」

嘘だったら承知せんぞ！！」

「なら調べればいい。」

あなたなら見ただけでわかるはずだ。」

あの人に呪い掛けられたならね。

「いや、そうか、奴は生きてるのか・・・。

フフフ、そうかそうか。会ったらどうしてやるつか。

まずは一発ぶん殴る。それから・・・。」

自分の世界に入っちゃったよこの子。

戻ってくるまで時間かかりそうだなー。

「あ、茶々丸さんお茶ください。」

それにしても美味しいですね、これ。

流石茶々丸さんだ。まだ会って一日目ですけどね。」

「感謝の極み。」

久しぶりにマスターの楽しそうな表情が見れたその御礼です。」

この子欲しいなー。

超に頼んだら造ってくれないかな？

てかさつさと戻って来い吸血少女。

「ああ、久しぶりに気分がいい。

おいアリアとか言っただか？

お前の望みはなんだ？お前は何を考えている。」

「本題はそこですね。

私の望みはあなたの知識です。」

「なに？お前は立派な魔法使い候補じゃないのか？

なら『闇の福音』の名が何を意味するかわかるだろう。

まして頭のいいお前なら尚更だ。」

お、エヴァさんから頭がいいって言われた。

これはちょっと嬉しい。

「私個人としては、立派な魔法使いなんてどうでもいいです。

赤の他人を助けて何の足しになると？

そんなただの自己満足でしかない。

それなら、私は私の大切な、近しい人たちを助けられればそれでいい。

自分もその中に入ってますが。」

「他の人間は見捨てる・・・と？」

「助けられるときは助けます。」

寢覚めが悪いですし、恨まれたくありませんから。

ですがそれは所詮自分の為でしかない。

自分や自分の周りにいる人々とどちらか選べと言われたら

私は迷わず赤の他人を切り捨てます。

その規模がどれくらいであろうと。

それでもし、自分の周りにいる人から恨まれようが

どうだっていいです。それも自己満足でしかないのでから。

結局は自分が可愛いんですよ、私は。」

俺が大切な人を守ろうとするのも、結局は自分のため。

自己満足でしかない。

そうだとわかってて、それをしようとするのは
単なる我侔。

俺はそれを理解してるから。

「だから私は立派な魔法使いに興味はありません。

そしてこう言う生き方しかできません。

私が私であるために。」

「フッフ、面白い、面白いぞアリア・スプリングフィールド!!

貴様のその考え、立派な魔法使いとは正反対

私達と同じ側だ。

それを理解しているのか？」

「正義、なにを持って正義と言っんですか？

逆もまた然り。

そんなもの個人で違います。

これと言った正しい答えなんて存在しません。

また、一人ひとりが持っています。

私が思うに、正義の反対は悪なんかじゃあない。

それは他の人が持っているまた別の正義ではないかと。

なら、私は私の信じた道を行います。

それが、大衆から見て悪だと言っのなら

私は悪で構いません。」

それが俺の道であり、我俣だからな。

そのための障害は全て叩き潰す。

誰にも邪魔なんかさせやしない。

そのための知識、技術、経験が欲しいんだ。

だから。

「だから私は、私が私の道を進むために

私が私であるために

あなたの知識の全てが欲しい。

私が死なないために。

障害を全て叩き落すために。」

「自分を正しく理解している・・・か。

お前、私のものにならんか？

その年でその考え、遊ばせておくには惜しい。」

「とても魅力的なお誘いなんですけどね。」

それでは足枷がついてしまう。

私が死んでしまうんですよ。

アリア・スプリングフィールドと言う人間性が・・・ね。」

そう。

それじゃあ俺は死んでしまう。

もし、自分の生き方を変えてしまったら

それはもう俺の姿をした別の何かでしかないんだ。

「その知識の全てを私に教えてくれませんか？

エヴァンジェリン・A・K・マгдаウエル。」

「・・・いいだろう！」

私の全ての知識、その身に叩き込むがいい。

但し、逃げ出すことは許さん。妥協もだ。

いいな？」

元々逃げるつもりも妥協するつもりもない。

そのために頼んだんだからな。

じやなきやこんな危ない橋渡んねえよ。

俺は臆病だから・・・な。

「それこそ愚問ですね。」

代金は私の血でどうですか？」

「先ほどの情報とは別にか？」

「あんな情報とあなたの知識が同等とは思えません。

私の血を定期的に提供します。どうです？」

「ふむ、なかなか交渉が上手いな。なら早速もらおうか。」

・・・いや、今やるのは全然構わないんすよ？

ちよつとかぶつといけばいいだけですし。

だけどさ、態々膝に乗らなくてもよくない？

首じゃなきゃ駄目って訳でもないんだし。

「あの、エヴァンジュリンさん？」

「エヴァでいい。私もアリアと呼ぶからな。

で、なんだ？」

「いえ、なぜこのこんな体制を？」

「なんだそんなことか。

これが一番早いからだ。いいからよこせ。」

かぶっ

あ、なんか献血思い出すなあ。

この血の抜ける感じが何とも。

おー・・・お？

お、お？おおお？

ちょちょちよつと待て！

のみっ、飲み過ぎー！ー！ー！

「スト、ストツツプ！！

飲みすぎですー！！」

やば、血、血が足りない・・・。

エヴァさんはなんか呆けてるし。

勘弁して・・・。

「ハッ、ちょっと待て！

なんだこの血中魔力は！？

思わず飲んでしまったが、お前、騙したな！？」

「ああ、そう言うことですか。

すいません、ちょっと面倒だったので魔力封印してたんですよ。

今外します。」

俺はネックレスを外す。

あ、まずい、幻術も解けちまう。

気づいたときにはもう遅かった。

「な、ななななっ・・・！」

「あー、このこと内緒にしててもらえませんか？

ばれたらまずいので。」

「おまつ、お前っ！」

さっきから嘘ばかりではないか！

ええい、放せ、放さんが茶々丸っ！

そいつは殴らなきゃ気がまんっ！！！」

「落ち着いてくださいマスター。」

まずっ たなー。

まだばらすつもり無かったんに。

どうしょ？

ま、エヴァさんだからいつか。

いずれはばらすつもりだったんだし。

早まっただけってことにしよう。そうしよう。

「落ち着きました？」

「全く、お前には驚かされてばかりだ。

他にはもう無いだろうな？」

「さあ？まだ全てを曝け出す関係ではないのでなんとも。」

「お前と言う奴は・・・まあいい。

いずれ全て話してもらおうぞ。」

ええ、いいですとも。

そうしないと信用されませんからね。

俺はどこまでも臆病だから。

その後はこうなった理由などを話しました。

「・・・もう何があっても驚かん。」と言われました。

そんなに驚くことかな？

能力について話した時が楽しみです。

魔導書を見せてもらったけど、やばい。

貴重なものがいくつもあってそれだけでこの交渉は無駄じゃなかつ

たなーと再確認。

吸血少女はただの少女ではありませんでした、まる

第4話 盟友は吸血幼女？だけど見た目に反して彼女はすごかった（後書き）

とりあえず、今日はここまで。

次回はエヴァ編手前ぐらいまでのつもりです。

それではみなさん、いい夜を。

第拾話 期末試験・修行の試練・学園長は氏ね（前書き）

期末試験編、エヴァ編の準備段階です。

次は、期末試験

エヴァ編は2～3話のつもりです。

修学旅行はそこからですね。

誤字修正しました。申し訳ございません。

第拾話 期末試験・修行の試練・学園長は氏ね

あれから色々ありました。

惚れ薬大騒動

ドッジボールでネギ＋俺争奪戦

ネギと乙女達のお風呂でキャッキャウフフ（俺不参加）。

どれもこれもめんどくさかったんですがね。

まだ楽しめたからいいんです。

けど・・・

これはねーよ学園長。

第拾話 期末試験・修行の試練・学園長は氏ね

今日はいい天気だなーと起床。

朝の運動として拳法の型をやってシャワー。

茶々丸さんが朝ご飯の準備をしていたのでお手伝い。

あ、俺料理もできるんだ。

別荘にこもってたら自分でしなきゃいけなかったしね。

んでエヴァさん起こして朝食。

一足先に学校。

今日も楽しい一日が始まるかなーと思って職員室に行けば

「あ、アリア先生。学園長からこれを渡してと言われたのですが。」

としずな先生に紙を渡され。

もうそんな時期だったなーと思いながら読む。

『試練』

エヴァンジェリンを手なずけること。がんばるんじゃ!』

は？

目をハンカチで拭きながらもう一度目を向ける。

『エヴァンジェリンを手なずけること。がんばるんじゃ!』

はあああああ！？

ねーよー！！いやまじでねーよー！！！！

なんだよこれ！？

あいつマジでぶっ殺そうか・・・。

うん、あんなのいなくてもここは大丈夫。

寧ろあんな老害必要なし。

よし、待ってる諸悪の根源。

今から地獄を見せてやる！！

「で、学園長。何か申し開きがありますか？」

「正直スマンかった!!」

只今学園長に土下座させています。

気持悪いだけです。

大体何よあれ。

手なずけるって？お前人間をなんだと思ってるのさ。

しかもエヴァさん？エヴァさんは人間じゃないと？

お前らの手に負えないものを押し付けるんじゃない。

英雄の息子なら何とかなるかとも思うな。

こっちなら潰れてもいいなんて考えんな胸糞悪い。

その前にお前を潰すぞ、おい。

「で、なんなんですか？これは。」

「いや、ちょっとしたおちゃめじゃよ？

ジョークじゃ。アリア君堅いからのう。」

それっぽいこと言って誤魔化せると思うな。

俺が気づいてないとでも？

表情から大体わかります。

内心冷や汗かいてるんじゃないですか？

九歳の餓鬼だからってあんまり舐めると

「ああ、そうなんですか。

・・・あわよくば、なんて考えてないですよね？

ましてや、俺なら潰れても・・・なんて、ねえ学園長？」

痛い目見るのは、あんたなんだよ学園長。

s
i
d
e

近右衛門

正直、彼の頭のよさを舐めとった。

わしの軽い気持ちが今のこの状況を作り出したんじゃない。

最初は彼の試練を考えておった。

ネギ君には2 - Aの最下位脱出。

同じにしたら面白くないと思ってしまったのがいけなかったのか・・。

今、彼が住んでる部屋の同居人がふと頭に思い浮かんだ。

「これじゃ!」と思ったのは言うまでもないのう。

もし、達成できたなら万々歳。

できなかったとしても、彼なら問題ない。

それにエヴァは女子どもを殺さないしのう。

そう、思ってたんじゃない。

「ああ、そうなんですか。

・・・あわよくば、なんて考えてないですよね？

ましてや、俺なら潰れても・・・なんて、ねえ学園長？」

まさか学園長室まで乗り込んでくるとは。

言動の一つひとつに有無を言わさぬ気迫があった。

勿論誤魔化そうとした。

ジョークとか適当に言っておけば、納得して他の試練を聞いてくるはずじゃ。

そしたらネギ君と同じことをやらせればいい。

じゃが、彼は違った。

彼はこちらの考えを全て読んでいた。

わしは背筋が寒くなるのを感じる。

彼は本当に九歳なのか？

その思考速度や知識は大人となんら変わりません。

世の中の表と裏、どちらも理解しておる。

そしてなにより、自分の立場をはっきり理解しておる。

『英雄』を父親に持つことの意味を。

彼をこのままにしておくのは危険じゃと考える。

彼は大人を全く信用していない。

いや、正確には『魔法使い』自体……。

放っておけば世界を、全てを憎むかもしれん。

タカミチ君に定期的に接触してもらおうとするかのう。

「まあいいです。

これが試験で構わないんですね？

なら精一杯やらせてもらいます。

精一杯・・・ね。」

魔法が使えない

それだけで頭が痛いと言うのに。

監視も増やすしかないか。

これで魔法が使えれば・・・ネギ君より才能は上じやったかもしれない。

それを考えると、惜しすぎる存在じゃ。

近右衛門 s i d e e n d

その後は、授業でネギの試練がばれて・・・

おれに飛び火して、もうやになっちゃいました。

そう思うなら勉強なさい。

君達が最下位脱出すれば万事解決なのよ？

こりゃあ、ネギたちが行方不明（図書館島ね）になったら

授業にならないんじゃないかなー、と先生は漠然と思います。

今のうちから対策練っておくか・・・。

「と言っのが今日あったことですかね。」

一日の授業をネギと共に消化し、現在はエヴァさんとお話中。

「あのクソジジイ、こちらが大人しくしていれば・・・！」

エヴァさん激怒。まあ当たり前か。

俺でもキレるもんまじで。

「にしても、舐められてますね。真祖の吸血鬼であるエヴァさん？」

「この忌々しい呪いさえなければ・・・」

今すぐ五体を引き裂いてやるんだが。」

「そう言えば、まだ解けそうもないですか？」

「もう少し、と言ったところだが。」

お前は母親の血が濃いからな。

決定力が足りないんだ。

あの坊やから血が吸えれば・・・たぶん解けるんじゃないか？」

なるほど。なら原作通りに吸血鬼事件を起こさせるか？

それならネギも成長できるし、俺の試練も終わる。

学園長の予想外な結末で、ね。

俺は学園長の慌てふためく姿が見れるし

エヴァさんにいたってはこの地に縛り付けている鎖から開放されるから。

お互いに得しかない。

ネギも貴重な経験ができるし。

問題は、俺がどの程度関与していくか・・・だが。

「ならエヴァさん、ネギをおびき寄せましょう。

時期は期末試験後くらいで。

今から計画、準備すれば十分間に合います。」

「いや、それはいいが・・・弟を売るのが？アリア。」

傍から見たらそう見えても仕方ないか。

俺の守り方ってそう言うのが主体だからなあ。

受け入れられない人のほうが多いかも。

「売る、とは少し違うんですけどね。

どうとってももらっても結構です。

ただ、ネギにも経験させなきゃいけないと思ったんですよ。

戦場の恐怖ってやつを……。」

「成る程な。この真祖を踏み台にするか？」

原作じゃあ勝ってたよなーネギ。

けど、あそこで中途半端に自信をつけたら駄目だと思う。

だから修学旅行も油断ばかりしていたし

その後の魔法世界に行くときだってフェイトに襲撃されてたし。

なら一度完膚なきまでに叩き潰してもらう方がいいんじゃないか？

世界の広さ、魔法使いトップクラスの実力。

それを身をもって理解するほうが大事だと思う。

何より、エヴァさんが勝って血を定期的に貰った方がいい。

一回吸っただけじゃ解けないかもしれないし。

「いや、エヴァさんには本気で戦ってもらいます。

勝っておかないと、血が定期的に貰えません。

そして何より、ネギの為にもなりません。

中途半端に自信が付くと後が怖いですから。

天才であればあるほど後で挫折した時に立ち直れない可能性が高

いものです。

なら、今は最強クラスの魔法使いの実力を体で理解した方が大きい。

フォローを私が行えば問題ありません。

学園長もこのことを考えてはいるはずです。

しかし、ネギの勝利を……ですが。」

「なるほど……自分との力量の差をわからせてやるんだな？」

戦場で一番必要なのは『経験』だからな。

理には適っているか。

それにしても、お前はなぜそんなことまで……いや、今はいいか。

ゆっくりじっくり長い時間をかけて話してくれればいい。

しかしあのクソジジイ、私を掌で踊らせようとしたのか？

呪いが解けたら真っ先に報復にいくか……。」

ほんと、エヴァさんは物分りがよくて助かるねー。

不適な笑みに惚れそうですよ。

冗談ですけど。

学園長は一度痛い目に合えばいい。

もう、庇う気にもならないよ。

あんたの思い通りにはさせんよ。

俺の掌で踊り狂ってくれ。

原作と言う名の物語は、少しずつシナリオが書き換えられていく。

一人の異端と、一つの悪せいきによって。

歯車は、少しずつ回り始めている。

最後にあるのは、ハッピーエンドか

はたまたバッドエンドか。

それは全てが終わるまで、誰にもわからない。

けれどももう引き返すことはできない。

始まってしまったのだから。

結末は、
一つとは限らない・・・。

第拾話 期末試験・修行の試練・学園長は氏ね（後書き）

もう何も言いません。

皆さんが言いたいことは感想にどうぞ。

全てを受け入れ、書き続けますから。

所詮趣味ですからね。

自分が楽しければそれでいい。

ただ皆にも楽しんでもらえるとすっごくテンションあがりますが、皆のコメントが私のやる気成分を分泌させます。

なので、一言でもコメントいただけたら画面前でにやけます。

コメントは必ず返すようにしますよ。

目指せ、最低一日一話！

第拾巻話　ネギ&バカレンジャー失踪？犯人はわかってる。（前書き）

みなさんこんばんわ。

意外と読んでくださる人がいて驚いている作者ことせぶんすたあです。

こんな稚拙な文を楽しんでくださる人がいて、私はすごく嬉しいです。

ですが、やはり思いつきだけで書いたものですのでやはり矛盾や説明不足が否めません。

そして、それでも読んでくださる方々のためにももっと面白いと思うものを書きたいと考えるようになりました。

やはり小説は楽しんでいただくのが一番ですよね。

ですので、一度切りのいいところで書き直そうかと思っています。

今考えているのは修学旅行編まで、書き終えたらにしようかと考えています。

話の大筋は変わらないので時間はそうかからないとは思っていますが・
・・。

よろしければ皆さんの意見が聞きたいです。

このまま続けて欲しい人も、もしかしたらいるかもしれません。

そんな人がいるなら書き直しはとりあえず保留にしますし、完結させてから行ってもいいくらいです。

主人公やキャラ達と一緒に私も成長できるような小説を書いていけたらいいと思います。

これからも作者共々、よろしく願いしますね。

では本編へどうぞ。

第拾壹話　ネギ&バカレンジャー失踪？犯人はわかってる。

ネギとバカレンジャーが失踪しました。

考えなくてもわかりますね。

図書館島の魔法の本を探しに行っ たんです。

上手く誘導した、学園長が憎い。

いや、だってさ？

態々危険な橋を渡らせなくても、普通に勉強させりゃあええやん。

なぜに図書館島？

この辺から学園長の陰謀は既に始まっていると思う。

と言っか最初からだけど。

一般人巻き込んで高みの見物とは、いい趣味ではないですね。

学園長？

第拾巻話　ネギ&バカレンジャー失踪？犯人はわかってる。

「兄さん・・・魔法ばれちゃいました。」

いつかの放課後、ネギに呼び出されてこんな話をされた。

そつえば、初っ端からアスナにばれたんだよな。

色々ありすぎてフォロー忘れてた。

これじゃ兄失格だし、誰も守れないわけだ・・・。

自己嫌悪に陥るが今はそんなことを考えてる時ではない。

反省は後で、今すべきことはネギのフォローだ。

「まずは状況を説明してくれ。

じゃないと何もわからないから。」

ぽつりぽつりと話し出すネギ。

その表情は今にも泣き出しそうな、悲痛なものだ。

内容は原作と何ら変わりはないがネギの心情は

原作とは違う印象を受ける。

小さいころに話を聞かせてきた効果が少しあったかな？

魔法を使わずに助けられたならそれがベスト。

けど、とっさのことに体が動かないなんてざらにある。

なら次にできることは自分の手札でどう助けるか。

その手札が今回のネギは『魔法』しか無くそれを使って助けられたなら

結果としてベストでは無いにせよベターではあった。

フォローの仕方は、単純だ。

「ネギ、お前は後悔してるのか？」

「え・・・？」

「宮崎さんを魔法を使って助けたことだ。

その結果、神楽坂さんには魔法がばれてしまった。

こうなるなら魔法を使わずに見捨てたほうがよかった

そう思ってるのかってこと。」

答えはわかっている。

ネギの持っている正義は、そんなつまらないものではない。

俺には無理な生き方。

視野は狭いけど、それはこれから広げていけばいい。

立派な魔法使いとはまた違う、純粹に人を助けたいと思う気持。

それがネギの持つ正義。それがネギの魅力。

俺とは真逆の考えであり、少し羨む気持ちでもてしまう。

「・・・僕は、僕は後悔なんてしていません。

アスナさんには魔法がばれてしまいましたけど

それでも、宮崎さんを助けられてよかったと思います。」

そう、これがネギの魅力なんだ。

ただひたすらに、ひたむきに真っ直ぐ自分の道を進む。

それがネギであり、俺なんかよりもずっと強い。

戦えば百回やつても負けはしない。

けど、俺なんかよりも硬く、真っ直ぐな芯が通っている強い心がある。

だから、少し羨ましい。

俺は今の生き方しかできないから。

「ならよかったじゃないか。

勿論、魔法を使わずに助けられたなら一番いい。

けどそれが無理で、他に助けられる方法があるなら使えばいい。

それが、ネギにとって『魔法』だったってだけだよ。

だからと言ってあまり頼りすぎるのもよくないけどね。

『少しの勇気が本当の魔法』だっけ？おじいちゃんが言ってた言葉。

その通りだと俺も思うよ。

まして、宮崎さんは俺達の教え子だ。

教師なら助けないと、な？」

「兄さん・・・うん、そうだよね！

僕もう迷わないよ！

次は魔法を使わずに助けられるように頑張る！」

俺の言いたいことをしっかりと理解するネギ。

これで悩みは吹き飛んだかな？

魔法もあまり頼り過ぎないようになればいいが

すぐには無理だろう。

あ、図書館島の際は魔法封印していくかもなあ・・・。

まあ、学園長がいるから大丈夫だと思うんだけど。

ほんとは行かせたくないんだがな・・・。

あんまり口を出すと動き難くなっちゃうから

今回は様子見、でいいか。

誰にも魔法はばれないし。

「今度時間が空いたら、神楽坂さんにも俺から話しておくよ。」

俺のこともばれちゃってるだろうしね。」

「うう・・・ごめん兄さん。」

「いいよ。それよりも宮崎さんが無事でよかったさ。」

ネギも学んだみたいだし、俺は魔法使えないからさ。」

あまり関係ないよ。」

どの口がそれを言う、とは思っ。

宮崎のことは少し心配したが、それほどでもない。

副担任と生徒、その関係でしかないから。

助けられる時は助けるけど。」

魔法も今はばらさない。

まだその時期じゃあないから。

主に学園長あたりにばれたくはない。

後は、アスナの方かな？

あの性格ならネギを放っておかないと思う。

ならエヴァの襲撃で魔法使いがどのようなものか

理解してもらうのが一番いいな。

それでも関わるって言うなら・・・。

まあそれはいいか。

本当は平穏な生活を送って欲しいんだけど、ねー。アスナは特に。

一応叔母？にあたるのかな。

その辺あまり知らないんだけど、親戚だとは思っし。

俺達のクラスの生徒も巻き込みたくはない。

こっちの世界なんて、知らないに越したことは無いよ。

汚い欲望しかないからね。

それから何日か経って、終にネギはバカレンジャーと共に失踪した。

あ、このかもいないね。

とにかく教室がやかましい。特に雪広。

とりあえず、知ってそうな・・・

「えー、宮崎さん、早乙女さん。

何か聞いてませんか？」

この二人に聞いてみる。

確かこの二人だったはず。

「図書館島に行ったつきり帰って来なくなっただんです！

アリアせんせーどうしょー！？」

早乙女が大分パニックに陥ってるな。

こんな話し方じゃあなかっただろうに。

そして宮崎は相変わらず俺が怖いのだ。

ちよいとショック。

周りもかなり煩くなってきた。

とりあえず皆落ち着け。

「皆さん落ち着いてください。

私から学園長に聞いてきますから。

なにか知ってると思いますので。

わかり次第伝えますので、授業はまじめに受けてくださいな。」

「なつ、心配じゃないのですか!？」

せんせー、雪広さんがうるさいです。

先生は俺ですけど。

知ってる俺としてみれば心配なんてしょうがないし、それに

「あのメンバーとネギで先生ですよ？」

早々危険な目に遭うことはないでしょうし、ネギも教師です。

自分の生徒くらい守り抜きますよ。

ですのであまり心配はしていません。」

「で、ですが、万が一と言うことも・・・。」

「ですから学園長に聞きに行くのです。

学園の施設も把握できない程の馬鹿ではないでしょう。

万が一、把握できていないのなら早々にその席を退いてもらいます。」

では私はこれで。」

ちよつとむかつて来たので話を切つて教室を出る。

雪広じゃなくて学園長にだよ？

生徒にむかつかうなんて駄目でしょ。

あー、学園長痛い目見ないかなー。

その頃の教室では

「なんか、アリア先生怒ってた？」

「うん、なんか怖かったよね。」

「と言うより、誰よりも心配だったんじゃない？
なにせネギ先生は実の弟なんだし。」

「怒ったことないもんねーアリア先生。」

「そうそう。いつも綺麗な笑顔してるよね？」

「あんだ、それ禁句よ？」

「初日があれだったもんねー……。」「

「まあ、なんにしる自分の弟を心配しない兄がいるわけないか。」「

「そうだねー。」「

「それなら、うちらはやれることをやるつよ。」「

「「「「「さんせーいー！」「「「「「」

（心配なのもあるが、あれはジジイへの怒りが大きいな。大体、あいつはそんな人間じゃない。ククク、ジジイのうろたえる姿が目には浮かぶな。）

アリアをしっかりと理解しているエヴァでした。

また場所は変わって学園長室。

俺の前にいるのは、この学園のトップ。

なんか物凄く既視感を覚えるが、それは置いておこう。

大事なのはそんなことじゃない。

「説明してもらえますか？」

「説明も何も無いんじゃないが・・・。」

また白を切るつもりですか。

なら、こちらにも考えがありますよ？

「なら今回巻き込まれた生徒達の両親に連絡しておきましょうか。」

私達には報告の義務がありますよね？」

普通に考えたら、行方不明になった時点で報告しなければならない。
学園に子どもを預けている両親達は信用してるのだから。

学校という教育機関を。

まあ連絡した時点で信用はがた落ち。噂も広がるけどね。

何としてでももみ消したいことではあるな。

「それは、ちと困るのう。」

「・・・いえ、困ると言われましても。

生徒が行方不明になるなんて前代未聞ですよ？

しかも担任と一緒に。

報告しない訳にはいかないでしょう。」

そう『普通』ならそうする。

でもそれをしないで、大して焦ってもいない学園長は何かを知って

いるはずだ。

もし、何らかの理由でどこで何をしているかを知っていたとしても
親に連絡しないのはありえない。

そして俺ら先生に伝えないのも変だ。

それ以前に、生徒の外泊を許すこと自体おかしい。

仮にも男と女なわけですから。

ここから導き出される答えは唯一つ。

目の前にいる人が全ての元凶、犯人というわけだ。

知ってたけど。

知らなくてもおかしいことには気づく。

これだけ疑問に残ることがあるんだから。

「それをしないのは、今回のネギ先生達の失踪は

あなたが原因だからですか？ 学園長。」

「本当に君は・・・鋭すぎるわい。」

やっと認めたな？

逃げ道を一つずつ潰したからそうせざるを得なかったんだろうけど。

まあいい。

「やはりそうですか。」

ネギ先生達はどこで何を？

私のクラスの生徒が心配していますので教えてあげたいのですが。

「

「図書館島の地下で勉強しておる。朝、司書から連絡があったからのう。」

司書ってクウネルのこと？

本名はアルビレオ・イマだっけ。

あの人くらいしか地下なんていかないよなあ。

ってか監視は魔法だろうし。

この人も覗いてそうだけどね。

「なら生徒にはそう伝えます。

最後に一つだけ、よろしいですか？」

「・・・なんじゃ？」

「なぜ、わざわざ危険な図書館島に？」

今回一番聞きたかったのがこれ。

たぶん、建前を答えると思うけど。

「彼女達は普通に勉強してては間に合わんと・・・。」

やっぱそうか。

もう逃げ道潰しましょう。

ええ、逃がしませんよ？

白を切れないようにしてあげます！

・・・なんか楽しくなってきたんだが。

「勉強なら学校でもできます。

むしろそれが普通ですよ？

彼女達がいくら勉強が苦手でも、もっといいやり方がいくらでもあつたはずですよ。

図書館島には勉強がはかどる魔法でもあるのですか？

それなら、魔法の秘匿に関わってきますから問題ですよ。

それに、あまり生徒をひいきするのもどうかと思います。

・・・改めて聞きますが、なぜこのようなことを？」

「それは・・・言えん。

少なくとも、君が知る必要はないからのう。」

そう来ましたがー。

実際うちのクラスの生徒と弟が絡んでる時点で

知る権利はあると思うんだ。

てかなきゃおかしいでしょ。

俺は学園長と目を合わせるけど、その目に映る色を見てため息を吐く。

これは、絶対に話さないつもりだな。

俺が考え付くのはネギと親密な関係を作らせておいて

いづれはパートナーに・・・ってことなんじゃないかと考える。

結局、アスナ、このか、古、夕映は仮契約するし

まき絵は好きになってるし。

楓は微妙だけど、興味はあるみたいだし。

先を見越してってことだと思う。

てか魔法の秘匿完全無視だろ・・・。

なんか疲れてきた。

自然と肩を落としてしまう。

「わかりました。しかし、次からは知らせてください。

でないところらも準備できませんので。

では、失礼します。」

この先のことを考えて歩みが遅くなる。

なんとか学園長の陰謀を阻止して生徒たちの平穏を守ってあげたい。
と言うより、俺のパートナーが多くなってくると

守りきれなくなってしまうかもしれないから。

だからパートナーづくりたくないのよね。

できないかもしれないけど、それならそれでいい。

けど、そうなった時にネギパーティーの人数が増えても問題なんだよね。

原作みたいにさ。

それなら何人がこっちで負担したほうが、生き残る可能性は高いか？

でも、魔法に関わる人数を減らすのがベスト。

このか辺りは常に狙われるからネギにつくのもいいかしんないね。

アスナは・・・いずればれるのか？

ばれないなら平穩に暮らして欲しいが・・・。

難しいかもしれないな。

なんにせよ、人数は減らせるように頑張ろう。

主に俺の為に。

「あれ、いつのまにか教室についてしまった。」

考えごとをしていたせいか、気づいたら教室の前にいた。

一旦切り替えようか。

「と言っわけで、心配ないそうです。」

学園長の言い分をそのまま話して落ち着かせようとするが、そんなので納得しないやつが一人。

雪広だ。

とにかくうるさい。そこはかたなくうるさい。

俺だって納得はできないさ。

けど

「だからと言って、ここで騒いだって何もありません。

心配だったから試験ができませんでした、なんて言い訳通用しませんよ？

そしたらネギ先生は教師を辞めることになりますね。

結局はあなた方は自身の首を絞めているだけです。

今あなた方にできることはなんですか？

それを今やらないと、後できつと後悔することになりますよ？

それでも何もしないと云うのであれば、もう私は何も言いません。

どうぞ、好きに騒げばいい。

辛い現実から逃げても何も変わりませんけどね。

今からは自習です。各自好きなことをしてください。

教科も問いません。後はあなた方のやる気次第、と言っておきます。」

静まり返る教室。

これで動かないのであれば、俺にはどうすることもできないね。
もう言うべきことは言い切ったから。

「アリア先生、わからないところを教えてください。」

顔を上げるとそこにいたのは。

「大河内さん、ですか。」

大河内アキラ。

正直彼女が真つ先に動くとは思わなかった。

もしかして、このクラスで一番大人なのは彼女なのかも知れないと認識を改める。

「今、私に・・・私達にできることは、少しでも成績をあげること。

それに、一番心配してるのは先生ですよね？」

んーあまり心配はしてないんだけどね。

あ、けど怪我とかは心配かな？

あそこ危ないから。

けど大河内かあ。

理解が早い人は好感もてるなー。

「せんせー、私にもおしえてー！」

「私も！」

次々に寄ってくる生徒達。

なんか嬉しいけど、これじゃあ対応できない。

「わかりましたから落ち着きましょう。」

これでは一人ひとり対応仕切れません。

ですので、このクラスの成績上位者の人達、すいませんが手伝ってもらえますか？

担当の教科を分けたら十分教えられるはずです。」

申し訳ないが、生徒にも手伝ってもらおう。

じゃないといくら時間があってもたりないから。

勿論英語は俺

数学は葉加瀬

国語は宮崎

歴史は朝倉

超に全体のカバー

これでなんとかなるか？

朝倉が上位にいるとは思わなかったけどな。

「フン、随分と教師らしいじゃないか。」

「マグダウェルさんですか。」

もちろん、今回のテストは本気で取り組んでくださるんですよね？
」

「坊やのために今回は本気で行くこつ。」

あの計画が台無しになっても困るからな。
」

「それは助かります。」

さて、私も精一杯教えますかね。
」

みんな、頑張れ。

俺には教えることしかできないからな。

それにしても、思うんだが

ネギ、愛されてるねえ。

やっぱり羨ましいわ。

俺は正論しか吐けないから、きつといい印象ではないだろう。

正論を吐くことが必ずしもベストな答えって訳ではないだろうし。

ま、あまり好感を持たせないように仕向けてる部分もあるんだけど。

でも、やっぱり羨む気持は消えてくれないんだよな！。

俺は少し寂しい気持になりながらも、それを振り払うように首を振る。

けれど、心の霽はらは消えることは無いのだった。。

第拾巻話 ネギ&バカレンジャー失踪？犯人はわかってる。（後書き）

アリアの苦悩の回ですね。

この辺はあまり動きがなくてくだっているかもです。

疑問に思うところがあれば、感想へどうぞ。

作者からできる限り伝わるように説明させていただきます。

前書きに書いたこともよろしく願います。

次は試験終了！吸血鬼編の準備段階までです。
ではまた次回。

第拾二話 期末試験の結末？暗躍する吸血鬼と俺と・・・。（前書き）

テスト編完結。

昨日久しぶりに運動したら筋肉痛がひどい・・・。

書き直しの件はもう少し考えます。

些細な感想でもいただけると嬉しいです。

第拾二話 期末試験の結末？暗躍する吸血鬼と俺と・・・。

みんな不安な表情で発表を待っている。

今日は試験の結果発表だ。

俺はそこまで心配はしていないが。

試験前のこの子達の頑張りを見てるから。

それだけで点数があがるかわからないけど

2・Aの生徒だから・・・と思ってしまっ部分もある。

あとはバカレンジャー達だけど、そっちはネギが上手くやると思う。

原作でもそうだったしネギの頭の良さはわかってる。

それ〓教えるのが上手い、ではないんだけど。

きつとあの子達はやってくれるさ。

2・Aの子はみんな、優しいからね。

ネギのために精一杯頑張ってくれたさ。

第拾二話 期末試験の結末？暗躍する吸血鬼と俺と・・・。

今日は試験の結果発表の日。

けど俺のやることは大して変わらないが。

朝は拳法、シャワー、ご飯作り。

最近は茶々丸さんとの連携が異常に上手くなってる気がする。

家事的な意味で。

エヴァさんは久しぶりに頑張ったみたいで疲れてるようだ。

もう少し寝かせてあげよう。

試験当日は、合宿組は原作通りに遅刻した。

ここでネギは魔法を使うけど、別に魔法なんか頼らなくても

眠気を覚ます方法なんてある。

今回は多めに見るけど、そこら辺は後で軽く注意しておくべきかな。

合宿の話をネギに聞くと、なかなか勉強ははかどったみたいだ。

けどなんかジジイ言葉を話すゴーレムに襲われたらしい。

・・・十中八九学園長じゃん。

けが人がいなくてよかったよ。

みんなが心配してたことを言うと、落ち込む反面嬉しそうな顔も見える。

「なんで嬉しそうな顔してるんだ？」と聞くと

「心配して貰えたことがなんか嬉しくて」だと。

そう言えば昔もこんなことあったな、と思い出す。

あの時はお父様に会いたいが為に無茶ばっかやってたっけ。

その度に俺やネカネさんに怒られてたけど、どこか嬉しそうな顔だったんだよな。

あの時は、将来を心配したっけ。

心の中でそう思いながら自然と笑みがこぼれる。

「あ、兄さんの笑顔、久しぶりに見た気がする。」

ネギにそう言われ、少しの間呆ける。

そう言えば最後に笑ったのっていつだっけ。

頻繁に笑ってる気がするけど、よくよく考えてみると

作り笑顔ばっかだった気がする。

心の底から笑ったのってもうずっと無かったかもしれない。

そうか、そんなに余裕無かったのか、俺。

村の人の石化解除の研究についてもなかなか上手く進んでいない。

そこで最近の行動を振り返る。

感情的に動いている部分が多かった気がする。

焦って、視野が狭まっていたのは俺の方だったのな。

思わず苦笑してしまう。

自分のあまりに矛盾ばっかな行動に。

それをネギに教えられるとは思わなかった。

俺もまだまだ、だな。

ネギがどうしたの、と言いたげな表情で俺を見てくる。

俺は「なんでもないよ」と言いながらネギの頭を撫でる。

久しぶりにネギの頭撫でたな、と再び頬がゆるむ。

ネギも嬉しそうだ。

兄弟のスキンシップも増やすかね・・・とか考える。

少しくらい心にゆとりを持たないと思考が偏ってしまう。

もつと柔軟に、色んな考えを持たないと。

案外簡単な方法とか出てくるかもしれない。

まだまだ時間はあるんだ。

あんまりゆっくりはしていられないけど

それでも、時には一休みも必要だよな。

「ありがとう、ネギ。」

今度はネギが呆ける番。

なんか既視感。

そんなに俺がお礼すんのって珍しいのかな、と思考。

わかんないけどまあいい。

俺も一緒に成長しなきゃな。

そして結果発表待ち。

ぶっちゃけると、あまり心配はしていない。

このクラスの成績上位者はダントツにいいし

他の生徒達は極端に悪かったけど、それは単にやる気がなかっただけ。

真面目に勉強し出すと勢いが違った。

教えたことは次々に飲み込んでいくし、応用力もある。

基本のスペックが普通とは違うことを再び認識させられた。

合宿組も今回は出来がよかったみたいだし。

正直、真剣になったこのクラスに敵はいないと思う。

結果は、言うまでも無く学年トップ。

ただ、学園長の採点が遅れたせいでネギは一度イギリスに帰ろうとしてました。

気づいたらいないとか、どれだけ速いんだと思わなくも無い。

一生懸命追いかけます。

まだお前は帰らなくていいんだ。

「っ、ネギ！」

「兄さん……。」

今にも泣きそうな、これからどうしたらいいのかわからない

そんな表情をしている。

「兄さん、僕、だめでした・・・。

一生懸命やりました。

アスナさん達もこんな僕の為に頑張ってくれました。

けど、けど結果は・・・。」

「ネギ、結果が全てじゃない。

お前は今回のことで何も学んだことはなかったのか？

そうじゃないだろう。

大事なのは結果じゃない、その過程だ。

それに、ほら見てみる。」

後ろを振り返れば、2・Aの生徒のほとんどがこっちに向かって走ってきいていた。

ほんとに、愛されてるな、ネギ。

「あの子達に何も言わずに勝手に帰郷するなんて、人としてしちゃいけないことだ。」

それに・・・いや、後は皆から聞けばいい。」

「兄さん・・・？」

皆が追いついてネギをもみくちやにする。

何がなんだかわかっていないネギ。

今はただされるがままにされとけ。

それが今回の罰・・・かな？

さて、俺は退散しますかね。

エヴァさんも来てないみたいだし。

皆に怒ってしまった手前、顔を合わせづらい。

「あ、あの！」

なんか大きな声が聞こえる。

あの声はアスナっぽいけど、タカミチでも見つけたのかな？

まあ俺には関係ないか。

エヴァさんと今後のことも決めなきゃいけないしさつさと帰るか。

「ちょ、ちよつと!!」

・・・あ、今気づいたけど、石化ってフェイト得意じゃん。
なぜ今まで気づかなかったんだ。

灯台下暗しもいいところじゃないか。

うわあ、俺どんだけ余裕無かったんだよ。

思わず自嘲してしまう。これは仕方ない。

あまりの自分の馬鹿さ加減にほとほと呆てしまったから。

早速別荘に引きこもるか。

エヴァさんにも手伝ってもらえば解除薬か魔法でなんとかなる方法が見つかるともされない。

文珠の方も続けるけど、あつちはいつになるかわからないからな。

他の方法も考えてみるけど、宝具なんかは流石に創れなかったし。

ゲームなんかのアイテムも試してみるか？

そんなんじゃない無理って決め付けてたけど、試さないで決めるのは早計だ。

「ちょっと、無視してんじゃ・・・ないわよ!!」

「はい？」

思考の海から帰ってきたときには、目の前にアスナがいた。

その手は俺の左肩にかかっている。

あれ？え？あれ？？

もしかして、タカミチじゃなくて俺を呼んだの？

それにしても、顔赤いのは走ってきたのか？

それは悪いことしたな。

「ああ、すいません。

少し考え事をしていたので気づきませんでした。

神楽坂さん何か用ですか？」

「えっと、その、アスナでいいわ……です。

なんか余所余所しくて嫌、なんです。」

……敬語、使えてないよアスナ。

俺も所々怪しいところがあるからあんまり人のこと言えないけど。

「ならアスナさんと呼ばせていただきますね。

学校では一応教師という立場なので苗字で呼ばせていただきますが。

後、そちらも無理に敬語は使わなくていいですよ。

九歳に敬語も変ですし。流石に学校では使って欲しいですけどね。

それで、何か用があったのでは？」

「ならそうさせてもらっわ。

敬語とか肩がこるのよね・・・。

あ、そうそう、この前からゆっくり話す機会がなかったから。

それに今だってあんたいつの間にかいなくなってるし。」

「ああ、そうですね。

なら今度時間とりましょうか？

その方がゆっくりできますし、もうすぐ春休みですからね。

アスナさんの都合のいい日で結構ですよ。」

アスナから接触がないと思ったら、今来るのか。

魔法のこともたぶんあるだろうし日を改めた方がいいな。

でも、俺と同じ時間を過ごすとは封印解けたりしないか？

かなり強力な記憶封印の魔法だとは思っけど、今一よくわからないからな・・・。

過度な接触は控えようか。

「わかったわ。ってかあんた携帯持ってたの？」

忘れてた。

頭からすっかり抜け落ちていた。

春休みにすぐ買いに行くか。

もう自費でいいか。

ってか街のどこになにがあるのかわかんない・・・。

エヴァさんの呪いが解けてれば着いて来てもらっただけど。

「あー、まだ持っていないですね。

春休みにすぐ買いに行きますので電話番号教えてくださいか？

今度電話しますから。」

「別にいいけど、あんた街とか全然知らないでしょ・・・。

どうやって買いに行くのよ?。」

・・・アスナ、鋭いじゃないか。

痛いところをつかれ思わず顔が引きつるのがわかる。

なんか俺、ほんと駄目だなあ。

少し前の俺が恥ずかしい。

「はあ・・・。

あんた、完璧な天才児に見えて案外おつちよこちよいなのね。

いいわ。春休み入ってすぐに買いに行くわよ。

その時に話もすればいいじゃない。」

うぐっ、おつちよこちよい・・・。

けど今のはそう言われても仕方ないか。

それでも、中学生におつちよこちよいつて・・・。

今の俺はこっちの世界でも二十歳を超えてるって言つのに。

ちよつと鬱になりそうだ。

s
i
d
e

ア
ス
ナ

私は目の前のまるで女性のような男に目を向ける。

ゆっくり話したいとずっと思ってた。

けど色々ありすぎてそんな暇なかった。

主にネギ関係だけ。

久しぶりにまじまじと見るけど、やっぱりどこか懐かし感じがする。

なんでだろう？

まだ出逢ってそんなに経ってないのに。

そう言えば、最初に抱きついちゃったのよね。

今思い出しても恥ずかしい……。

またあの時のことを思い出してしまう。

自然と顔が熱くなっていくのがわかる。

私、今絶対顔が赤いわ！

変に思われてないかしら……。

「ああ、すいません。

少し考え事をしていたので気づきませんでした。

神楽坂さん何か用ですか？」

話しかけられて思わずかみかみになってしまう。

絶対変に思われたわね……。

まあ、いいわ。

そんなこと考えても仕方ないし。

それよりもアリアも魔法使いなのよね？

魔法使って天才ばっかなのかしら。

ネギもアリアも尋常じゃないくらい頭いいし。

そうだとしたら、なんか不公平ね。

それから色々話したけど、新しい発見があった。

アリアが案外おつちよこちよいだと言うことだ。

携帯の下りはちょっと可愛いかも、と思ってしまった。

だってあまりに予想外だったんだもの。

私は悪くないわ。悪いのはアリアよ。

仕方ないから春休み入ってすぐ、携帯買いに連れて行く約束をする。

なんか、ネギ以上に放っておけない感じがするのよね。

後で気づいたけど、これって『デート』ってやつじゃないの？

私初めてなんだけど・・・。

な、何着て行こうかしら。

って、まだ先の話じゃない。

それに、あいつは九歳よ？

これは弟と買い物に行くみたいなものよ！弟いないけど。

でも、アリアは大人っぽいし・・・。

たまに私達より年上に見えるし。

うーん・・・。

「あー、もうまだるっこしい！

今日はもう寝よっ！！」

「アスナ、どしたん？」

このかに聞かれるが、話せるような内容じゃない。

ごめんけど聞こえなかった不利をさせてもらっわ。

今度なんか奢るから許して・・・。

その日はもちろん、寝れるはずもなく朝を迎えた私だった。

アスナ s i d e e n d

アスナが頭を悩ませていた頃、エヴァハウスでは

「私の別荘に行くぞ。」

「そっちのが時間の短縮になるか・・・。」

了解。」

石化解除薬の話を見ると、早速別荘に移動になる。

サンプルを見せたらかなり難しそうな顔をしていたからな。

これは時間かかりそうだ。

そうそう、くだけた話し方をしているのは猫を被るのをやめたからだ。

ことの発端はエヴァさんの「いい加減敬語やめろ」の一言。

俺も疲れるからすぐにやめてくだけた話し方にする。

もちろん遠慮はなしで。

すると、なにが不満だったのかエヴァさん怒り顔。

聞くと「また嘘だったからだ！もうお前の全てが嘘に見えるぞ！！」らしい。

それは仕方ない。

そう言う風にしてるんだから。

誰にだって手札を多くは見せないのが俺のやり方。

信用してない訳ではない。

ただ俺が臆病なだけ。

「あ、俺の従者も呼んでいい？」

石化のスペシャリストがいるんだ。」

「いいだろう。」

フェイトも呼んで三人であーだこーだ話し合う。

最初にひと悶着あったのはお約束だ。

フェイトと仮契約結んだのっていつだったけ。

麻帆良に来てからなのは覚えているけど・・・。

思いつきで提案してみたら案外あっさり了承されたのには驚いた。

聞いてみると「君が創り出したんだから、君がマスターでいいよ。」
だと。

なんかこのフェイト、性格が段々変わってきている気がする。

そう言えばフェイトはいつも何してるんだろう・・・。

勝手に出ていいとは言ってるけど、少し気になる。

まあ、魔法先生にばれるような強さではないからいいんだけど。

話がそれた。

フェイトに聞いてみてもやはり難そうな表情をした。

爵位持ちは落ちても爵位持ちってことか。

力は変わらないからな。

「そう言えばアリア、お前こんなに別荘を多用してたらまずいだろう。」

お前は人間なんだから寿命もある。

このままじゃすぐにジジイになるぞ。」

ああ、確かにそうだね。

あんまり深く考えてなかったけど確かにそれは問題だ。

ちなみに今は二十歳越えて・・・二十一になるころか？

あまりわかんないから予想だが。

ううん・・・。

「なら、もう少ししたら咬んで・・・ってのは駄目？」

「おま・・・いいのか？」

「うん。別に人間に拘りは無いし。」

不死は怖いけど・・・他の何に変えてもしなきゃならないことが俺にはあるから。

これは俺の我侭だ。本当に傲慢なのは魔法使いとかじゃなくて俺なのかもね。」

魔法世界の人間は確かに傲慢だ。

だけどよく考えてみれば俺も大して変わらない。

色々なものを犠牲にしながら、俺の我儘を通そうとする。

これを傲慢と言わずになんと言うのだろうか。

それでも生き方は変えないけどさ。ってか今更変えれない。

「フフ、相変わらずお前は面白いな。

流石私の見込んだ人間だ。

誰よりも悪の本質を理解し、誰よりも人間らしい。

ああ、余計に欲しくなってきたじゃないか。

さっさと私のものになれ。」

「いや、そんなのそっちの勘違いだって。

俺はただ自分のやりたいようにやってるだけ。

だから気に入らないことには精一杯抵抗するし、興味の無いものは無視する。

多分、誰よりも子どもなんだよ。俺の本質ってやつは。

それにそんなに焦んなくても不死になるんだからいづれ周りに誰もいなくなるよ。

その時にまだ俺なんて欲しいならいくらでもあげるさ。

だからごめんけどちょっと待っててよ。」

「そう言うところがいいんじゃないか。

誰よりも自分のことがわかってる。

良いところも、悪いところもひっくりくるめてわかっていながら変えるつもりが無い。

そんな人間はほとんどいないことが、なぜお前はわからんのだ。」

そんなこと言われたって、ねえ。

これが俺だもの。

なら俺は俺らしく生きるしかないじゃない？

人間は他の誰にもなれないんだから。

石化の方は焦っても仕方ないので、とりあえず長い目で見ることにする。

時間をかければなんとかなるかもってことがわかったし

それだけでも収穫があったと思う。

それから、フェイトも交えてご飯にする。

相変わらず茶々丸のご飯はおいしい。

フェイトのコーヒーに対する執着も相変わらずだけど。

その後はみんなでお酒を飲んだ。

変なテンションのままネギ襲撃の話をすると、フェイトも食いついてくる。

ネギの実力が気になるみたい。

・・・こいつはバトルジャンキーなんじゃないかとたまに思う。

流石にフェイトが出てくるとまずいので、今回は見学で我慢してもらう。

その時の残念そうな顔が忘れられない。今度久しぶりに模擬戦に付き合うから。

今日はほんと久しぶりに騒いだ気がする。

たまにはこういうのもいいな、と思う。

今まではずっと根つめてたから。

立ち止まって周りを見渡すことの大切さを知った

そんな一日だった。

第拾二話 期末試験の結末？暗躍する吸血鬼と俺と・・・。（後書き）

次は日常パートをはさんでいよいよ吸血鬼編ですね。
戦闘はかなり久しぶりな気がします。

では、次話も楽しんでいただけると幸いです。

第拾参話 アスナの苦悩、アリアの真実。(前書き)

アスナとの絡みです。

上手く書けてたらいいなあ。

てかアスナがめっちゃ乙女っぽく・・・。

ってか気づけば10万PVを超えていました。
みなさん本当にありがとうございます。

感想も気軽にどうぞ。

第拾参話 アスナの苦悩、アリアの真実。

今日はアスナと話をする日。

いつもとは違うラフな格好で髪も完全に下ろす。

そして駅に向かう。

今日はどんな話をするのかな、と思考しながらも久しぶりの買い物に少し心を躍らせる。

やはり女の子とのデート……でいいのだろうか。

とにかく買い物はいくつになっても楽しみってことがわかる。

けどさ、

まずい、初っ端からつまずいた・・・。

第拾参話 アスナの苦難、アリアの眞実。

s i d e アスナ

昨日も全く寝れなかった。

目にクマが残らなくてよかったわ。

それにしても、ふわぁ・・・眠いわね。

これも全部あの大人みたいな子どもが悪いのよ。

顔はどこかあどけなさがあるんだけど、雰囲気が子どものそれでは

ないあいつ。

ネギはまだ子どもな部分が多いけど、アリアは違う。

・・・おつちょこちよいだけど。

あれはなんか、うん、可愛かった。

って、私あいつのことばかり考えてるわね。

これじゃまるで私があいつのこと、す、好きみたいじゃない！

違うわ！私には高畑先生と言う人が！

・・・はあ、ばかみたい。

とりあえず着替えましょ。

この何日か悩んで決めた勝負服。

スカートなんて滅多に穿かないし化粧もしないんだから。

何と勝負するか私自身よくわかってないけど。

んな細かいことはこの際いいのよ！

このか達はまだ寝てるわね。

書置きでもしとけば大丈夫よね？

んじゃ、行きましょ！

駅に着くと、もうアリアが待っていた。

この辺しっかりしてるわよね。

まだ約束の時間三十分前じゃない。

・・・そんな時間に来てる私もどうかと思わなくも無い。

けど、今日はそんな細かいこと気にしてたらこっちがもたないわ。

にしても・・・。

いつもはスーツだったから私服がなんだか新鮮ね。

黒を基調にしたシックな感じが、うん。かなり似合ってる。

あんまり着飾ってないところがアリアらしいけど。

「おはようございますアスナさん。

私服姿初めて見ましたけど、可愛いですね。

化粧も自然な感じでとても似合ってますよ。」

アリアも同じように私の私服を見てたのか、褒めてくる。

そりゃ、結構気合いれて選んじやったから褒められるのは嬉しいけど・・・。

いきなりだからびっくりしちゃうじゃない！

嬉しいけど、やっぱりどこか恥ずかしいわ。

私は今の照れ隠しに逃げ道を探す。

ん？綺麗なネックレスしてるわね。

クリスタル？かしら。

「それ、綺麗ね。」

「はい？ああ、これですか。」

いつもつけてるお守りなのですが、スーツの内側なので見えませんよね。

普段はこうして出してるんですけど。」

そう言って首に掛けたまま少し持ち上げる笑顔のアリア。

私はその光景に、少し見とれる。

すぐに首を振り意識しないようにする。

な、なんでこんなにドキドキするのよ？

相手は九歳なのよ？こんなんじゃ、私いいんちょに何も言えないじゃない！

逃げるようにそのクリスタルに手を伸ばす。

指先がそれに触れた瞬間、何かが変わった。

目の前にいたのは、さっきより身長が高くなって

子どもっぽさが消えた

本当に綺麗な女性のような、けどどこか男っぽさも感じる。

あきらかに子どもとは言えない、冷や汗を流しているアリアが立っていた。

呆けてしまった私は、絶対に悪くない。

アスナ side end

「へ・・・？」

メーデーメーデー！

緊急事態発生です！

これはやばいって、まじで！

アスナに幻術その他諸々ぶち破られた！！

ちょっと間の抜けた声が可愛いが、今は無視！！

うん、少し落ち着こう。

深呼吸深呼吸。すーはあー。

とりあえず。まずは魔力をどうにかしないと。

「アスナさん。このこと、誰にも言わないでくださいね。」

ネギも使ってた簡易魔力封印を施す。

何重にもかけたので外に漏れることはないだろう。

学園長にばれてなければいいが。

あとは、認識阻害か。

魔力任せで強引にかけるか？

いや、そしたらたぶん残滓でばれる。

それに封印しちゃったからもう使えん。

容姿は・・・まあ他人の空似で押し通す。

今は解かれた瞬間つをアスナにしか見られてないからなんとかなる。

監視もちょうどいないみたいだし。

かなり危なかった。

あー、焦りすぎだ。頭が働かない。

ここは仕方ないからこのまま行くしかないか・・・。

にしても、まさか解けるとは。

結構高かったのにな、あれ。

これじゃあただのアクセにしかない。

最初抱きつかれたときはスーツの内側に入れてたから大丈夫だったのか？

多分そうなんだろう。触れた瞬間だったし。

アスナが呆けるのも仕方ないな。

エヴァさんの次にばれるのがアスナとは思わなかったけど。

早く再起動しないかな？

説明しなきゃ、ね。

どう誤魔化そうかな。

「ちょ、ちよつとあんた！

その姿はなんなのよ！？」

「ええと、色々事情がありまして。

今はまだ話せない、としか言えないのですが・・・

それでは納得できません、よね？」

「あ、当たり前でしょ！説明しなさいよ！-」

だよな。

どうするか・・・。

少しでも真実を話すか？

もうなるようにしかならないように思えてきた。

あまり深いところまでは話せないけど、ほんのさわりだけで納得してもらうか。

もう、幸先悪いな。

「そうですね、この容姿は副作用、みたいなものと考えていただければ。」

隠すその理由までは話せません。

私の命に関わることなので。」

「い、いのちって・・・冗談でしょ？」

冗談、ではないけど。

俺が魔法を使えるってのはいい印象与えない。

特に魔法世界のジジイどもにはね。

今は、大した障害ではないと認識させているが

これが最優先暗殺対象に変わる。

下手したら普通に殺しにくるかも。

あのアリカお母様に似ているってだけで危険だらけなのに

さらに油は注ぎたくない。

この学園長にばらさないのは、そこから漏れるかもしれないから。

魔法先生から、とか。

まあそれだけでは無いけどこれが一番納得してくれると思う。

「冗談ではないですよ。

こんなつまらない嘘ついてもどうしようも無いですし。

だから、誰にも話さないでくれますか？

勿論ネギにも、です。」

これ以上は話せない。

だからこれで納得してくれ。

じゃないと、こちら側に引き込んでしまうことになる。

それはしたくない。

折角手に入れた平穩をわざわざ捨てなくていい。

「・・・なんで？」

「なにがです？」

「なんで、なんであんたは・・・そんな平氣そうな顔で笑っているのよー!!」

それは、もう諦めてるからだ。

この世界に来たのは自分の意思。

そりゃあ、こんなはずじゃ・・・と何回も思ったことある。

でも結局は自業自得だし。

生まれは予想外だったけど、それはもう仕方ない。

今更何を言ったって変えようの無い事実だから。

誰かを恨むのもお門違いってもんだ。

けど、その中で大切なものを見つけた。

それはこれからも増えていくかもしれない。

そのどれもが、この掌から零れ落ちないように。

この手で守りきれるように。

それが俺の、私の生きる人生^{みち}だから。

「それが、私の宿命だからですよ。

私もネギも、そんな宿命を生まれたときから背負っています。

危険度は私のほうが上ですが。

命を狙われたり、なんて普通にあるでしょう。

そんな世界なんです。魔法世界は。マジックワールド

だから、アスナさん。

こちらのことは早く忘れて日常を取り戻した方がいいですよ。

でないと戻れなくなってしまいます。」

少し予想外の展開だけど、これで引いてくれたら嬉しい。

でなきゃ無理やり理解してもらうことになる。

下手したらトラウマになるかもしれない。

そんなことはしたくない。

一応親類、ということになるんだろうし

なにより今は俺の生徒だ。

平穏な毎日を送ってもらいたい。

それこそ死ぬまで。

できれば誰も巻き込みたくは無いからさ。

「あー、もう！難しすぎ！

とにかく、あんた達の魔法ってのは関わると危険なんですよ？

それだけはわかった。

正直後は全然わからなかったわ。

あんた達がどれだけ危険なのかとか、命に関わるとかいきなり言われても

全然理解できないわ。

けど、それでもあんたやネギは放っておけない！

特にあんたよ？変な所でおっちょこちよいだし。

私はバカだから、考えてわからないなら仕方ないじゃない。

なら私は私の考えで勝手に動く。

あんたやネギなんか文句なんて言わせない！

これは私が決めたんだから！

ならこの話はおしまいね？さっさと携帯買いに行くわよ。

ついでに街も見回れば少しは覚えられるでしょ？」

ああ、アスナってこういう性格だったっけ。

弱ったなあ・・・。

エヴァに頼むしかないか。

多分着いて来るからな。

心苦しいが、仕方ない、な。

オコジヨにパクティオーはさせないようにしよう。

でも、もし、エヴァの魔法、殺気を受けてなおその覚悟を持ってい
られたなら……。

その時のことを考えると、俺も覚悟をしとかなきゃいけないな。

守る対象として認識するかどうかの、ね。

というか、まじでいい性格してるよなあ。

俺がもうちょっと若かったら危なかったかも……。

俺はロリコンじゃないっていつのに。

その後はさっきまでとは一変して、楽しく街を散策した。

切り替えの早さに俺が驚いたぐらいです。

携帯を買って最初の登録がアスナってのには違和感があったが。

まあそんなのは些細なことだ。

久しぶりの外出は楽しかった。

あんまり機会はないけど、またいつか誰かと来ようと思う。

色々な発見があるし、いい刺激にもなる。

アスナも楽しんでたみたいだし、とりあえずはよかったかな？

最初やかしたけど。

悔やんでも仕方ないので、今後のことを考えよう。

とりあえず、エヴァさんに相談かな？

おまけ

「ねえ。エヴァさん。」

「どうした？」

「いやさ、今日神楽坂アスナと携帯買いに行ったんだけどね。」

「なぜお前が・・・まあいい。で？」

「・・・ばれた。」

「なにが、ってお前、まさか・・・！」

「うん。たぶん想像通り。」

まあエヴァさんの家に戻ってすぐ別荘に入って

予備の魔法具つけたからわかんなかったかな。

金が何百万かトンだのが痛い。

今は創れるようになったからいいんだけど、時間かかるしなあ。

「・・・なんでだ？」

「それなんだけど、まずこれ見て。

術式刻んであったクリスタルなんだけど。」

「なんだ、これは・・・。」

「わかるでしょ？術式がぼろぼろにぶち破られてるんだ。」

「待て、これはどこかで・・・いや、ばかな、そんな筈無い、だがしかし・・・。」

あら、自分の世界に入っちゃった。

研究者つてこれだから少し面倒なんだよな。

俺もなんだけど。

つてかこれが本題ではないのだが。

「戻ってきてエヴァさん。たぶんその予想であってるから。」

「なんでそんなことがわかる!？」

「もしかしたら親戚かもしれないから。」

俺の母親、俺の容姿。これで想像つくでしょ？」

「・・・ウェスペルタティア、か。」

流石に知ってたか。

ここからが本題。

今日あったことをかいつまんで話す。

アスナの覚悟の辺りからエヴァさんは笑いをこらえていたけど話が終わると同時に吹き出す。

そして大笑いし出した。

ほんとにさ、笑い事じゃないんだけど・・・。

「ハハハッ！面白いじゃないか！」

「いや、面白いとかじゃなくて・・・。

とにかく、ネギ襲撃のときたぶん着いてくるから。

ネギと一緒に教えてあげてくれないかな？

最強種の力、こちら側の怖さをさ。」

「まあ確かにそれが一番いいか。

でも、お前も覚悟しとけよ？

たぶん、あいつは真っ直ぐに突っ込んでくる。

直情バカだ、あれは。

簡単には引き下がらないぞ。」

「うん、なんとなくわかってるから困ってるんだけどね。」

直情バカはかわいそうだよ、エヴァさん。

とにかく、頼んだからね？

あとはなるようになれだ、ちくしょう。

・・・こっちに来たらの話だけど、ね。

その時は全力で守らせてもらいますよ。

なんか、上手いこと進まないなあ。

これが現実なのか・・・。

第拾参話 アスナの苦悩、アリアの真実。（後書き）

どうだったでしょうか。

楽しんでいただけたらうれしい。

次はアリアを少なからず思っている人たちの心情を整理しようかと思えます。

六人くらいになるのかな？

それが終わればようやく・・・。

でわまた次回。

第拾四話 アリアとネギ 男性編（前書き）

言い訳させてください。

この話書いていたら思った以上に長くなってしまったんです。
一話にまとめるつもりだったんですが……。

一日一話が……本当に申し訳ありません。
と言うわけで、男性編です。どうぞ。

第拾四話 アリアとネギ 男性編

近右衛門の憂鬱

ネギ君とアリア君の資料を見比べる。

そして、二人の容姿と性格を思い浮かべる。

どう見ても似ていない二人。

容姿も性格も、双子とは思えないほどに違う。

ナギの面影を残しながらその性格はまるで真逆のネギ君。

アリカ姫の容姿に瓜二つだけどこかナギと被るアリア君。

共通点といえば、どちらも十分すぎるくらい優秀なこと。

ここはあのバカに似なくてよかったと思わなくも無いのう。

ネギ君はとても純粋でアリア君は・・・ちと堅すぎる。

思わずため息が出る。

アリア君の大人びた物言いや行動は九歳とは思えない。

このわしですら気圧されることもあった。

九歳の子どもである事実なんぞ忘れてしまつこともしばしばある。

これで魔法が使えたなら・・・。

何度同じことを考えたことか。

「そういえば……。」

この前大きな魔力反応が麻帆良内に急遽出現したことを思い出す。

学園結界に反応が無いなんて、まずありえん。

エヴァに聞いても侵入者の可能性はほぼ無いと言っておった。

反応はすぐに消えて、魔力の持ち主が誰かは特定できぬまま。

わしは内部の誰かが魔力封印をしていた可能性を考える。

その場合何らかの拍子に解けてしまったと考えるのが自然。

敵の可能性はほぼ無いじやろう。

そんなミスを犯す者が今までばれずにおれた訳が無い。

一人、思い当たる人物がある。

魔力が感じられないくらい少ない、もしくは完全に無い人物。

魔法先生に度々監視させている人物。

ネギ君の双子の兄、アリア君。

じゃが、それじゃと理由がわからない。

わしはどれだけ考えても妥当な理由が浮かばない。

彼なら、それだけする相当な何かが無ければしないじゃろう。

魔法先生も間が悪くちょうど彼を監視してない時だったようじゃ。

全く、本当に間が悪いのう。

これでは何のための監視かわからないのじゃ。

今日何度目かわからないため息を吐く。

「もし彼じゃったら……。」「

そう願わずにはいられない。それほど彼は優秀なのじゃ。

何度思考しても口からこぼれるのはため息ばかりじゃった。

ネギの兄さんな一日

僕は今日までのことを思い出す。

本当に色んなことがあった。

まずはアスナさんを占ったこと。

あの時は本当に失礼なことを言ってしまった。

兄さんに怒られたことも覚えてる。

「失恋つてのは女性からすると、とてもショックなことなんだ。

例えそれが事実でも言つてはいけない言葉もある。

例えば、太っている人にそれを伝える、とかね。

占いで言えば、不吉な相が出ています、とか。

と言つか占いは悪い結果なら対処法も教えなきゃ駄目。」

なんて言われたっけ。

相変わらず兄さんの言葉は難しいけど、後になって理解できることがいっぱいあった。

しかも間違っていないんだ。

うん、やっぱり兄さんはすごい。

でもそんな兄さんにも欠点がある。

それは魔法が全く使えないこと。

兄さんは、魔法がなくても生きていける、って言うけど……。

便利だから使えたほうが絶対いいと思う。

けど「便利な物に頼ってばかりいると、それが使えなくなった時苦労するぞ」と言われたことがある。

僕は魔法が使えなくなったらどうなるんだろう？

少し考えてみる。

……少し、ううんとでも怖い。

僕は魔法が使えないと、ピンチになった時にきつと何もできなくなる。

そんな時があるかわからないけど。

もしあつた時はどうしよう？

うーん……。

あれ？もしかして僕から魔法をとったら、何も残らない？

なんかショックだ・・・。

これからは魔法ばかり頼らずに自分の力でなんとかできるようになるのかな。

どうすればいいか全然わからないけど。

体でも鍛えてみようかな？

そう言えば、この前久しぶりに兄さんに頭撫でてもらったなあ。

えへへ。すごく嬉しかった。

魔法学校に行ってからとはまともにスキップシップなんてなかったから・・・。

これからはもっと兄さんとスキップシップとりたいな。

あっちでは僕も強くなることで頭がいっぱいだったし。

この修行も兄さんが一緒じゃなかったら、もう失敗してウェールズに帰ってたかも。

ん？なんだか僕兄さんに助けられてばっかかも・・・。

こ、これは大変だ！

僕兄さんに迷惑ばかりかけてる！！

兄さんを助けられること、何か無いかな？

僕の得意なことで兄さんが苦手なことじゃなきゃだめだよね。

数分後、僕は膝をついて落ち込んでいた。

うつ、魔法しか思い浮かばないよ・・・。

僕が兄さんに勝てるのってそれぐらいしかない・・・。

やっぱりなんかショック・・・。

はあー、僕って駄目駄目だなあ・・・。

でもそう考えてみると、やっぱり兄さんはすごいな。

僕が駄目なんじゃなくて兄さんがすごすぎるだけな気がする。

うん。兄さんと比べちゃだめだ。

比べても落ち込むだけだもん。

一つ年上のアーニヤよりも年上っぽく見えるし。

そう言えば、アーニヤ元気かなあ？

また三人で遊びたい。

お姉ちゃんにも久しぶりに会いたいかも。

あ、そうだ。手紙書こう！

鞆に魔法のレターセットがあつたはず！

何を書こうかな？

やっぱり、こっちであつた出来事とかだよな。

よし、書くぞー！

「いれでよし、と。」

結構な時間をかけて僕は手紙を書き終えた。

この場合は撮り終えた、が正しいかも。

アスナさんにも映ってもらったし色々な話もできた。

兄さんの話題が多かったのは、僕が兄さんともっと話したいからかな？

たぶんそうだね。

これからは僕からも積極的に話しかけてみようかな。

今度は兄さんと一緒にこの映像を撮ろう。

うん、これはいい案だ！

絶対忘れないようにしなくては！

僕はその日、兄さんのことばかり考えてた気がする。

とりあえず、わかったことが二つ。

兄さんはすごいってことと

どんな兄さんでも僕は大好きだということ。

えへへ。

ちょっと恥ずかしいけど、本当のことだから仕方ないよね。

今日は兄さんへの思いを再認識した、そんな一日でした。

フェイトの日常

僕は最近、街に出てよくコーヒーを飲んでいる。

勿論、出るときは魔力をほとんど封印して、一般人に偽装しながらだけ。

このコーヒーはとても美味しい。

コーヒー好きの僕としては、これほど嬉しいことは無い。

ほんと、彼には感謝しないと。

ゆっくりとくつろぎながら、思い出すのは最初の出会。

今一状況が掴めていなかった僕の視界に映ったのはアリカ姫にそっくりな彼。

思わず攻撃を仕掛けてしまったのは鮮明に覚えている。

・・・返り討ちにされたけどさ。

気づいたら地に組み伏せられてたとか、ほんと勘弁願いたいね。

まあ攻撃した僕が悪いんだけど。

話を聞くと、アリカ姫とあのナギ・スプリングフィールドの子どもだった。

そして、自分で僕を創りだしたらしい。

方法を聞いたけど曖昧な答えしか返ってこなかった。

敵に手札を晒すような真似はしないのは当たり前のこと、だってさ。

正直もう一度戦っても勝てる気はしなかったのだから側に勧誘。

すぐ断るかと思えば、保留されてこっちが面食らったよ。

全く掴めない人物だと思いかかなり警戒した。

次の瞬間思わず呆けてしまった僕を、誰も責められはしないよ。

だっていきなり「修行つけて」だもん。

もし、あの場にいたのが僕でない誰かだとしても、きっとその人は呆然とする。

感情が無い、人形の僕が呆けたのだから。

彼との修行は受け入れた。

彼を見極めなければ、と思ったから。

まずは中国拳法を教えられるだけ教えた。

最初は、肉弾戦のみなら秒殺のレベル。

はつきり言ってお話にならなかった。

でもその吸収力はすさまじいものがあつたね。

次々に型を覚え、応用し、たまに驚くような発想を捻り出す。

日に日に戦闘時間が増え、僕との実力の差を急速に縮める。

人に物を教えることや誰かとの戦闘がこんなにも楽しいと感じたのは初めてだった。

後で聞けば、戦闘中の僕は自分でも気づかない内に微笑を浮かべてたらしい。

少し驚いたけどよく考えればそれもそうかと納得した。

僕自身がそれだけ楽しんでいた。ただそれだけ。

「なんだ、フェイトって人形じゃなくてちゃんと心あるじゃん。」

そのことを彼に伝えたときに返ってきた言葉がこれだ。

彼の発言には一々驚かされてばかりだね。

でも悪い気分には不思議とならない。

それが彼の最大の魅力なのかも。

僕は造物主に創られた存在。

その存在意義は主のためだけにこそ、と思っていた。

彼はそんな僕に新しい知識を多く与えてくれた。

『心』なんて馬鹿馬鹿しいと思っていた頃の自分が今は懐かしい。

こんないいものなら、もつと早く彼と出会っていたかった、と考えてしまう。

そうすればもつと違った道も選べたかもしれない。

けれど僕は完全なる世界の一員。

彼の情報もあちらに渡している。大した情報なんて無いけど。

もし、彼と僕らの組織が敵対するのなら、その時は、ね。

最近のかの『闇の福音』とも知り合いになった。

彼はびっくり箱なんじゃないかと思ってしまう。

どんな交友関係してるんだと小一時間問い詰めたい。

・・・今度聞いてみようか。

話はそれたけど、その時見たあの石化は正直すごかった。

僕でもすぐに解くことは不可能。

解析にも時間がかかるけど、できないことはない。

絶対に解いてみせる。

それが彼への恩返しになるのなら。

自然と口角が上がるのがわかる。

僕はまた笑っている。

少し冷めたコーヒーに口をつける。

うん。やはり美味しい。

そう言えばこの美味しいって思う感情も心がある証拠じゃないだろうか。

もう一人の、組織の方にいる『僕』は気づいていないと思うけど。

勿体無いね。

人生の半分以上損しているよ。

今度会うのは・・・修学旅行？の時かな。

その時には、力説しておこう。

造物主に反乱したりして。

その事を考えると、少し止めておこうかなと考え直す。

でも今の僕の主は彼^{アリア}だ。

それだけじゃない。

彼は僕の主であり、僕の唯一の友だ。

これだけは誰にも変えることはできない事実。

だから仮契約もしたし、今も彼と共にいる。

これからずっと、それこそ彼が死ぬまでこの関係は変わらない。

僕はそう思っている。

彼もそう思ってくれているのかな？

そうだと嬉しいね。

完全なる世界の一員である事実も変わらないけど、どちらかしか選べないなら僕は・・・。

考えるまでも無かったことに気づき、思わず苦笑する。

彼と一緒にどこに行っても、どんな生活でも退屈はしないだろう。

さて、今日は模擬戦に付き合ってもらおうよ、アリア。

君のせいなんだから責任はとってもらわないとね。

第拾四話 アリアとネギ 男性編（後書き）

すぐにもう一話更新します。

第拾四話 アリアとネギ 女性編

アスナのもやもや

「ふわー・・・。」

んー、今日もいい天気ね。

ふと私のすぐ横に誰かいるのに気づく。

・・・またネギが私のベッドに潜り込んでるようだ。

全く、ほんとにガキなんだから。

アリアとは大違いね。

「ん？でもアリアはもう大人なのよね。」

よくわかんないわね。

副作用って言うてたけど、九歳より前にその副作用がある薬？

でも飲んだのかしら。

わかんない。考えても全然わかんない。

だから私はすぐに考えるのを止める。

わからないことをいくら考えても仕方ないから。

大体、私にわかるはずもなかった。

あいつは天才で私は一般人なんだから。

・・・今、一般人？バカの間違いじゃ？とか思ったやつ表に出なさい。

自分以外にバカにされるのってム力つくのよ。

でも、あの顔はかなり美形だったわよね。

雰囲気にも男っぽさがあつたし。

「ってまたあいつのこと考えてる。

私、どうしちゃったの・・・？」

まさか、ほんとに好きになっちゃったとか？

・・・無いわ、それは絶対アリエナイ。

そんなこと、ありえちゃだめなんだから。

だっていいinchよに何も言えなくなるもの。

ん？でもあいつはもう大人って考えていいのよね？

なら問題無いんじゃない？・・・。

はっ！私には高畑先生って人がいるじゃない！

でもなんでこんなに気になるのかしら。

昔から知ってるような、ってそれも変ね。

うーん、私、大事なことを忘れてるような・・・。

「うがーーーー！わかんないわ！ぜんっぜん、なんっにもわかんないわよ！！」

私は思わず頭をかきむしりながら叫んでしまう。

しまった、と思うけどもう遅い。

「ん、あすなあ？」

どうかしたん？」

やはりこのかを起こしてしまった。

ほんと、私のバカっ！

「ごめん、起こしちゃったわね。

別に何も無いから気にしないでいいわよ？

ネギがまた私のベッドに紛れこんでただけだから。」

ネギのおかげで少し助かった。

これで今回紛れこんでたことは多めに見てあげることにする。

私って優しいっ！

自分で思っただけ少し悲しくなっただけは言うまでもない。

それにしてもよく寝るわね、このネギ坊主。

「そういえばこのか。アリア・・・先生のこと、どう思っ？」

つい呼び捨てにしそうになるのをなんとか誤魔化す。

少し、親友の意見を聞いてみたくなった。

普段のみんなのアリアに対する印象とか、イメージとか。

そう言えば私達が図書館島の地下で勉強してた時になんかあったって聞いたわね。

今度他の人にも聞いてみようと思える。

「アリア先生？んー・・・」

綺麗やんなあ？」

私は思わずっこける。

そ、そうじゃないわよ！

ってかそれ言ったらあいつ確実に怒るわ。

「それ、本人には絶対言つては駄目よ？

大体容姿じゃなくて印象とかイメージの話。」

ほんとにこのかはぼけぼけしてるわね。

まあ、可愛いし癒されるからいいんだけど。

今は真面目な話をしているの。

このかが珍しく真剣な顔で悩んでいる。

たまに「んー」とか「むー?」とかうなっているのが小動物チックで可愛い。

それにしても、長いわね。

「そうやなー、うちらと距離置いとる気がする。

それに・・・」

そ、それに？

そのあまりに真剣な表情に思わず唾を飲み込む。

にしても意外とよく見てるのね。

「いまだにこのかつて呼んでくれへん。」

ズコー！！！！

思わず滑ってしまった私は、絶対に、確実に、神に誓って

わるくないわ！！

「あ、あんたそれ真剣な表情で言うことじゃないでしょ！！」

「えー！？大事なことやんかあー。」

全く、珍しく真剣な顔してると思えば・・・確かに大事なことだけ
ど。

それによ。あいつ学校では苗字でしか呼ばないと思うわ。

私も学校では「神楽坂さん」って呼ぶつもりみただし。

さっきからずっとあいつのこと考えてる。

ほんとにどうしちゃったのかしらね。

まあ放っておけないのは確かよ。

ネギは子どもっぱいけど、あいつは変に悟っちゃってるというか・・・。

なのどこか抜けてるのが余計に心配させるのよね。

ネギとは違った意味で、だけど。

なんか、自分の気持がわかんないってのはイライラするわね。

今度八つ当たりさせてもらおうかしら？

うん、そうしよう。

これも全部アリアが悪いんだから仕方ない。

全部、あいつが悪いんだ。

私は自分に何度もそう言い聞かせた。

エヴァの評価

私は横でうんうん唸っている男に目を向ける。

なんか、手紙がどうか言っていたな。

誰に書くんだろうか。と言ってもあまり親しい人間なんかいないだろう。

親族か幼馴染、と言った所か。

「お前の全てが嘘に見えるぞ!!」

アリアの本質を測かねている時にこれだ。

思わず叫んでいた。

性格すら猫を被っていた。

そんなアイツが全くと言っていい程にわからなかった。

その決意はどこに向いているのか。

私にすらほとんどの手札を見せない。

信頼されてないのかと思い、少し苛立ったのもある。

こいつなら気の許せる友人になれると思った。

思っていたのに・・・。

やはり、私が吸血鬼だからか？

人間ではないからか？

だからこいつも信用も信頼もしないのか。

今まで何度もこの身を恨んできた。

そして今回も。

物凄くムシヤクシヤした。

一度目の前の男を完膚なきまでに叩きのめし、服従でもさせてやろうと考えた。

考えたら即行動が私のモットー。今考えたが。

別荘で本気の実力を見せ付けてやる。

茶々丸もチャチャゼロも一緒にだ。

卑怯とか言っなよ？

これが私の全力なのだから。

「まじでやんなきゃ駄目？」

やんなきゃやらないでいい。

その時は五体をバラバラに引き裂いてやる。

それを伝えるとこいつはため息を吐く。

そうだ。本気で来い。

でなきゃ殺す。

「これで終わりでもいい？」

勝敗はすぐについた。

私は何も、動くことすらできずに首筋に剣を突きつけられていた。

今、こいつは、なにを？

わからない。全く。

動き出しすら見えなかった。

転移ではないのは確かだ。

瞬動か？いや、ありえない。

この私が入りすら見えないなど絶対はない。

ならなんだ・・・？

「これじゃあ、納得出来なさそうだね。

ならもう一度しよう。

もう一枚手札を切るさ。」

こいつは、一体幾つ持ち札があるというのだ。

これだけ強いのに、なぜそこまで徹底する。

わからない。余計にわからない。

「今度はそつちから攻撃していいよ。

さっきのはこっちの不意打ちだったから。」

流石に、今の発言にはキレた。

そんなに舐められて黙っていられるほど私は大人しくない。

絶対、完膚なきまでに叩き潰す！！

「後悔、するなよ?」

私は闇の吹雪の詠唱に入る。

全力で魔力を注ぎ込み、かつ速く。

この一撃で決めてやる。

自分の迂闊さを呪え、バカ。

「闇の吹雪!!」

私の最大の闇の吹雪。

普通の人間にはまず防げない。

それこそあの赤き翼くらいの力が無きや不可能だ。

こいつがそれだけの力を持っているとは思えん。

先ほどのを不意打ちと思っているのなら避けないだろう。

それももし嘘なら。

これ以上は考えても意味が無いな。

そろそろ直撃する。

私はあいつの行動を何一つ見逃さないように目を凝らす。

動く、気配が無い？

直撃したら死ぬのは確実だ。

そこまでのバカではなかったはずだ。

何を、考えているんだ。

そこで私はあることに気づく。

「ん？何か呟いてるのか？あれは……。」

術式展開？なんのだ？

考える間もなくアイツに直撃する。

何をしたと言っんだ。

防げたとは思えない。

けど、それもすぐにわかった。

「な、に・・・？吸収している、だと？」

私の放った魔法の規模が段々と小さくなっていく。

あいつの周りに圧縮されていき、胴体に固定される。

あれは、私が考えていた闇の魔法の完成型？

いや、でも、それはない。ないはずだ。

けどそれ以外に考えられない。

故に目の前で起こっている現実が理解できない。

再びアイツの唇が動く今度は何をするきだ！？

「ちっ、茶々丸、チャチャゼロ！！」

「了解しました。」

「アイヨ。」

何にしても放っておくのは危険すぎる。

茶々丸とチャチャゼロに挟み込むように攻撃させ、邪魔をさせる。

従者がいなきゃきついはずだ。

「やれやれ、君といると本当に退屈しない。」

すると、あいつの前に魔方陣が現れそこから何かが飛び出す。

従者がいたのか！ っち、本当に多くの手札を隠し持っているやつだ！

しかもその従者はかなりの熟練者だ。

めんどくさそうな言葉とは裏腹に茶々丸とチャチャゼロの攻撃を全て捌き、二人はあいつに近づけない。

「多重詠唱、千の雷。圧縮し両手足に固定。」

な、やはりあれは闇の魔法！？しかも千の雷を両手足に固定だと！？

展開も詠唱速度も速すぎる・・・！

マズイ！！離れなければ・・・！

「遅い。」

「な、うしろ・・・！」

私は途中で黙らせられる。背中から前方に思い切り吹き飛ばされた。

周りの景色すら霞むほどの速度で建物に突っ込む。

クツ、目で追える速度ではない！！

だが・・・

「真祖の吸血鬼を・・・なめるなっ！！！」

気配と直感でなんとか追撃を避ける。さっきまで私のいた場所にクレーターができる。

あまり攻撃を受けることもできない。

闇の魔法は少し時間が必要。

今の状況では足止めすら不可能、どうする？

このままでは確実に捕らえられるぞ！

なにか、なにかないか・・・！

「考え事なんて余裕だね、エヴァさん。」

私が感じるよりも速く地面に叩きつけられる。

建物の最下層まで突き抜ける。

イヤ、これは無理だ。

絶対に勝てない。

久しぶりに恐怖を感じる。

なぜ、やつはこんなにも強い。

この真祖を手玉に取る程に。

なぜ、やつはこんなにも怖い。

この真祖を恐怖に陥らせる程に。

「なぜ、お前は、そんなに悲しい顔しているんだ・・・？」

目の前の男、アリアは今にも泣きそうな顔をしていた。

なぜだ。なぜ。

「俺は本当は誰も傷つけない・・・。

誰も、だ。

けど俺はそこまで強くない。

わかんと思うけど、心の強さだ。

だから自分を、俺の周りの誰かを助けるためには他人を傷つける
ことしかできない。

俺は臆病だから。敵に情けなんてかけていられる余裕なんかない。

だけど、それでも・・・

傷つけないんだ。誰も。

矛盾してるのはわかってる。不可能なものも気づいてる。

それでも、俺は……。」

ああ、なるほどな。

私はこいつのことがようやくわかった。

理解できた。

こいつの本質は誰よりも『臆病』なんだ。

そして誰よりも優しく、誰よりも冷徹。

矛盾ばかりなんだ、こいつは。

こんなのすぐに理解できるわけが無い。

自分が矛盾だらけなことをわかっていながら、それでも進む。

自分の決めた道を、ただひたすら真っ直ぐに。

闇の魔法の闇に侵食されないのは、それだけこいつが闇を従えてい

るから。

自分の抱える闇すらコントロールして自分の力にする。

どんな過去があつたかなんてしらん。

だけど、それは簡単なことではない。

それだけの覚悟があるんだ。こいつには。

ただ、一つだけいえるのは、こいつが

「ハハハっ・・・バカだな、お前。」

「そんなの、自分が一番わかってるよ。」

他の誰よりもバカだということだ。

あれだけ一方的にやられては、アリアに何も言えない。

けど、もついい。

なんか考えるだけアホらしくなってきた。

どれだけ考えたってアリアは理解できない。できるはずもない。

ある意味全て本当で、全て嘘なのだから。

この矛盾人間め。

それに、こいつが真祖ごときを気にする人間でもないことがわかった。

あれだけ強いなら怖がる必要も無い。

むしろあいつの方が・・・いや、やめておこう。

あいつは誰がなんと言おうと人間だよ。

誰よりも人間らしい、な。

そう言えば別荘の副作用のことで、あいつに聞くと

「咬んで」

って普通の顔で言われたのは流石に啞然とした。

いや、吸血鬼をなんとも思っていないのはわかった。

だけどこれはまた別の話だろう。

いきなりすぎるわ、バカ。

私は別に構わないが生き地獄だぞ、私みたいなのは。

それすらわかってて言ってそうだから困る。

全く、その時になっても気持ちが変わらないのであれば、その時は・
・な。

喜んで迎え入れよう。なあ、盟友。

アーニヤの心配

手紙？誰からかしら・・・って！

アリア！？アリアからじゃない！！

ちょっと不安だったのよね！なんて言っただってネギのお守りだし？

けどどこかおうちよこちよいだからどこか悪い魔女にでも捕まっていたらと思うと・・・

よかったわ、無事で！

それに、最近アリアの温もりが恋しく……。って私何言ってるのよ！

あ、あいつは弟よ！

……。でも私よりしっかりしてるわよね？

ま、まあいいわ。とりあえず見ましょ。

『アーニヤ、元気？』

めっちゃめっちゃ元気よ！

ってか元気のない私なんて私じゃないわ！

『まあ、アーニヤならどこに行っても元気だと思っけど。』

・・・よくわかってるわね。

たまにアリアには隠し事なんてできないんじゃないかと思ってしま
うわ。

『こっちは元気だよ。』

副担任してるんだけど、そのクラスの子達が元気すぎてたまに着
いていけなくなるけど。

女子中学生のクラスなんだけど、とにかくお祭り好き。

ってか本当に中学生？と言うような人たちが多いんだよね。』

な、なんですって？

女子中学生・・・ハッ！

アリアが騙されて・・・なんてないわよね？

『それから』おい、アリア！』もう、なによ、エヴァさん。』

『いや、魔法のことを聞こうかと・・・ん？なにをしてるんだ？』

・・・。

『ほう、誰にだ?』

『幼馴染の女の子。』

『ほう・・・面白いな、私も何か話してやろう。』

・・・。

『おい、小娘、一つ言って置く。』

アリアは私のものだ。

誰にも渡さん。以上。』

『ちょ！エヴァさん何言って・・・まあいいか。

アーニヤ、今は冗談だから気にしないでいいから。

じゃあ、また何かあったら手紙書くよ。

体には気をつけて。』

・・・アリアが、アリアが

「アリアが・・・変な幼女にたぶらかされた――――」

だから心配だったのよ！！きっと何か弱みを握られているに違いな
いわ！！

でなきゃあんなどこの馬の骨ともわからないような幼女にくつつい
ているわけない！！

きっと、いつものおつちよこちよいで何かしたんだわ・・・。

ハッ！

こうしちゃいられないわ！！

こうなったら修行なんてさっさと終わらせて・・・。

待っててね!! きっとお姉ちゃんが助けてあげるから!!

金髪ゴスロリ少女は覚悟しておきなさい!!

アーニャ・フレイム・バスターキックをお見舞いしてあげるんだから!!

おまけ ある乙女の決意

私は、最近アリア先生のこと気がなっている。

あの子どもとは思えない態度に、どこか壁を感じる話し方。

そして極めつけはネギ先生達の失踪。

その時に言われたあの言葉。

あれは確かに私達全員が悪かった。

目先のことに囚われて大事なことを忘れていた。

それを、少しきつい言葉だけど教えてくれた。

あの時のことをみんなに聞けば、きっと「ちょっと言いすぎ」と言うだろう。

私もそう思う。けど、あの言い方すらわざとのような・・・私はそんな印象を受けた。

いくら考えてもわからない。なら。

「少し、話をしてみようかな？」

わからないなら話をすればいい。

それからだ。

私はそう決意し、春休みを過ごす。

新学期が待ち遠しかった。

第拾四話 アリアとネギ 女性編（後書き）

いかがでしょうか。

吸血鬼編に入る前に周りの心理描写、とでも言うのでしょうか。
を入れてみました。

こんなはずじゃなかったんだけど・・・。

書いてて結構楽しかった部分でしたね。

ついつい長くなってしまいましたが、読者の皆様にも楽しんでいただければとても嬉しいです。

次からやっと、やっとです。

吸血鬼編に入れます。

とにかく頑張るの一言に尽きますね。

何か疑問、誤字脱字の報告、気になった点などあれば感想にお願いします。

お手数かけます。

ああ、調子にのって書いたせいで肩が痛い。

第拾伍話 桜通りの吸血鬼 ある生徒の心情とネギの成長に向けて（前書き）

何とか間に合った。

今回は吸血鬼編序章ですかね。

まださわりなので次あたりから本格的に動きます。

今回のメインは予想外？の彼女です。

第拾伍話 桜通りの吸血鬼 ある生徒の心情とネギの成長に向けて

本当にうちのクラスって強いな。

俺なんかよりも遥かに強い娘達ばかりだ。

ちょっと羨ましいじゃないか。

全く、俺が学ぶことのほうが多いんじゃないか？

これじゃあどっちが教師かわかんないね。

苦笑しか出ないよほんと。

第拾伍話

桜通りの吸血鬼。

ある生徒の心情とネギの成長に向けて

今日から新学期。

春休み中は専ら戦闘ばかりしていた気がする。

俺は春休みを振り返り、少し気分が下がる。

フェイトがやたら模擬戦したがるわ、エヴァさんはエヴァさんで手札全て見るまで

続けるとか言い出すし、ほんとーに疲れた。

ってかどつちも強すぎ。

フェイトは体術のみだからまだいいけど・・・問題はエヴァさんだよ。

手札切らないと殺すとか言い続けてくるし。

『瞬間移動で』終わらせても納得いかないとかって無限ループ。

結局切る羽目になるし。

あれはズルいと思うんだ。

えいえんのひょうがの詠唱聞いた時は本当に死ぬかと思った。

だってあれ、どうなるかわかんないし。

氷漬けよ？あまり樂觀視できないのが、ねえ。

思わず逃げた俺は悪くないと思いたい。

これ以上考えると本格的に鬱になりそうだったので思考を切る。

それに今日からは行動しなければならない。

自分はすることあまりないことを思うといつも通りでいい気もする。
だけど、常に動ける準備はしておく必要はあるので気持を入れなおす。

さあ、どう転ぶかな？

学年が一つ上がり教室も新しくなる。

お祭り好きなみんなは・・・

「三年、A組！」

「『『『ネギ先生、アリア先生！！』』』」

ネギを胴上げ中。勿論俺は遠慮しといた。

金なんとか先生を思い出した。

懐かしいな。結構好きだったんだけど。

あの卒業の時の漢字とか。

ふとその輪に入っていない生徒が目に残る。

生徒の名前は長谷川。確か周りの異常さに気づいて距離置いてる・
・のだったと思う。

この子はどうにかしてあげたいな。

学園長にこのクラスに押し込められたんだと思うけど、これはひどい。

よく不登校にならなかったなと思う。

話せる友達なんていなかったはずなのに。

どれだけ悩み苦しんだと言っただろう。

俺にはわからない。想像もできない。

自分は普通なはずなのに、周りが異常すぎるために自分が異端に見える。

普通の条件はその所々で変わる。

けどこれはあんまりだと思っただ。

そしてタカミチはこの現状を知らなかったのだろうか。

それなら教師なんて職止めた方がいい。

明らかに向いていない。

気づいてて放置なら・・・そうした理由を聞きたい。

今度聞くか？そうしよう。

とにかく今はこの状況をなんとかしなければ。

俺は座って疲れたような表情をしている長谷川に近づき声をかける。

「どうかしたのですか？」

俺が声を掛けてようやく気づいたのか、こちらに顔を向ける。

その表情からあまり好意的な印象では無いことが見て取れる。

「・・・どうもませんよ。」

気分が優れないので保健室に行っていていいですか？」

話し方ってこんなのだったか？と思いながらも現状を把握する。

このままじゃ逃げられてしまう。

少し考える素振りを見せ、打開策を探す。

そうか、なら着いて行こう。

この場はネギに任せれば問題ない。

「なら付き添います。途中で倒れたりしたら大変ですから。」

建前でしかないが、これで断れないはずだ。

長谷川は嫌そうな顔をするが諦めて席を立ち歩き出す。

俺はネギに声をかけてから教室を出る。

少しは話を聞いてくれればいいのだけど。

「なんでわざわざ着いて来たんですか？」

どう切り出そうか悩んでいたところに話しかけられる。

予想外だったけどこれは好機。

心の中で長谷川に感謝する。

「いえ、少し長谷川さんと話がしたいと思ひまして。

クラスに馴染めて無い様に見えたもので。」

当たり前障りの無い話から入る。

教師としては普通の行動だと思う。

でも今はここまでしないのか？

よくわかんないが、それでも放置はできない。

「そうですか。」

けど私なら大丈夫ですので。

自分から距離を置いているだけです。」

取り付く島も無しとはこのことか？

これは難しい。

けどこつちもこのままにしておけないんだよ。

少し悩みながら最善の言葉を探す。

核心を突いてみるか？

「それは周り、この麻帆良自体が異常だからですか？

普通なはずの自分がまるで異常だと錯覚させられるほどに・・・。

「え・・・？」

反応があった。やっぱりか。

長谷川の表情が驚愕に染まる。

それだけ一人で悩んで来たってことだ。

今まで放っておいた教師・・・特に魔法使いは何をしているんだ。

これじゃ職務放棄もいいところじゃないか？

それから保健室ではなく屋上に行く。

この時間なら誰もいないだろうから。

屋上に出ればまだ冷たい風が頬を撫でる。

日の光と相まって暖かさが丁度いい。

遠くを見つめながら少しの間、静かに風を感じている彼女。

そして少し俯きながらも動き始める唇。

ポツリポツリとこぼれる言葉のどれもが彼女の心情を物語っていた。

自分が異常だと思い周りに合わせようとすらしたらしい。

けど、やはり無理で結局今日まで過ごしてきた。

いつごろ諦めたのかもわからない。

現実を直視するのに耐えられなくて掛けた伊達眼鏡。

日々ストレスは溜まる一方。

何かするものが欲しくて逃げ込んだネットの世界。

彼女は一つ一つ順を追って、思い返すように

独り言を呟くかのように教えてくれた。

たぶん、最後の希望とでも思っただんじやないだろうか。

長い間一人だったから。

「・・・そうですか。

なら私が保証しますよ。

あなたは決して異常なんかじゃあ無い、と。

まあ、異常の塊である私の言葉は信じられないかもしれないですが。

けれど、私もここは異常だと思います。

私みたいな子どもを教師にするなど・・・何を考えているのでしょうかね？

そしてそれを疑問に思わない人々。

どう考えても異常だ。」

「・・・。」

本当に考えが全く理解できない。

こういった生徒を放置しておく学園も

修行に一般人を巻き込む魔法使い達も。

俺の言葉に帰ってくるのは沈黙。

「あなたはその気持を大切にしてください。」

もう一度言いますが、あなたのその思いは普通です。

何かあれば私が相談に乗りますので、気軽に話しかけてください。

もう一人で悩まなくてもいいんです。」

これで少しでも気持が軽くなれば、俺はそう思いながら言葉をかける。

俺の言葉にどれだけの力があるのかなんてわからない。

けど、それでも彼女に届いて欲しいと願いながら。

彼女は俯いていた顔を上げる。

その双眸から溢れ出る雫。

彼女は、静かに、けれどどこか嬉しそうに涙を流していた。

俺はその表情に意図せずに見とれてしまう。

不覚にも綺麗だと思ってしまった。

「ありがとう、先生。」

私は普通だつて言ってくれて。

なんか軽くなつた気がするよ。」

俺は言葉を発することができなかった。

何を話していいかわからなかった。

それに、長谷川のその顔をずっと見ていたい。

そう思った。

少し自分の感情に戸惑う。

これじゃあ、どっちが年上かわからない。

そんな自分に苦笑する。

とりあえず、彼女の心が少しでも軽くなつたのでよしとする。

もつと気の利いた言葉をかけてあげればよかったんだけど・・・。

俺にこれ以上は無理だ。

仕方ないよな。俺は生前もあまり交友関係なんてなかったのだから。

前世を思い出す。

唯一人と言っていていい友人。

あいつは元気だろうか。

何も言わずにこっちの世界に来てしまったけど、俺のこと忘れていないだろうか。

少しは寂しがっているかな。

そんな姿を想像できないことに気づく。

そしていきなり消えたことに罪悪感を覚える。

「先生？」

長谷川の言葉で現実に戻される。

いけないな。どれだけ考えてもわかるはずない。

今生きてるのはここだ。

もう、会うことも、謝ることもできない。

そのことに少しだけ、寂しさを覚える。

けど、だけど。俺に寂しがる権利なんて無い。

あの世界から逃げたのは他でもない俺なのだから。

「なんでもないですよ。

それじゃ、そろそろ戻りましょうか。

もう大丈夫ですか？長谷川さん。」

俺はこの世界で確かに生きている。

これは夢なんかじゃあない。

なら今を精一杯生きるしかないんだ。

例えどんな結末が待っていたとしても。

「はい。あ、あと先生。

これからは千雨って呼んでください。

じゃなきゃ返事しませんから。」

振り向きざまにそう告げる彼女。

その表情はさっきまでとは違う、心からの笑みに見えた。

・・・ほんとに、うちのクラスの生徒は。

みんな強かというか、なんというか。

勘弁してくれ。

「プライベートでならいいです。

しかし学校では勘弁してください。

一応教師と生徒なので。」

「冗談ですよ。」

本当にありがとうございました。」

一杯食わされたなあ。

最後に頭をさげながら礼を言い、歩いていく彼女の後ろ姿を見ながら
ただ漠然とそう考える。

ま、彼女に対してはこれでいいかな。

魔法に気づかなければいいんだけど、気づきそうなんだよなあ。

頭はきれるみたいだし。

ほんのちよつとだけ、その場に留まり目を瞑る。

風を全身で受け止めながら目を少しずつ開いていく。

「うし、いくか。」

気合も入った。

俺はまだまだ頑張れる。

自分の決めたこと、やったことに責任は持つぞ。

それぐらいはしなきゃつまない。

そんなつまない人間にはならない。

それがせめてもの償いだ。

結局はいつもの自己満なんだけどね。

夜。

まだ肌寒いが、そんなことは気にならない。

二人の子どもが対峙している。

はるか上空から眼下のそんな光景に目を向ける。

俺ともう一人・・・

「どうなるかね。」

「さあ。僕としては戦えないのが残念でならないよ。

せめてそれなりに楽しませて欲しいものだね。」

最近性格に難がある気がする俺の最初の従者。

こんなにバトルジャンキーじゃなかった気がする。

フェイト曰く俺のせいらしいが・・・。

「初めからその素質はあっただろ・・・。」

「何がだい？」

「いや、何もないけどさ。」

怪訝な顔でこちらを見つめてくる白髪。

ほんとに変わったな、フェイト。

いい傾向、なんだろう。

最近は毎日を楽しんで生活しているみたいだ。

チャチャゼロと仲がいいのはお互いに通じるものがあつたからだろう。

・・・完璧戦闘狂つながりだろう。

仲がいいのは構わないが、俺は巻き込まないでくれ。

戦いつて好きじゃないんだ。お前らとは違つてな。

形勢は明らかにネギが不利か。

勝てる要素なんか一つもないんだけどさ。

なんか話してる様子だが、ここからは何も聞こえない。

次はもっと近くで見るか。

遮断結界を使えば魔力漏れないし目にも映らないだろ。

二人・・・ネギとエヴァさんに近づく人影が一つ

俺の視界の端に映る。

やっぱり、来ちゃった、か。

「あ、アスナに吹っ飛ばされた。

鼻血出てるし。

折角さっきまでいい悪役してたのに・・・。」

「プッ、アハハハッ！

あの真祖が一般人に障壁破壊されて鼻血？

何の冗談だい？

これが見ただけで僕は満足だね！！」

フェイトが腹を抱えて笑っている。

・・・ほんとーにいい性格になったなあ。

俺はどこか遠くを見るような目でフェイトから目をそらす。

現実に目を向けたくない。

けどそんなこと言ってる場合でもない。

あ、エヴァさん逃げた。帰ったら文句言わなきゃ。

折角アスナに気をつけろって言ったのに。

なんか無駄に疲れた。

俺はため息が出るのを止められない。

次はタカミチと学園長が来るな。

エヴァさんが本気で潰すとわかれば、多分焦って止めに来るだろう。

それは俺が止めなければならない。

中途半端は何も生まない。

大体利用しようとしておきながらそれは都合がよすぎる。

それに、ネギをナギの息子としか見ていない。

特にタカミチはね。

たまに俺もそんな懐かしそうな目で見てくるのがなんとなく気持ち悪い。

あの二人を止めることになったらきれそつだな俺、と思う。

なんとか冷静さを保っておきたいが。

手札は・・・切らずには無理か？

最善は切らないことなんだが・・・。

まあなるようにしかならないか。

思考は加速する。

最善の結末を思い描きながら。

とにかく、やれることはぜんぶやるか。

ネギ、自分はまだまだなんだと気づけ。

お前はこんなレベルで燻っていいようなやつじゃない。

いづれ俺さえも越えられるだろう。

だから、今回は叩きのめされて来い。

アスナ、お前は折角手に入れた平穏なんだ。

それを自分から捨てるなんて。

この戦いで思い直せ。勿体無いなんてもんじゃないぞ。

こっちの世界は、お前にとって特に厳しい世界だ。

俺は心の中でそう呟く。

届きはしないけど、そう呟かずにはいらなかった。

次の日は朝からとても奇妙な光景を見ることになった。

原作はどうだったかもう覚えていないが、とにかく落ち込んでいるネギとそれを励ますアスナ。

昨日のことだと思いが……。

「ネギに何かあったのですか？神楽坂さん。」

「あ、アリア……先生。」

「実は昨日桜通りで……」

「わーーーー！アスナさん！！」

「なによ？」

ネギがアスナの言葉を途中で遮り、引っ張っていく。

そんなに俺に聞かれたくなかったのか？と思ったがネギのことだ。

きつと俺に心配かけたくないとか考えてるんだろう。

魔法が使えないからな。表向きは。

「に、兄さん！」

「どうした。」

いきなり言葉を掛けられたので少し素っ気無い返事になってしまっ。
悪いネギ。

「え、あの、その……。」

「どうした？はつきりしないな。」

「なにか失敗でもしたのか？」

理由はわかってる。けど聞いておかないと変だから。
わかってるってのも動きづらい。

「や、やっぱりなんでもないです!！」

「あ、こら、待ちなさい!！」

そう言って駆けて行くネギとアスナ。

朝から走る元気はあるんだな、と現実逃避。

いかな、どうも落ち着かない。

焦ってるのか？たぶん違う。

少しじれったいだけだ。

・・・同じような意味な気がする。

だめだ、頭が働かない。

少し深呼吸をしようと立ち止まる。

すうー……。

「おはよう、アリア先生。」

……？っ！

やば、苦しい！

思わず息を吐くの忘れた！！

「ゲホッ、えと、どちらさまでしょうか？」

目の前にはどこかで見たことある美少女の部類に入るだろう人。

頭の隅に何か引っかけたにはいるが、全く思い当たらない。

仕方なくたずねる事にした。

にしても、どこかで・・・。

「・・・いや、もう忘れたのかよ！

長谷川だよ、長谷川千雨！！

あ、やべっ・・・。」

ああ、長谷川ね。

・・・え？眼鏡してない？

え？なんで？

更に混乱する思考。もう頭から火が吹きそう。

にしても、

「長谷川さんですか。」

・・・猫被ってたんですね。」

もう今は疑問をぶつけるしかできそうもない。

こうなりやけだ。

どうとでもなれ。

「そこかよ！あと思慮分別って言え！！」

「いや、今現在思いつきり敬語抜きなのですが。」

「ちっ！まあいい。」

「逃げましたね。」

「逃げてねえよっ！！」

なんか漫才してる気分になってきた。

そろそろ落ち着いてきた。

頭もほんの少しは回る。本題といこう。

「すみません、あまりにいきなりだったので少し取り乱しました。
それでどうしたのですか？」

変わりすぎてて現実逃避したぐらいなのですが。」

「・・・ちょっと、がんばってみようと思ったただけだ。

もう自分を偽りたくなかったからな。」

なるほど、そういうことか。

いい方向に向かっているのかな？

なにせよ、

「そうですね。」

私も今の長谷川さんの方がいいと思いますよ。

可愛い顔してるじゃないですか。

隠しているほうが勿体無いです。」

本当にそう思った。

これで彼女の生活も変わるだろう。

異常は感じながらも、今までよりはましになると信じたい。

「・・・サンキュ。」

またなんかあったら相談させてもらっわ。」

「はい。いつでもどうぞ。」

ちょっとしたこともしれない。

けれど彼女にとってそれはとても大きなことだったんじゃないか、と思う。

そしてこの「サンキュ」って言葉。

今まで生きてきて一番嬉しかったお礼の言葉かもしれない。

それほどに嬉しかった。頬が緩む。

何気ない言葉だけど、教師って楽しい職業だと思わせるには十分な言葉だ。

これからも頑張れる。不思議とそんな気分になさせてくれる。

さてと、気張って行きますか。

その日は教室が少し騒がしかった。

話題の中心は勿論彼女だ。

本人は皮肉っぽい対応だがその反面、表情は嬉しそうだ。

みんなも照れ隠しだとわかっているもよう。

そんな光景を見るとしみじみと思う。

（本当にいいやつらばっかだよな）

途中で目が合い、ウィンクされた時はこっちが顔を背けた。

だって直視できないくらい綺麗な笑顔だったんだもの。

次に目を向けると、額に青筋が浮かんでいたが。

んなもん無視だ無視。

今日の中学生は侮れないな。

第拾伍話 桜通りの吸血鬼 ある生徒の心情とネギの成長に向けて（後書き）

はい。

こんな感じになっちゃいました。

原作とかけ離れてるわけではないと思うんですが・・・どうでしょう。

やっぱり壊れてるかも。

でも気にせず突っ走ります。
すいません。

次は吸血鬼編の大事な部分だと思います。

ネギはどうするのか。

学園長とタカミチは？

どんな展開でも楽しんでいただければ幸いです。

そろそろリアルが本腰入れて忙しくなってきました。

少しペースが落ちると思いますが、そこは大目に見てやってください。

九月あたりが一番きついかな？

隙を見て（表現変ですが）投稿しますのでどうか暖かい目で見てやってください。

さて、皆様、また次話で会いましょう。

Good night...

第拾陸話 舞台（前書き）

一日おきの更新です。

難産でした。

そしてはつきり言います。

たぶんおもしろくありません。

主人公を裏方にさせると書くのが難しい・・・。

スランプかな？

次の話はもっとましな話をのせられるように頑張ります。

第拾陸話 舞台

茶々丸と相對するネギとアスナ＋。

攻撃するかとも思ったが・・・ちゃんと自分で考えて行動できているみたいだ。

他人に流されないで自分で考え動くことは大事だから。

俺は目の前の弟の成長に頼が緩むのを感じる。

原作とは違う、しっかりと自分の意思を持っているネギ。

その目に宿るのは確かな決意の光。

この表情は物語では麻帆良祭あたりで初めて見た記憶がある。

こうなったネギは、恐ろしいほどの速度で強くなる。

俺は自分の考えに自信があつた。

理屈抜きでそう感じたから。

これは・・・化けるぞ。

もっともっと、経験を積んで

俺なんかよりも強く

そして優しくなれ、ネギ！！

第拾陸話
舞台

長谷川が変わった。

ただ単に眼鏡をつけてこなくなったただけだ。

けれど、それは彼女にとって非常に大きな一歩だったんじゃないか。

少なくとも俺はそう思う。

前向きに、ゆっくりと歩き出した彼女はきつともう

簡単には負けたりしないだろう。

その強さを見せてもらった。

俺も見習うべきなんだろうな。

エヴァさんが学園長に呼ばれた。

きつと桜通りの話だろう。

ネギの性格とエヴァさんの現状を考えたらどうなるか

組織の長ならそれがわからないはずもない。

呪いの所為でこの地に縛られているエヴァさん。

そこに呪いをかけた張本人であるナギ・スプリングフィールドの息子二人が来る。

その片方は母親似で魔力を感じられない。

ならエヴァさんが狙うとしたらネギの方。

確実に呪いを解こうと思うのならそうするだろう。

だから俺をエヴァさんに預けられたのだし、監視もしたかったのだろう。

今は共犯だけど。

十五年、ずっと中学生をやらされたエヴァさんにしてみればこのチャンス逃すなんて

はなから選択肢にないだろう。

ならどうなるか。

エヴァさんは絶対に動く。ネギの血を求めて。

止めなかった理由はネギの経験のため。

封印されているエヴァさんなら打ってつけの相手だと思ったことだろう。

少なくともいい勝負にはなる。そう思ったはずだ。

学園の先生とかでは敵としては不十分。

悪役に徹することなんてできるはずもないから。

なら元々その役として十分な相手を用意すればいいだけ。

それがエヴァさん。

あくまでいい勝負、をさせたいのだろうが。

ただどこで真祖といい勝負なんてしたら、例え封印状態だったとしても

調子に乗ることは目に見えてる。

自分は真祖とも戦える。自分は強い、と。

果たしてそれがネギの為になるのだろうか。

もし、本当にネギのことを考えているのであれば

上には上がいることを理解させるべきなのではないだろうか。

まだ九歳の修行中の魔法使いに何を期待しているんだ。

ネギは確かにかの英雄の息子だ。

だけどネギはネギだ。お父様とは違う。

失敗を繰り返して、それでもめげずに、負けずに成長できるのがネギだ。

その性質はお父様とは真逆。

なぜそのことがわからないのか、疑問に思う。

今回は観客に徹してもらう。

何があっても、止めさせやしない。

そちらの都合なんか知らない。考えたくもない。

俺はネギが成長できればそれでいい。アスナに現実を知ってもらえればそれでいい。

どちらが正しいか、なんて興味無い。

俺は俺の信じた道を進ませてもらう。

まずは自分達の矛盾に気づかせてあげます。

学園最強とその右腕さん。

「にゃー。」

「にゃーにゃー。」

周りを見渡せば猫、ネコ、ねこ。

ここが茶々丸行きつけのネコ広場か。

めちやくちゃ和むのですが。

ネコ好きの俺からしたらたまらない。

「にゃー。」

ネコを一匹抱き上げ、顔をこちらに向けながらネコ語を話す。

俺の特技の一つ、鳴き真似だ。

結構似ている自信はある。

そのまま座り込み、膝に乗せてやるとそのまま丸まってくつろぐネコ。

人慣れしてるなあ。

ここでネギ達に襲われるのだが・・・どうなるかな。

一応後をつけてきてはいるみたいだが。

「ネコの鳴き真似、お上手ですね。」

「そう？結構似てる自信はあったけどさ。

にしても懐いてるね。」

ゆったりとした時間を過ごす。

茶々丸は横でネコに餌をやっている。

この光景は絵になるな。

餌をやるロボに集まるネコ。

いつも思うけど、茶々丸って既にロボの域を越えてるよね。

ネコに餌をやるプログラムなんて入ってないだろうし。

「茶々丸ってもうロボじゃないよね。

自立行動してるし。」

「私はガイノイドですので。」

「そうじゃなくてさ。

ネコに餌を与えるようにプログラムされてるって訳じゃないだろう？」

一応聞いておこうかと思う。

もしかしたら、ネコ好きな作者だったかもしれないから。

「私にそのようなプログラムはありませんが。」

「なら、なんでネコに餌を与えてるんだ？

プログラムに入力されていない行動をとってる茶々丸。

既におかしいと思わないか？」

「それは・・・」

考え込む仕草をする茶々丸。

彼女はもうこの時点で心つてものを持っている。これは確定。

そうでなきゃ、この行動について説明できない。

理屈や理論の範疇を越えた存在。

それが茶々丸、お前だ。

「そんなに深く考えなくていいと思う。

んー・・・人が今の茶々丸と同じ行動をしてもあまり疑問を持たないだろう。

理由、わかる？」

「いえ、わかりません。」

「難しく考えなくていいさ。

それがロボットと人の違いだ。

心を持つてるか、そうじゃないただの物か。

ただそれだけの違いなんだ。

だから茶々丸はもうロボでもガイノイドでもない。

ある意味、人智を越えた存在と言ってもいい。

人の心を持ったガイノイド。

人でありながら人工物でもある。

凄い存在だ。俺は茶々丸を物として扱うことはできないけどさ。」

ネギ達にも聞こえているだろう。

無闇に攻撃させないための牽制も兼ねている。

勿論全て本音ではあるけどね。

そろそろ出てくる頃か？

茶々丸は興味深そうな顔で見つめている。

表情はあまり変わらないけど、目でなんとなくわかる。

たぶん、自分が理解できないんだろう。

今はまだわからなくていい。

きつといつかわかる日が来るさ。

まだ三年そこそこしか生きてないんだしね。

「考えすぎないでいいよ。」

茶々丸は茶々丸なんだから。

茶々丸らしくしてればいいだけ。」

「私らしく・・・ですか。」

わかりました。私はいつも通りに行動します。」

「それでいいさ。」

「さてと・・・おい、ネギー。そんなとこにいないで出て来ーい。」

あまりに出てこないから呼ぶ。

そこで初めて気づいたのか、茶々丸は警戒体制に入る。

出てきたのは、ネギとアスナと・・・+。

やっぱり来たか。

ネカネさんから手紙来てないけど、俺のも捨てたのか？こいつ。

さて、どんな行動をとるのか、見させてもらっよ。

成長してるのか・・・それとも。

「兄さん・・・いつから？」

「最初っから。」

魔力ですぐにわかる。」

でかい魔力が近くでうろつろしてれば、ねえ。

そんなことはどうでもいい。

お前の目的は茶々丸だろう。

俺は少し下がると、向き合う形になるネギと茶々丸。

アスナは何か言いたそうな顔で睨んでくるが気づかないふりをする。

「茶々丸さん・・・僕を狙うのを止めていただけませんか？」

少し考える素振りを見せるが、構わずに口を開く。

俺に聞かせたくなかったのかね。

どちらにせよ、俺は知ってる。悪いなネギ。

茶々丸は気にせず、構える。

応戦する気満々だ。

「すいませんが・・・マスターの命令は絶対ですので。

少し油断しましたが、お相手いたします。」

「だから言っただろう兄貴！

とつととやっちまおうぜ！！」

カモ、やはりこんな性格か。

これは少し話し合う必要があるな。

頼む、ネギ。早まるなよ？

心の中で願いながらネギを見る。

茶々丸の返答を聞いて俯けていた顔を上げる。

その目には先ほどまでの迷いが無くなっていた。

「カモ君、少し黙ってて。これは僕の問題なんだ。

僕は僕自身で考えて行動する。

後悔しないように。

僕は、茶々丸さんに攻撃は出来ない。

例え少しの間でも、僕の生徒なんだ。

教師としても、僕個人としても

茶々丸さんは攻撃したくない。だからしない。」

「あ、兄貴？」

これは・・・。

思った以上に成長してたみたいだな。

ついこの前まで落ち込んでたのに。

何かきつかけでもあったのか？

いや、それだけじゃないはずだ。

やっぱりネギは頭がいい。

俺の何気ない言葉もしっかり自分で考えて、自分の力にしている。

俺は想像を遥かに越える成長を遂げているネギに素直に驚く。

同時に嬉しさもこみ上げてくる。

唇の形が歪むが、俺はそれを元の形に戻せない。

男子三日会わずれば刮目して見よ、とはよく言ったものだ。

ネギはこの数日、ただひたすら悩んでいた。

今まで兄から聞いた幾つもの話。

そこに攻略の糸口が無いか。

これまでに何度も助けられた兄の言葉だ。

きっと今回も、どこかにあるはずだ。

ヒントとなる言葉が必ずどこかに。

そう考えていた。

悩んでいる途中で山に迷い込んだことがあった。

そこで会ったのは長瀬楓。 3 - Aの忍者だ。

色々な話を聞かせてもらった。主にサバイバル関連ではあったが、でも新鮮な話でとても興味を持つ。

最後には励ましの言葉までかけてくれた。

元気が無いのがバレバレだったのか、とネギは苦笑する。

けどいいきっかけにはなった。

結局人は自分で考えて自分で動かなきゃいけない。

カモ君には悪いけど、まずは話を聞きたい。

それをしてからでも遅くないはずだ。

彼女達も麻帆良女子中等部3 - Aの生徒なんだから。

少なくとも、いきなり攻撃なんてできない。

それをしてしまったら、僕はきつと後悔する。

だから。

茶々丸の行動を尾行しながら見て、さらにその思いは強まる。

（こないいい生徒を攻撃なんて、出来るはずないじゃないか。ロボ
だけど。）

ロボットなのは力モに言われて初めて気づいた。

だけどそんなことは些細な事象だ。

ネギの決意は固まった。

誰にも流されずに自分の意思で決めることができた。

この違いは大きい。

飛躍的な成長を遂げているネギ。

そのことに本人が気づいていないのは更にほんの些細なことだった。

神楽坂アスナもやはり悩んでいた。

エヴァンジェリンがまさか吸血鬼で、ネギを襲おうとしてる。

どうすればいいか、なんてわからない。

つい最近まで普通の女子中学生をやっていた彼女にわかるはずもない。

そこに来たのはあのオコジヨ妖精のカモ。

なんの冗談かと思う。

カモとネギなんて、洒落になっていない。

そしてパクティオーがどうのこうの。

意味がわからない。その契約方法も。

キス？このがきんちよに？

正直いい加減にして欲しかったしキスなんて出来るはずもなかった。

ただでさえもややしてるんだ。

するならアイツと・・・なんて少しでも考えた私はバカだ。

結局、何も考えがまとまらないままに茶々丸を尾行することになる。

茶々丸を見て思ったこと。

（めっちゃいい人じゃない。ロボだけど。）

カモは攻撃をして倒しちまえば早いと言った。

けど、それって間違ってると思う。

大体クラスメイトを攻撃なんてできるはずもない。

ロボなのは初めて気づいたが、それでも気持は変わらない。

隣にいたあいつには言いたいことがあったが。

睨みつけるが全く効果なし。

少しイラッと来る。

けど、私の気持はわかった。

ならネギを手助けくらいはしよう。

アスナも自分で考えるようになっていた。

それはアリアとの出会いの所為もあるし、ネギとの出会いの所為でもある。

今までなら、何も考えずに突っ走っていた。

けれど二人の魔法使いとの出会いが彼女を成長させている。

この事実気づいた者は今のところ誰もいない。

「後日家まで訪ねますので。そこで話をつけましょう。」

エヴァンジェリンさんにもそうお伝えください。」

「・・・はい、わかりました。」

「行きましょう、アスナさん。カモ君も。」

そう言ってその場は立ち去るネギ達。

それを見送って、思わず呟く。

「成長してるな・・・ネギ。」

「アリア先生？」

「ああ、いや、なんでもないよ。

ただ弟の思わぬ成長に嬉しくなっただけだ。」

俺は頬が緩んでいた。

これで経験が加われば……。

そう思うと先が楽しみでならない。

まだ甘さがあるけど、それがネギのいいところでもある。

理想を抱きすぎるのはよくない、けど。

ネギなら救ってしまいそうなんだよな。

敵も味方もひっくるめて全て。

無理だとは思ってるけど、それでもなんとかしてしまう。

そう思えるんだ、ネギを見ると。

ほんとの英雄は、お前みたいなやつのことを言っただと思う。

お父様ではなく、赤き翼でも、俺でもなく。

この物語の主人公、ネギ。

お前だ。お前なんだ。

俺は弟の更なる成長の為に画策する。

その計画の邪魔はさせないこと。

今一番考えなければいけないのはそこだ。

「エヴァさんは徹底的に敗北の二文字を刻み付けてあげて。」

「わかった。だがジジイどもが止めに来るぞ?」

「そっちはなんとかする。だから頼むよ。」

きっとあのオコジヨがいたらんことをするから気をつけてね?

アスナとネギは近づけさせちゃだめだから。」

「僕は?」

お前は観戦してていいよ。

どっちみち動けないだろう。

手札は見せたくないしな。

後は・・・もうないか?

「くれぐれも殺さないでよ?」

「わかってる。女、子どもは殺さん。」

「僕はすることないのか・・・それはそれでつまらないね。」

「少しは大人しくしてろ、戦闘狂。」

「・・・最近扱いが酷くないかい？」

確かにその自覚はあるけど。」

うずうずしてるのが目に見えてるんだよ。

タカミチとか学園長と戦いたいとか思ってるんだろ？

武者震いしてるし。

この件が終わったら魔法ありで戦闘してやるから今回は大人しくしてなさい。

「約束だよ？」

破ればどうなるか……。」「

「もし破っても全力なら負けん。

それに破るつもりも無い。」「

「……少しイラつときたね。

覚悟しときなよ?。」

墓穴掘ったがまあいい。

それで今回手を引いてくれるなら安いもん。

ネギの成長のためだからな。

アスナの今後のためでもあるけど。

「ケケケ、楽シミダ。

切り刻ンデヤルゼ。」

「「お前がいたか。」」

お前も自重しろ。

後でいっぱい戦^{かま}闘^{って}やるから。

夜は更ていく。

真祖と道化は舞台を整え終わる。

舞台に上がるのは勇者と姫。

話の大筋はできた。

後は役者の演技にかかっている。

この舞台の脚本は道化がつくり

真祖は道化と共に演技をし

それにつられて舞台に出演する勇者と姫。

結末は、フィナーレを迎えるまで誰にもわからない。

時は刻一刻とその結末に向けて近づいていく。

そして、舞台はついに開幕を迎える。

観客が三人の舞台が、満月の夜の

静寂に包まれた麻帆良で正に始まるうとしていた。

第拾陸話 舞台（後書き）

なんか単調に見えてしまう・・・。

次は話の一番重要部分になりますので少しは面白くなると思います。
遅くなってるのに本当に申し訳ない・・・。

気分転換でもしてきます。

第拾漆話 真祖の実力、命の危険、乱入者、そして終幕（前書き）

皆様お久しぶりです。

一週間近くあいてしまつて申し訳ありません。

いや、持病舐めてました。

小さい頃から喘息なんて持つてるこの体が憎いorz
仕方ないんですけどね。

アレルギーもあるなんて不便な体ですよほんと。

パソコンを開かない日が四日くらいありましたが、なんとも久しぶりですね。

何年振りでしょうか。

違和感が凄かったです。

今回は吸血鬼編の大事な部分です。

次回で完結します。

バトルは・・・あまりないですね。

駆け引きの方が多めです。

次は三日以内に投稿してみせる・・・。

第拾漆話 真祖の實力、命の危険、乱入者、そして終幕

「・・・黙れよ。」

俺はいい加減堪忍袋の尾が切れていた。

目の前にいる人間に対してだ。

さっきから聞いてれば、納得なんてできるものじゃない。

そんなことはハッキリ言っただうでもいい。

英雄になりたきゃなればいい。

立派な魔法使いになりたきやなればいい。

俺には関係無い。

だけど、何故そこに一般人を巻き込む必要があるのだろうか。

俺には到底理解なんてできない。

だから俺は立ちふさがる。

自分の思いを、決意を、踏みにじられるのが我慢なら無いから。

俺を退かせたければ、それ相応の理由を言ってくれ。

じゃなきゃ絶対に退かん。こっちにも譲れないものがあるんだ。

第拾漆話 真祖の實力、命の危険、乱入者、そして終幕

「さて、計画通り進めばいいんだけどな。」

「そうだね。まあ計画にイレギュラーは付き物だよ。
いつでも動ける準備はした方がいい。」

今回はフェイトが潜入とかでよく使っらしい隠遁術を駆使して近くで観戦している。

そして、視界に映るのはネギとエヴァさん。

アスナは後から来るのか・・・。

フェイトの言うとおり準備しとかなきゃな。

「後は無粋な乱入者達についてだが・・・。」

「見る・・・ね。」

「うちには気づいてないけど。」

「そりやお前さんの本気の隠遁術ですからねえ。」

「その辺は信用してる。」

「嬉しいこと言ってくれるね、全く。」

歴戦の兵ですからね、あなたは。

その実力が無きや赤き翼が英雄なんて呼ばれることはなかったろう。英雄って呼ばれるものの条件には『強敵がいること』ってのも重要なんだから。

三流の悪党倒したところで英雄なんて呼ばれない。

乱入者については・・・動きを見せたら、かな。

あっちの様子も気に掛けなきゃいけないから暢気に観戦なんてできない。

（エヴァさん、信頼してるからね。）

ネギ達はエヴァさんに任せて、自分の役割に集中する。

俺は道化。

人を化かし、自分の道を進む。

この神聖な舞台に乱入者は近寄らせない。

この物語で言うなら、俺は警備員なんだから。

「真祖が中々にいい悪役しているね。

君の弟の魔法と同程度のものを撃って遊んでる。

プライドを叩き折るつもりかな。」

「だろうな。そう頼んだし。

そろそろ本気を出すとは思っただけど・・・お、やっぱり。」

「かなり魔力を練ってるね。」

普通なら死んでもおかしくない量だよ、あれ。」

エヴァさんが殺すことはまず無いからそれだけネギが粘ったってことだろう。

こんなところでも弟の成長を見られ内心喜ぶ俺。

だけどあんまりのんびりはしていられない。

そろそろ、動く。

「・・・ここで来るか。」

「あっちが動いたね。」

余程焦ったと見える。行くの?」

「ああ。なんかあったら頼むわ。

自分の仕事して来る。」

フェイトから「気をつけて」と言葉を背中に掛けられながら動く。

友人の成長にも嬉しくなるが、今は気持を切り替えて真剣モードに入る。

邪魔は・・・させん。

学園長は焦っていた。

エヴァとネギの戦いはもつと拮抗すると思っていたから。

だけど蓋を開けてみれば、エヴァに慢心など無くネギとの圧倒的な力の差を見せ付けていた。

そして、本気の魔力の奔流に流石に動かずにはいられなくなる。

（それはちとまずいぞエヴァ！）

そして近づく道化の気配には気づけないでいた。

タカミチも同様に焦っていた。

どこかで、ネギならなんとかしてしまふ。そう思っていたから。

ただどつにもならないほどの経験と実力の差がエヴァとネギにはある。

あくまで傍観しようと思っていたが、エヴァの本気を肌で感じ、危

険信号が鳴り響く。

あれは止めなきゃまずい。

そしてその焦りからか、やはり道化の気配には気づけず。

（やりすぎだエヴァ！間に合え！！）

焦った学園のトップ二名に、立ちはだかるのは

「どこへ行くのですか、お二人さん。」

道化、アリア・スプリングフィールドであった。

「どこへ行くんですか、お二人さん。」

正面から二人を見据える。

俺の笑みは月光にさらされ、少々不気味に映っていることだろう。

だけど今はそのくらいが丁度いい。

あくまで笑みを絶やすことなく二人を見つめ続ける。

呆気にとられている二人。

先に気を取り直したのは・・・学園長。

「そこをどくんじゃ。」

何故ここに、とは聞かない。

そんな時間はないのだろう。

俺も無駄な会話などしたくないから好都合だけど。

それにしてもどけ、か。

「なぜです？と今まで傍観に徹してきた二人に私は問いますね。」

聞きたいことはいっぱいあるんだ。

一つひとつ順を追って説明してもらおう。

それで納得できれば退いてもいい。

まあ、間に合わないと思うけど。

「いいからそこをどくんだ。」

今度はタカミチ。

少し殺気を出して威圧してくる。

ポケットに手を入れて既に臨戦態勢に入っている。

けどそんなことじゃあ、どかない。

どいてなんかやるものか。

「嫌ですね。」

ここを通りたければ二人の考えを話すかもしくは・・・」

言葉を言い終える前に顔の横を拳圧が通り抜ける。

背後の木が折れるような音がしたが些細なことだ。

やはり聞く耳持たないか。

わかってはいたけどなんかイラッと来るね。

あくまで表情には出さずに見つめ続ける。

「もう三度目はない。」

そこをどくんだ。」

さらに威圧感が増す。

けど怯まない。

怯んでなんかいられない。

「怖いですねえ。」

ああ、それとさっきの話の続きですが・・・。」

俺はあくまで自然体を貫きながら、能力の一部を開放する。

ここで使うのは瞬間移動。

一瞬で二人の背後に回りこむ。

「話さないのであれば力づくでどつぞ。」

そしてありったけ殺気をぶつける。

首筋に換装した二ふりの剣をそれぞれに押し当てながら。

動いたら切る。

その意思も込めて。

勿論そんなつもりはこれっぽっちも無い。

けれど『交渉』ってのは気を抜いたほうの負けだ。

脅迫とも言っけど。

「「なっ……。」」

「話さないのならここから先へは行かせません。」

観客は黙って見ていてください。

もう一度聞きます。

何故、今更止めるのですか？」

三度目はありませんよ、お二人さん。

タカミチの言葉を借りるならこの言葉しかない。

俺はそう思いながら冷めた目で二人を見つめる。

あくまで笑顔は絶やさずに。

「なんのこたのう……。」

「そんな嘘が通じるとでも？」

エヴァさんのことを知ってて事前に止めなかったのは明らかに不

自然じゃないですか。

なら知ってて止めなかったと考えるのが自然です。

そんなこともわからずに組織のトップなんて務まりませんからね。

理由、話さないなら私の推測でも話しましょうか。」

間違ってるなら訂正入れてくださいね、と念押し。

二人が息を飲むのがわかる。

こっという雰囲気にも飲まれてくれるのはありがたい。

勝手に自滅してくれそうだから。

「まず大事なのは、目的ですね。

今回エヴァさんを止めなかった理由は簡単。

ネギに経験して欲しかったのでしよう。

魔法使いとの戦闘を。」

俺の言葉を真剣に聞く二人。

そうやって大人しく話を聞いてくれると楽だ。

「そこには私も賛成です。

実戦というものを経験するのはとても大事なことから。

ただ、お二人と私の考えが違うのは次です。

どんな経験をさせたいのか。」

静寂に包まれた森の中で、響くのは俺の声のみ。

エヴァさんもネギと話をしているのかな。

やたら時間をかけているみたいだ。

少し向こうのことも考えてしまうが、今は自分の役割を全うしなきゃならない。

エヴァさんを信用して目の前に集中する。

「お二人は恐らくこう考えたでしょう。

あくまでいい勝負をさせたい、と。

それもいい経験になることは確かですよ。

けど、私はそれ以上に大切なものをネギに学んで欲しい。

だからこう考えました。

完膚なきまでに叩き潰してもらおうと。」

「そんなことしたらネギ君は潰れてしまう!!」

タカミチが声を荒げる。

けれど俺は気にすることなく続けさせてもらっ

「そうでしょうか？

私は後のフォローでどうにでもなると思いますよ。

大体、たかだか九歳の子どもが真祖の吸血鬼に勝てると思っ
てい
ることが間違いなのです。

万が一勝ってしまいでしたら、そこでネギは慢心してしまう
で
しょう。

僕は強い、僕は凄いと。

変な自信を持つと後が怖いと思いませんか？

特に、私達の場合は命を狙われることも多くありますから。

慢心なんてしていたらあっという間に命を落とすことになります
ね。
」

そうだ。

英雄なんてものは、それだけ多くの人を救ったという証。

だけど裏を返せばそれだけ多くの敵がいるってこと。

お母様を恨んでいる人もいる。

『災厄の魔女』なんて呼ばれてしまったのだから。

真実を知らない人の方が多いんだ。

その二人の子どもが、のうのうと暮らせる訳が無い。

タカミチもわかっているのだろう。

今は黙って聞いている。

「ネギには長く生きて欲しい。

そのために今必要なのは中途半端な自信なんかじゃない。

世界の広さを知ってもらうこと。

自分の小ささに気づいてもらうこと。

それが大事だと判断したから私はエヴァさんに頼みました。

力の差を見せ付けてあげてください、と。」

「・・・それでネギ君が潰れたらどうするんじゃない?」

学園長が静かに聞いてくる。

けどその質問は予想の範囲内。

「その時は仕方ないですね。諦めて死んでもらいます。」

「君は!!!ネギ君がどうなったっていいと言っのか!?!?」

「誰がそんなこといいました？」

大切ですよ。あなた方の思ってる以上に。

けれど、仕方ないじゃないですか。

その程度で潰れるようじゃいつか簡単に殺されます。

戦争を経験してきたあなたがそんなこともわからないのですか？

高畑・Ｔ・タカミチ。」

「それは……。」

赤き翼にいたあんたがなぜそんなこともわからない。

現実つてもんはそこまで都合よく進まないってこと、よくわかってるだろう。

少しイラついてきたのを必死に抑えながら話す。

「それに、あなた達はネギの何を見てきたのですか？

あいつは確かに天才です。

ですが、ネギの力の根幹にあるのは努力と負けん気。

どんなことにも負けず、努力して乗り越えてしまっ。

それがあいつの怖さです。」

「……………」

「なぜそのことがわからないんですか。

……いい加減、あいつにナギを重ねるのは止めろよ。」

「それは違う！」

学園長は黙り込む。

その表情は、思い当たる節があるってところか。

タカミチにはいい加減イラついてきた。

「どこが違う？

違うというなら何故ネギを見ていない。

お前らの中のネギがどんな人物が言ってみろ。

俺の中のネギと比べてやる。」

いい加減頭にきていた。

いつもの丁寧な口調が無くなったことがそれを物語っている。

けど、そんなことは気にしていられなかった。

「お前らがネギに何を重ねているかなんてすぐにわかる。

懐かしむような目、時折見せるおかしな行動。

二代目ナギを育てようとしてるんだろ？

そう考えれば全てに納得がいく。」

こいつらの行動なんか本音を言えばどうでもいい。

ただ、ネギをナギに重ねているのだけは許せなかった。

ネギはネギだ。

それが何故わからない。

それに・・・。

「あんたらが何を考えてるのは知らないし、知りたくも無い。

だけどあのクラスの生徒達をこちら側に巻き込むのだけは認められん。

一般人だぞ？俺やネギと関わることの危険さをわかっているのか？

答える。」

「ネギ君のためじゃ。それが何故わからん！！」

学園長の怒声が響く。

何故怒っているのかわからないが、俺は怯まない。

それなりの覚悟はしてきている。

「ネギのため？

ならもつと優秀なの連れて来いよ。

裏の世界を知っていて、さらに天才と呼ばれる人たちをな。

それだけでネギの生存率は上がるし貴重な指導者もできる。

年も近けりや言うこと無しだ。

従者つてのはそういうところから連れてくるのが一番だと

そう思わないか？

うちの生徒達が異常な才能を持っているのは知ってる。

だけどあくまで一般人だ。本職には勝てはしない。」

確かにあのクラスは異常だ。

身体能力、思考速度、理解力、知への探求

他にもそれぞれが一般人よりも秀でている部分が目立つ。

でも、それはあくまで一般人と比べたら、だ。

裏の存在を知らなきゃどうにもならん。

知ってるやつも数人いるが、そいつらだけなら別にいい。
けれどこのままいけば、ほとんどの奴が関わってしまう。
ここは漫画の世界なのかも知れないが、現実でもある。
なにが起きるかなんてわかんない。

ご都合主義は存在しないんだ。

それだけじゃない。

「神楽坂アスナ。

彼女はウエスペルタティアに縁のあるものだろ。

俺を見た時の反応、魔法無効化能力。

・・・十中八九『黄昏の姫御子』だな。」

「なぜ、それを？」

「調べりゃいくらでも出てくんだよ。」

それにそう考えたら説明が簡単につく。

俺が聞きたいのはそんなことじゃない。

なぜ彼女は記憶がないんだ？」

タカミチと学園長は絶句しているのが見て取れる。

全部知ってたけど、多分気づく奴は気づく。

タカミチ、なぜ記憶を消したんだ？

「……僕の師匠の遺言だよ。」

それを実行したんだ。」

「そうか。それは別に構わない。」

彼女が平穏に暮らせるのは俺もいいと思う。

けどな・・・」

ガトウの遺言は別にいいと思う。

それは大事なことだろうし、彼女はここで静かに暮らしていた。

事実そうであり、このまま死ぬまでそうならよかったんだ。

「今になってなぜこちら側に引き込む必要がある。」

このまま魔法なんて知らないで一生を終えた方が良かったんじゃないのか？」

「僕は、ネギ君に関わってこちら側に来るのなら・・・それが運命だったと思う。」

「運命？そんな簡単な言葉で人の一生を決めてんじゃねえよ。

お前は彼女がこちら側に関わらないように努力したのか？

何か行動したのか？してないだろ。

それは運命とは言わない。

必然じゃないか。

ネギがあのかラスに入って、神楽坂アスナと同室になったら

どうなるか、そんなこともわからないくらい平和ボケしてんのか？

もし、関わらせるんなら記憶くらい戻せ。

どちらかしか選べないだろう？

中途半端なことばっかしときながら綺麗な言葉でまとめんな。」

黙るタカミチ。

その顔に浮かぶのは迷い。

自分の行動を振り返って、俺の言葉を聞いて迷っている。

どれだけ崇高な理念があったとしても、彼女達のことを本気で考えているとは思えなかった。

学園長はナギ二世をつくりたいだけ。

タカミチにいたっては何がしたいかさえわからない。

その思いも行動も中途半端にしか見えない。

「大体、あのクラスの生徒は関係無いだろう。

お前は仮にも担任だったんだろ？

ならなぜ魔法に関わらせないように努力しない。

行動しない。

魔法使いってのはそんなに偉いのか？

子どもの一生を勝手に決めていいもんなのか？

命に関わる選択だったのに、本人の知らないところで

勝手に誘導して。

あんたらは神にでもなったつもりかよ。」

「黙って聞いてれば好き勝手言いおって・・・。

それが最善の選択じゃと何故理解できんのじゃ!!」

「・・・黙れよ。」

いい加減、殺すぞ?」

俺の頭の中で何かが切れる音がした。

最善？

だからなんなんだよ。

こいつはそれが許される人間だとも言つつもりか？

許されるわけが無い。そんなことがあつてはならない。

自分の道は自分で決める権利がある。義務がある。

それを他人が決める？

ふざけんのも大概にしろ・・・！

「彼女達は死んでもいいと？」

仕方ないと？そう言う事か？

ふざけんじゃねえ！！

お前に何の権利があんだよ！

彼女達は彼女達の道を、自分で決めて歩いていく・・・。

それが普通であり当たり前なんだよ・・・！

お前みたいな奴が決めていいわけがない！！」

ありったけの殺気を込めて心の底から叫ぶ。

こいつらの考えはわかった。

尚更ここを通すわけにはいかない。

彼女達の為に、ネギの為に、そして・・・

なにより俺の為に。

「あんたらはここで大人しくしていてもらう。

次に目覚める時は全て終わっているさ。」

首筋に手刀を落とし、一瞬で意識を刈り取る。

こっちの役目は終わった。

後は頼んだ、エヴァさん。

s i d e エヴァンジェリン

私は、ネギ・スプリングフィールドと神楽坂明日菜に対して
なにか思うところがあるわけではなかった。

まあ呪いが解けるならやってやらんこともない、って感じか。

アリアからこの作戦を聞いた時はそう思っていた。

だが、それも日に日に変わっていく。

最初は情けなく、甘ちゃんでつまらんかったが、何かをきっかけに様変わりしていく。

今日の前にいるネギという人物は最初に見た時とはまるで別人。

戦闘や魔法に関して言えばまだまだだが、伸び白は大きい。

まだ九歳だ。

そのことを考えると十分すぎるくらいだ。

「どうした坊や。もう終わりか？」

先ほどからネギ・スプリングフィールドが使う魔法を読み取り

同系統の魔法を、威力、数を圧倒したものを出しプライドを削る。

すでに満身創痍の状態。

それでも尚立ち上がろうとしてくる。

「ぼくは・・・まだ・・・やれ、ます・・・。

あなたも、ぼくのせいとのいちいん・・・

みんな、みんなを、すくってみせる・・・。

ぼくは、まけられない・・・！」

そして真祖の前にこの台詞。

面白い。本当に面白いな、こいつの家系は。

ぼろぼろになりながら、尚相手までも救おうというのか？

しかも生徒だからとかくだらん理由で。

自分が死ぬかもしれないこの状況で。

そこにどれだけの決意が込められているのだろうか。

私にはわからん。

きつと、アリアにもわからん。

だが、面白い。

こいつには人を惹きつける何かがある。

「まだ立ち上がってくるのか。」

なら、最強種である真祖の力、その身にしかと焼き付ける。」

こいつの想いは所詮理想だ。

全てを救う？そんなこと出来るはずも無い。

だが、こいつはそれを薄々理解している。

それでも、その理想を追い続ける。

実に愚かなことだ。

だが、私には無理だ。

それを成そうとするこいつは大バカものだ。

今は何もかもが未熟だが、成長したら面白いことになるだろう。

修行でも見てやるか？

私はそんなことを考えながら魔力を練る。

ありったけの魔力をつぎ込んでの闇の吹雪。

ふつつなら死ぬ。

けど殺しはせん。この先楽しみなんだ。

「今はただただ理解しろ。

世界の広さ、最強と呼ばれる者の力を・・・。

闇の吹雪!!」

手をかざし最後の鍵となる言の葉を紡ぐ。

体から魔力があふれ出し、それが圧縮されて吹雪となり、坊やを襲う。

直撃は避けてある。

余波によって気絶はするだろうが、茶々丸に任せて安静にしておけばすぐに回復するだろう。

今のうちに血を貰おうか。

私は坊やの首筋に噛み付き、血を啜る。

まだ呪いは解けない。

けど、もう一、二回吸ったら無理やりぶち破れるな。

後は・・・。

「貴様だ、神楽坂明日菜。」

「ネギは？殺したの・・・？」

殺しはせんよ。

呪いも解けていないんだ。

それよりも、貴様はバカだ。

「殺してはいない。まだ利用価値があるからな。

それよりも、貴様、何故来た？」

「ネギを放っておけないもの。

それにあいつだって・・・。」

ふむ、アリアに惚れたのか？

坊やはないだろう。

餓鬼っぽすぎるからな。

「アリアに惚れたか？」

「な・・・！」

そんなわけないでしょー！！」

これは・・・まじか？

なかなか面白いことになっているじゃないか。

「まあいい。」

それよりも貴様、平穩を捨てるといつのか？

もう二度と戻っては来れんぞ？

死んでも仕方ない世界なのだからな。」

ウェスペルティア縁の者が何故ここにいるかは知らん。

予想はつくがな。

黄昏の姫御子・・・だったか？

今こちらの側に戻るなら、確実に狙われるだろう。

勿体無いなんてものじゃない。

それでも、こちら側に来るのか？

私は目で訴える。

平穩の、静かな暮らしの大切さを私は理解しているから。

「わかんないの・・・。」

何がなんだかわかんない。

けれど無視もできない。

私は・・・バカだから。

考えて、考えて、それでもわからないのなら

自分の思ったようにしか行動できない。

それが私なのよ。」

「死んでも文句は言えんのだぞ?。」

「それでも・・・よ。」

そうか。

なら、身をもつてわかってもらうしかないな。

魔法が効かないと言っても今は一般人。

死の恐怖を刻み込んでやる。

それでも立ち向かう勇氣・・・この場合は無謀だが。

それがあるなら見せてみる。

「なら・・・ここで死んでも構わんな？」

「そう簡単に死んでやるものですか！！」

吼えると同時に突っ込んでくる。

速いが、私にとって大したことはない。

突き出してくる拳を軽くいなし、投げ飛ばして地面に背中から叩きつける。

神楽坂明日菜の肺から空気が漏れるようなうめき声が聞こえるが無視して糸で縛る。

後は首を徐々に絞めるだけ。

ゆっくりと死へ近づく恐怖を与えるだけだ。

首に手をかけ力をこめる。

「う・・・くっ・・・」

「どうだ？これが魔法・・・スプリングフィールドに関わる代償だ。

苦しいか？怖いか？逃げたいか？

今すぐ許しを請えば殺すのだけは勘弁してやる。

どうする？」

人間は逃げ道を用意すれば飛びつくだろう。

心理的な思考誘導だ。

普通ならここで諦めるだろう。

貴様はどうなんだ？神楽坂明日菜。

「わた・・・しは・・・。」

「なんだ？許して欲しいか？死にたくないか？」

「わたし・・・は・・・」

ぜ・・・たい、にげ・・・ない・・・。

にげたく・・・ない・・・。」

やはりこいつはバカだ。

なぜ他人のためにそこまでする必要がある。

なぜ折角手に入れたものを自分から捨てる必要がある。

私には全く理解できん。

「なら死ぬただぞ？」

「それ．．．でも．．．よ。

あいつは．．．あいつ．．．ら．．．は．．．

ずっと．．．ひとりで．．．

こわ．．．いおもい．．．するんだ．．．。

ほうつて．．．おけ、ない．．．の．．．よ．．．。

しかた．．．ない．．．じゃない．．．!」

糸を引きちぎって私の手を掴む馬鹿。

その腕にはいたるところに傷がついている。

「仕方ないじゃない・・・！」

あいつの、アリアのこと考えたら・・・いてもたってもいられなくなるんだから！

私は考えて行動なんてできないのよ！

気づいたらもう体が動いてるんだから！！

私は、本当にバカなのよ・・・それで死んだって文句は言えない・・・。

けど、それでも！！

今放って置いたらきつと、後悔するわ！！

そんなの、嫌なのよ！！」

私の手を首から離しながら叫ぶ。

本気ではないにしても、私の腕を放す力は凄まじいものがあった。

火事場のなんとかか？

そんなことより、こいつ……。

やはりバカだ。

大バカもんだよ、貴様は。

死を前にしてもそんなことが何故言える。

理解できん。

けど、少なくとも

覚悟は見せてもらった。

これから大変だぞ……『神楽坂』。

首筋に手刀を落とし、意識を刈り取る。

お前も愛されてるな、アリア。

少し、羨ましいじゃないか。

私は孤独でしか生きられないから・・・な。

「そんなことはないですよ。」

ふとそんなアリアの言葉が耳に聞こえた気がした。

しかし私の周囲には誰もいない。

自分の都合のいい耳に苦笑してしまう。

けど、あいつならもしかしたら……。

そんなことも考えてしまう自分がバカらしかった。

なんだ、私もバカじゃないか。

首を二、三度左右に振り、先ほどの考えを頭の隅に追いやる。

だが、そんな希望を奴に持ってしまった私がいた。

「今日は……月が綺麗だな。」

不思議と軽い足取りで帰る。

茶々丸に坊やと神楽坂に任せて。

今日は飲もうか、月でも見ながら。

アリアにフェイト、チャチャゼロも混ぜてやろう。

笑顔で帰るは不死の吸血鬼。

付き従うメイドが抱えるはこの物語の主人公達。

そして舞台は幕を閉じる。

勇者と姫が勝つありきたりの物語ではない。

この結果が出るのは、翌日。

主人公達が目を覚ましてからだ。

第拾漆話 真祖の實力、命の危険、乱入者、そして終幕（後書き）

今回は見直しする氣力すらなかったです。
もし何かあれば気軽にどうぞ。

次は皆の心情やら今回の件についてのまとめみたいな感じだと思います。

それが終われば・・・ほのぼの挟んで修学旅行だ・・・！
早く書きたい。

書き直しもしたい。
やりたいことだらけです。

ではまた次回お会いしましょう。

第拾捌話 新たな決意と暗躍する赤（前書き）

中四日と言ったところですね。

みなさんいかがお過ごしでしょうか。

今回で吸血鬼編は一応終わりです。

次回から二話ほど空いて修学旅行に……！

やっとなんだ。

もう修学旅行がゴールでよくね？とか思ったり。

いや、よくないのはわかってますけどね。

書きますよ。麻帆良祭までは。

次は学園側の反応と日常って感じですね。

ついに学園魔法使いが……！

その次は……多分驚きます。

予想外な展開にしたいです。

そういえばいつの間にかPV40万、ユニーク3・5万くらいを越えていました。

なんか、もう……泣きそうっす（p q）

本当にありがとうございます。

感想も一つひとつ返していこうと思っていますのでどうかよろしく
お願いします。

第拾捌話 新たな決意と暗躍する赤

とりあえず上手くいったのかな。

吸血鬼編を終えた感想がこれ。

エヴァさんのおかげでネギは一回りも二回りも大きくなっただろう。

アスナは・・・はあ。

問題はこつちなんだよな。

思わず吐いてしまったため息を止める気にもならない。

世の中ってこんなものかねえ・・・。

第拾捌話 新たな決意と暗躍する赤

大事なイベントをまた一つ終えた俺は、エヴァさんの別荘で二人が起きるのを待つ。

勿論、今回のことは素直に話すつもり。

その上でしっかりと答えを出してもらう。

起きるまではすることもないので雑談タイム。

「エヴァさん、フェイト、どうだった？」

主語が抜けているがきつと伝わるはず。

この二人は頭がいいからね。

聞いた理由は二人の目にネギはどう映ったのか

それが知りたかっただけ。

フェイトの頭の上に乗ってる「ケケケ。」とか時折発する

人形は気にしちゃいけない。

「そうだね。

まず言えるのは、未熟。この一言につきるかな。

まだ九歳だからと言ってしまえばそこまでなんだけど。

後は人間性だけど・・・はつきり言っただけ。

あれは持つて生まれたものの？それとも何かあったとか？」

「あれは性格だ。

他にも原因はあるんだろうが・・・。

どう育ってもネギはきつとああいう生き方をする。

ネギがネギであるかぎり。」

フェイトが聞いたのはネギの在り方。

全てを救いたいという理想のこと。

あれは多分、悪魔襲撃は関係ない。

それもきつかけではあるのかもしれないが、根っこにあるのは

良くも悪くも、ネギの優しさだと俺は思っている。

はっきり言ってしまうえば無謀、無理、不可能。

どこかでそう思っていないながら、それでも追いかける。

ネギのそんな生き方は、この先どうなるのか。

俺には全くわからない。

前世で有名だったゲーム『運命』の主人公に似ているかも。

赤い弓兵になるのか、正義の味方厨になるのか。

それともまた違った生き方になるのか。

まだ判断はできないかな。

なんにしても、俺の教えられることは全て教える。

色々な見方があることを知ってもらおう。

なにより、長生きしてもわないと。

フェイトは俺の返答に対して「ふーん。」と興味があるように相槌をうつ。

なんか目が爛々としている気がするんだけど・・・。

「結論から言うと・・・この先が楽しみ、かな？」

もっと強くなってもらって、いつか闘いたいね。」

「・・・そうか、お前はそういう奴になってしまったのだったな。

すまん。聞いた俺が悪かった。」

「なんか気に食わない言い方だね・・・。

こうなったのは君の所為なんだって理解してる?。」

断じて違う。

それはお前に元々あったものだ。

俺はきっかけにすぎん。

フェイトの返答に思わず心の中でツッコミを入れる。

声に出さないのはまた責任どころ言われるから。

「そのことはもういいってば。」

エヴァさんはどっつっ。

今度はこれまで沈黙を保っていたエヴァさんに振る。

なんかずっと思え込んでいたようだけど、なんだろう？

けど、まあいいか、とすぐに思考を止める。

俺はエヴァさんの考えなんて読めん。

「よし、決めたぞー!!」

「「はい？」」

これまでの話を無視していきなり大きな声でそう言うエヴァさんに
思わず呆けてしまう。

フェイトとハモッてしまいがこれも仕方ない。

はつきり言って意味不明。

「坊やは私が育ててやる。」

うん、決めた。今決めた。

いいだろ？アリア。」

「いや・・・それは別にいいけど、またなんで？」

それだけネギを気に入ったってことか？

エヴァさんは突拍子も無いから困る。

・・・俺もあんまり人のこと言えない気もするけどさ。

なんにしても、理由が知りたい。

あの面倒くさがりなエヴァさんだよ？

なんか裏があるんじゃないかと考えてしまつのは

普段のエヴァさんが悪い。うん。

「理由？そんなもの簡単じゃないか。

面白そうだからだ。

あの坊やが悪い魔法使いの考え方を知ったらどうなるのか・・・。

私にも想像がつかん。

面白いとは思わないか？」

「あー、うん、そうだねー。」

俺は棒読みな返答をする。

フエイトは「やれやれ。」と言いながらため息。

お前も似たようなものだけだな。

けどそうだった。

エヴァさんはこういう人だった。

なんかもう、どうでもよくなってきたなあ。

でもエヴァさんに教えてもらえるのは好都合か？

知識や経験、環境と三拍子揃ってる。

強くなるにはこれ以上無い好条件だよな。

確か修学旅行終わってからエヴァさんに師事してたから、原作よりは強くなれるか。

なにより、エヴァさんがやる気になってくれるのはあり難い。

「ドウデモイイガ、刻ミテエゼ。」

「やめてくれ。」

戦闘狂名殺戮人形にため息を吐くのはいつものことだ。

あれからしばらくして、茶々丸から起きたと連絡が来たので俺とエヴァさんで話を聞きに行く。

フェイト？コーヒー飲んでたけど。

暇になったらチャチャゼロと模擬戦でもやるだろ。

やる場合は俺の別荘に行ってくれるから楽。

あんまり壊したら片付け＋説教だけど。

そついや、カモ見てないな。

どこ行つたんだろ？

仮契約はしてないってエヴァさんから聞いたけど気になる。

部屋の前まで来たので思考を止める。

ずっと看ててくれた茶々丸に対してお礼を言つてエヴァさんと一緒に入る。

ネギとアスナはおれの姿に目を見開いていた。

まあ、当然の反応か。

「兄さん・・・？どうして・・・。」

「あ、アリア？」

「俺がここにいることに疑問もあるだろうけど

今から説明するから少しの間黙って聞いてて。」

一連の件について説明する。

話している間はきちんと黙ってくれていたので楽だった。

物凄く何か言いたそうな目だったがそれはあえて無視する。

後でまとめて答えたほうがわかりやすいと思うから。

「つまり、今回のことは全部俺が計画したって話。

ここまでで何か質問は？」

大体の話を終えた俺は質問を促す。

そろそろ黙っていらなくなりそうな雰囲気だったから。

「アリアは、なんでこんなことしたの・・・？」

「うん。まずはそこだよな。」

・・・俺が計画した理由はお前達二人に対して知って欲しいことがあったからだ。」

「知って欲しいこと？」

アスナが質問してきたのは、今回の件を計画した理由。

一番大事な部分だ。

二人ともに違う理由があるからそれぞれ説明しなきゃならない。

だけど蔑ろにもできないからきちんとさせてもらう。

アスナに関して言えばこれで諦めて欲しい。

だから真剣に、わかりやすく話す。

「そうだな、まずネギ。」

「はい。」

「お前は今回エヴァさんと戦ってどう思った？」

「うん・・・はつきり言って怖かった。

魔法使いと戦うとは思ってなかったし、負けるとも思ってた。た。

けどそれは、ただの自惚れだと気づかされた。

僕なんてまだまだだって、そう痛感させられた。」

「だろうな。

俺がネギにエヴァさんと戦ってもらった理由はいくつかある。

まず、お前に魔法使いとの戦いを経験してもらったため。

俺らスプリング・フィールドの血は普通の魔法使いよりも戦闘が多いだろう。

英雄ってのは全ての人から尊敬される訳では無いからな。

命を狙われる場合もあるだろう。

経験があるのと無いのじゃ生存率が全然違う。

だから経験させたかったのが一つ。

エヴァさんは魔法使いの中でもトップクラスの強さだ。

そんな上位クラスの魔法使いがどれほど強いのか。

それを知ってもらいたかったのが一つ。

後は俺らを通して魔法の世界に関わってしまったらどれほど危険
かとか

お前に世界の広さを知ってもらい、更に努力して欲しかったとか
理由はたくさんあるが、後は自分で考えてみる。

学んだことは多いはずだ。」

これ以上は俺が説明しても無駄だからな。

自分で気づくつても大事。

だからネギはちよつとの間放置だ。

エヴァさんがあまりに静かだったから寝てるのかとも思ったが、普
通に話し聞いてた。

少し驚いたな。

「後はエヴァさんと話してみるのもいいんじゃないかな。

エヴァさん、頼める?」

「お前は?」

「アスナさんと二人っきりで話すよ。

これは他人に聞かせたい話でもないだろうし。

アスナさんはついてきて。」

黙って着いて来るアスナに妙な感覚を覚えたが、今は関係無い。

とりあえず静かな場所で話そうか。

どこがいいかな・・・。

あ、ネギが過去話を暴露ったとこでいいか。

塔の天辺だったよな？

うし、いっつ。

s i d e ネギ

僕が目を覚ましたとき、この部屋には茶々丸さんとアスナさんがいた。

どうやらあのまま気絶して連れてこられたらしい。

しばらく待っていると、エヴァンジェリンさんと・・・兄さんが来

た。

なんで兄さんが？

訳がわからない。

説明するって言われたけど・・・。

説明が終わり、アスナさんと二人っきりで話があるらしく

一緒に部屋を出て行った。

兄さんから聞かされた話は驚くことばかりだった。

僕は考える。

今回のことで何を学べたのか。

正直なところ、僕は自惚れていた。

天才だ、流石英雄の息子だ

そう言われて今まで生きてきた。

だから心のどこかで自分は凄い、と思っていたんだ。

けれど、エヴァンジェリンさんと戦って気づかされた。

僕は弱い。

まだまだ強くなれる、と。

初めての戦闘は怖かった。

死の恐怖を味わった。

あれが本当の戦い・・・思い出すだけでも怖い。

自分の甘さを痛感させられたのは言うまでもない。

でも、兄さんが僕の為に動いてくれたのはあの真剣な表情から嫌でも読み取れた。

なら僕は兄さんの期待に応えなければ。

僕の父さんは英雄。

だけどそのせいで僕達も命を狙われる可能性が高いんだ。

英雄って呼ばれるからには敵がいたはずだ。

その敵が生きていたら・・・。

きっと狙われる。そういうことじゃないのかな。

うん。怖い。

けれど、ここで立ち止まってしまったらきつと前に進めない。

僕はもつと強くなる必要がある。

自分が死なないために。

多くの人を救うために。

そして・・・。

今まで何度となく助けてくれた兄さん。

僕のことを真剣に思ってくれている兄さん。

そんな兄さんの隣にたてるように。

守れるように。

「エヴァンジェリンさん、僕に魔法・・・いえ、戦闘技術をおしえてくれませんか？」

もっともっと、強くならなきゃ駄目なんだ。

父さんと同じくらい、それ以上を目指して。

ネギ s i d e e n d

s i d e エヴァンジェリン

アリアめ、私に押し付けたな。

後で血を吸ってやる。

まあそれはいい。

それよりも目の前の坊やだ。

アリアの話を聞いてから随分考え込んでいる。

恐らく、今回のことを思い出しているのだろう。

アリアの意図はどんなところにあるのか、とかな。

私はその答えを聞く役か？

この先、強くならなきゃこいつは死ぬ。

それは確実だ。

私が育ててやろうとは思うが、これからどうするのかはこいつから聞かなきゃつまらん。

まあ聞くまでもないだろうがな。

アリアに坊や。

どちらも本当に面白い。

双子の癖にその性格は真逆と言ってもいい。

本当に面白いな。

私は思わず唇を歪める。

嗚呼、退屈しないよ、本当に。

「エヴァンジェリンさん、僕に魔法・・・いえ、戦闘技術をおしえ

てくれませんか？」

自分で考えてその答えを出すか。

こいつは私が悪だとわかっているのか？

いや、わかっているのだろうな。

やはり退屈しない。

魔法に拘らないようになってきているのもいい傾向だ。

「なぜだ、と聞いておこうか。」

「兄さんは貴方をトップクラスの實力だと言いました。

兄さんが嘘をつくことはほとんどありません。

なら貴方はその通りなのでしょう。

それに、僕の戦闘スタイルは魔法一辺倒です。

なら魔力の使い方が同じ貴方に教わりたと思いました。

魔力の少ない方に魔力の多い人の戦い方は教えられませんから。

そして、なにより多くのことが学べると思ったからです。」

色々考えたみたいだな。

思考力は悪くは無い。洞察力もある。

そして、強くなることに貪欲だ。

簡単なことじゃ諦めないだろう。

そしてなにより目だ。

甘さがほとんど無い。

現実を受け止め更に進もうとしている。

こいつはお前の思った通り、いやそれ以上かも知れんぞ。

アリア、お前の弟は確かに成長している。

「生半可な修行じゃ済まさんぞ？」

「望むところです！」

後は任せろ。

私がかつと強くしてやる。

・・・まあ半分は退屈しのぎだがいいよな。

s
i
d
e

ア
ス
ナ

エ
ヴ
ァ
ン
ジ
エ
リ
ン

s
i
d
e

e
n
d

「ここでいいか。」

あの夜、私は死んだと思った。

けど実際は生きてて、アリアが考えたことなんだって。

・・・はつきり言って意味わかんないし。

全然理解なんてできなかった。

そもそも、こいつの考えがわからなかった。

あんな怖い思いしたのに、アリアが元凶だなんて。

「・・・なんで。」

「どうかしたか？」

「なんで、なんで私がこんな目に合わなきゃならないの？」

私は、あんたの為に動いたのに・・・。

あんたが、心配だったのに・・・。

気がつけば両側の瞳から涙が頬を伝ってぽたぽたと垂れていた。

なんだか、裏切られた気がしたから。

苦しかったのに、辛かったのに

全部アリアの所為だったなんて

信じたくなかった。

信じたくなかったんだ、私は。

「怖かった・・・だろうな。

辛くて、苦しくて、逃げたかっただろうな。

悪いとは思っている。

けど、これでわかったら？」

「なにがよ……。」

「こちら側、スプリングフィールドと関わるということが

どれだけ危険か、だ。」

私は、意味がわからなかった。

それじゃ、なに。

あんた達はあることが普通にあるって言うの？

まだ九歳なのに？

この時の私はアリアが姿を偽っていることなんて考えていなかった。

それほどに衝撃的だった。

「俺らは、平穏な暮らしなんておくれないうつ。
そう言う生まれなんだ。」

俺たちの父親はこちら側では有名な英雄なんだ。

英雄には打ち倒すべき敵がいる。

敵側からしたらこの上なく憎いだろうさ。

憎さがその子どもに向けられるのも自然。

命の危険なんてざらにある。

俺は特にな・・・。

だから、アスナには知って欲しかった。

平穏の大切さを、こちら側に来るとどうなるかを。

そして、思いとどまって欲しかった。

アスナの為ではない。主に俺の為に。」

涙がいつそう溢れてくる。

私自身の決意なんてちっぽけなものだったことに。

こいつらがそんな危険な世界に生きているという事実。

なにより、全てを受け入れてしまっているアリアに・・・。

「なんでよ、なんで・・・？」

なんでそんな風に笑ってられるの・・・。

なんで当たり前のような顔してるの・・・？」

「前も言ったが、『仕方ない』ことだ。

親は子を選べないし子は親を選べない。

ここで文句言っただって、誰かを恨んだって

何一つ変わりはしない。

なら死なないように頑張って、誰も死なせないようにこちら側から遠ざけて。

この手の届く、大切な人達は全力で守る。

それが俺にできる精一杯。

後で悔いるのはもう嫌なんだ・・・。

だから、足掻いてみせる。

それが、俺の決意であり、おれの生きる道なんだ。」

目の前でそう言うアリアの顔は、とても辛そうな

悲しい瞳をしていた。

きっと、何かあったんだ。

それでも、泣き言を言わず、前を向いて生きている。

なんでこいつは・・・。

「だから、アスナさんは平穏に生きてください。

それを捨てるのは・・・勿体無い。」

微笑むアリア。

その笑顔は、どこか悲しみを帯びていて無理しているのが目に見えてわかった。

だけどとても綺麗で、思わず見とれてしまう。

先ほどまでと違う言葉遣いに距離を感じ、胸が痛む。

「でも、嬉しかったですよ。

僕らの為に怒ってくれて。

涙を流してくれて。

それだけで十分です。」

私に背を向けて歩き出す。

このままいけば、もう会えない気がした。

実際そんなことはないのだろうけど、そんな気がした。

そう考えたとき、胸が苦しくて息が出来なかった。

嫌だ、嫌だ。

「・・・待ちなさい、よ。」

勝手に・・・決めてんじゃないわよ！」

ありったけの声に私の思いを乗せる。

死ぬのは確かに怖い。

もうあんな思い、したくもない。

だけど、だけど・・・！

それ以上に、このまま放っておくのも

あんとと離れるのも、嫌なのよ！！

「私のことは私が決める！」

あんたが何を言おうと放ってなんて置けないわ！」

目を見開いて驚いているアリア。

私は、今度こそ、自分の意思で

そっちに行つてやろうじゃない。

覚悟も決意もいくらでもする。

それ以上に譲れないものがあるから。

「何度も死ぬ思いをしますよ？」

「いいわ、なら強くなればいいのよ。

みんなぶっ飛ばせるように。

それでも死ぬんなら後悔しないわ。

私がバカだっただけ。

仕方ないわよね?」

「後悔・・・しますよ?」

「しないつて言ってるじゃない!」

「本当に、いいんですね?」

「何度聞いても同じよ!」

絶対に引かない。

引いてなんかやらないんだから。

私はそっち側に行く。

そのためには平穩なんて捨てる。

あんたについていく為に。

しばらく沈黙が流れる。

見詰め合うような形で何分も、何十分も固まっていた気がするわ。

ふとアリアが諦めたようなため息を漏らすまで。

「仕方ない・・・か。

わかりました。いや、わかった。

なら俺は全力でアスナを守る。

絶対に死なせない。

強くもなってもらうがな。

泣き言は、聞かないからな？」

「・・・上等じゃない！」

かかって来いって感じね！」

そうか、私は、こいつに・・・。

自分の気持もわかってすつきりした。

簡単な話だったのね。

絶対に離れないわよ。

覚悟しなさいね、アリア！

アスナ
side
end

結局こうなったか。

エヴァさんの話から予想は出来ていたんだけど。

ままならんなあ。

死なせるわけにはいかないし。

自業自得な気がする。

まあ、いいか。

守りきる。守りきって見せるさ。

それが俺の責任つてものだ。

「そう言えば、あのオコジヨは？」

「ああ、あいつならキスキス嫌いからぶん殴って気絶させておいたわ。」

「ああ、なるほど。」

「何が仮契約よ。」

簡単にキスなんてできるわけじゃないじゃない。

ふざけてんのかしら？

あ、アリアは・・・別にいいけど。」

「はい？」

「守ってくれるんでしょう？」

なら戦力は必要じゃない。」

あれ、なんかフラグ立てた？

それはまずいんだが。

たまにドキッとさせられるけど、実年齢考えるとなあ。

にしても仮契約か。

いい手ではあるな。

「おうだな。エヴァさんに頼んでみよう。」

「・・・やけに信用してるわね？」

「ん？エヴァさんは信用できるぞ。強いし。」

信用してなけりや襲わせないって。

誇り高き人物ですからね、彼女は。

悪だとか言って高笑いしている姿はシユールだけれども。

ってなんでそんな不満げな表情をしていらっしやるのでしょうか、アスナさん。

「ロリコ」断じて違う。「ん・・・。」

なんてこと言うのですか、あんたは。

エヴァさんが恋愛対象？ないない。

どう考えても犯罪です。

別に嫌いではないけどね。

むしろ好きだし。無論likeだけでも。

ってかしまらないな。

あーだこーだ考えるのバカらしくなってきた。

もういいや。

俺が守りきれば言いだけの話だ。

ネギにそろそろ魔法のことばらしてもいいかな。

覚悟やら決意もできてるだろうし。

この先不安ではあるけど、どうにかするしかないな。

俺も、気合を入れなおさなきゃだめだな。

明日は学園長達に呼ばれるだろうな。

ま、負けないさ。

夜は更ける。

アスナとネギは成長し、俺も新たな決意を胸に。

なんとかしてみせようじゃないか！

おまけ

「ようやく、この日が来た……。」

ここは空港。

そこに全身ローブの明らかに変な人物がいた。

ローブから覗くのは赤い髪。

顔もフードを被っていてよく見えない。

とにかく怪しい。

「フフフ・・・やっと、やっと

やっと行けるわ・・・。

この日わどれだけ待ち望んだことか・・・

待っていないさい・・・麻帆良学園!!」

● ○

第拾捌話 新たな決意と暗躍する赤（後書き）

わかる人はわかると思います。

てかわかり安すぎたかも。

ちよつと適當になった部分もありますが・・・。

まあいいです。

それにしても、暑くなってきましたね。

私は非常に眠い。

暑さに関係はありませんが。

皆さんも体には気をつけてくださいね。

私のようになつてはだめです。

それでは、次回も楽しんでいただけると幸いです。

感想お待ちしてます。

ユーザー制限なんてかけていないのでどなたでも気軽に書いていただけると思いますね。

第拾笈話 正義の在り処、思わぬ再会（前書き）

また一週間近くあいてしまいました。

申し訳ありません。

はつきり言ってスランプです。

今回はまた日常パートみたいなものです。

次話まで続きます。

第拾笈話 正義の在り処、思わぬ再会

朝から学園長室に呼ばれた俺。

話なんて一つしかない。

どう切り出されたとしても問題は・・・無いはず。

一応、色んな状況をシュミレートしてはいる。

表向きの理由もきちんと用意した。

だからきつと大丈夫。

第拾笈話 正義の在り処、思わぬ再会

「失礼します。」

朝、学園長に呼び出された。

九割九分昨日の話だろう。

こっちは一応の言い訳・・・表向きの理由があるから大丈夫だと思っ
思う。

それで納得してもらっ。無理にでも。

そんな気持で学園長室まで来た。

ドアを開けてまず驚いたのは、魔法教師が勢揃いしていたこと。

瀬流彦先生にガンドルフィーニ先生。

式集院先生、明石教授、神多羅木先生。

葛葉女史にシスターシャークティー。

ここまで来れば圧巻だ。

表情には出さないように気をつけたがもしかしたら隠せなかったかもしれない。

それぐらい驚いた。

そうか。エヴァさんって結構危険視されてるから集めたのか。

後は・・・俺の評価とかそんな感じか。

どんな人間か判断したいってところじゃないかな。

「何故呼ばれたのか・・・わかっておるな？」

「ええと・・・思い当たる節が無いのですか。」

平常心を保つ為に軽口を叩く。

焦ったら負けだ。

どれだけ冷静に、且つ本心を悟られないかが大事。
熱くなるのはいいけど心だけに留めなければ。

「君は、何をしたのかわかっているのかね！」

吼えるガンドルフィーニ。長いな。ガンドルでいいか。

この人はやはり良くも悪くも熱い。

正義感が強いと言うのかな。

俺の正義とはベクトルが反対だけど。

「何を・・・とはどういう意味でしょうか？」

あ、皆さん自己紹介は必要ありません。

一応知っていますから。

それで、ガンドルフィーニ先生は何が言いたいのですか？」

警戒の色が強くなった。

葛葉刀子にいたっては刀・・・野太刀か？に手を掛けている。

タカミチは相変わらずポケットに突っ込んでるし。

でも威圧は止めて欲しい。

問題無いんだけど、少しイライラするというか・・・。

思わず動いてしまいそうになる。

条件反射の域まで来てるみたい。

フェイトとの修行の成果がここにきてわかる。

少し苦笑しそうになるね。

「エヴァンジェリン・・・闇の福音に手を貸したそうだな？

アレがどういったものかわかっているのか！」

エヴァさんを『アレ』扱いか・・・殺そうかね？

いや、俺がきれる所じゃないか。

エヴァさんに報告しよつと。

「そうですね・・・なら質問します。」

ガンドルフィーニ先生に答えてもらいますが、皆さん考えてくださいね？

約束を守らない人をどう思いますか？」

「いきなり何を言っているんだ？」

「いいから、質問に答えてください。」

少し面倒になってきたので威圧する。

全員の驚く顔が面白い。

・・・最近自分の性格がよくわかんないなあ。

「・・・約束を守らないなど、人間として最低だ。」

「そうですよね？」

と言うわけで、私の父、ナギ・スプリングフィールドは最低の人間です。」

「「「なっ・・・!」「」

「だってそうでしょう?」

「エヴァさんと約束しておきながら守っていないのですから。」

「それは奴が闇の福音で・・・!」

人間じゃないと?

やはりなめていらっしやる。

「エヴァさんは理由になりませんね。

人間じゃない？だからなんだって言うんですか。

約束したんですよ？その吸血鬼と。

もし守るつもりが無いのなら、問答無用で縛り付ければいい。

それでも、父は約束を交わした。

三年と言う期間、エヴァさんは大人しく待ったはずです。

学園の警護までしました。

冷静に考えれば、彼女がどんな人物かわかるはずです。

そして今は何年目ですか？

十五年目ですよ？

父が守れなくなった約束、そのままにしておいていいとも思えません。

だから私が変わりに引き継いだ。それだけです。

私は父の後始末をしただけ、何かおかしい部分でもありましたか？」

全員黙り込む。

何とも言えない顔をしているのが印象的だ。

まあそうだろうな。

英雄に対して最低と言い、その英雄の約束を息子が引き継いだ。

文句なんてつけられるわけが無い。

「それに、彼女はこの学園に来て一度でも人を殺したのですか？

侵入者は知りませんが、麻帆良の人間は殺していないはずです。

それは皆さんの方がよくわかっているはず。

例えば魔力が封印されていたとしても、彼女なら殺すことは簡単でしょう。

少なくとも、私は彼女によく面倒を見てもらっています。

学園長が彼女の家に押し付けたからですけど。

だから彼女を悪くなんて言わないですし、悪く言われたら口を出させていただきます。

人には、それぞれ持っている正義の形が違うと思うのです。

私と皆さんが違うように、皆さん一人ひとりも違うと思います。

似てはいるかもしれないのですが。

そして、英雄と呼ばれた父も多分違うんだと思います。

エヴァさんも然りです。

それを最初から否定しないでください。

正義の反対、悪ではないです。

皆さんも思うところはあると思いますが、ここは私と・・・父の
ように

彼女を信じていただけないでしょうか？」

あくまで下手に出てお願いする。

エヴァさんは気にしないだろうけど、俺は気になる。

それに、呪いが解けてもこの地にいることもできる。

あくまで俺の我侭なだけどさ。

「・・・君の気持はわかった。

だけど、そう簡単に割り切れる問題でもないんだ。

すまないが、考えてみるとしか言えない。」

「いえ、それだけでも十分です。

先入観さえ消えれば、彼女を悪く言えなくなるでしょうから。

ありがとうございます。」

ガンドルとしか話してないけど、何となく全員の雰囲気や和らいだ気がする。

さて、とりあえずはまずまずな結果だけど・・・。

次はネギについてかな。

「学園長、ネギ先生についても報告・・・いりますよね?」

「・・・うむ。」

「結果だけ言います。」

ネギは更にやる気を出しいい経験を得たみたいです。

自分の未熟さに気づけたとも言っておりました。」

「そうか、君の言ったとおりになったのう・・・。」

その為にがんばりましたから。

いい結果になってしまっただけは何も言えないよね。

「そのために色々と画策しましたから。」

それと、あまり焦ると碌な結果になりませんよ？

私はこれからも自分の思った通りに動きます。」

「君は・・・何を考えておるんじゃない？」

「簡単に言えば、大切な人達、この手の届く範囲にいる人たちが幸せになれるように・・・ですね。」

それ以上は望みません。

後は・・・必要以上に私やネギに一般人を関わらせないようにで
しょうか。

それが私の持つ正義・・・我俣ですから。」

「なるほどのう・・・あいわかった。

昨日はすまんかったのう。

もうよいぞ。」

「いえ、もう忘れました。

ですがあまり無茶なこととはしないでくださいね？

何度でも叩き潰しますから。

では失礼します。」

さて、終わった終わった。エヴァさんに報告しないとな。

軽い足取りで帰る。

思ったより話のわかる人たちでよかった。

けど、なんか嫌な予感がするんだよな……。

警戒はしておこう。

アリアが退出した後の学園長室では……。

「わしらは焦っておったのかのう……。」「

「そうですね、結局、彼の思った通りになっているわけですし……」

「それにしても……彼、本当に九歳なのか？」

学園長にタカミチ、ガンドルフィーニと続く。

皆の表情はとても堅い。

エヴァンジェリンのこととアリアのこと、そしてこれからどうしたらいいのか。

そのことで戸惑っているのだ。

「じゃが……少なくとも彼の持つ正義、我侭とも言っておったのう。」

あれは本心じゃろうな。」

近衛近右衛門は考える。

ネギの事を思つてとつた行動は本当に正しかったのか。

一般生徒を簡単にこちら側に引き込んで良いのか。

今回のことでわからなくなつた。

いや、きちんと考えざるおえなくなつたと言つのが正しい。

どこかで考えるのを拒否していたのだ。

大丈夫だろう、と高をくくつて。

けど良く考えればそれがどれだけ馬鹿げた考えだったか、痛いほどに理解できる。

若いうちに死ぬのは目に見えている。

気づいてよかつたと思う反面、もうどうすることもできないことに頭を抱える。

何人が関わるかわからないが……きっと数人はこちら側に来るはず。

もう、任せるしかないのか。

けれど、アリアなら上手くやってくれそうな気がする。

・・・ここに来て彼に任せるなんて都合が良すぎる。

学園長は一人苦笑する。

希望も絶望も半々なこの状態に。

タカミチは昨夜のことを思い出していた。

威圧して、牽制して、気づいたら後ろを取られていた。

瞬動はありえないだろう。

文字通り、瞬間的に背後に回られた。

どんなカラクリがあるか想像もつかない。

けどわかったこともある。

彼の実力が未知数で、少なくとも自分よりも強いということ。

あの年で・・・どんな努力をしたんだろう。

そして殺気。はっきり言って子どもの出せるものじゃない。

益々わからない。

タカミチは恐れを感じる。

その計り知れない力に対して。

ガンドルフィーニは自分の目指す正義を信じていた。

いや、疑わなかった、がより正確だろう。

純粹に正しいと思っていた。

間違っているなんて考えたこともなかった。

しかし、彼・・・アリア・スプリングフィールドの言葉で戸惑った。

彼の言うことは尤もだったのだ。

エヴァンジェリンは問題を起こすこともなく、この十四年を過ごした。

三年の約束を十一年も延長しているのに。

そして、彼自身は現在彼女の家に住んでいるという。

その彼に危害を加えていない。

どうみても危険な人物ではない。

そもそも、警備まで引き受けているのだ。

この学園なんか潰そうと思えば潰せる。

それなのに今まで大人しくしていた。

危険・・・はないのかもしれない。

けれど簡単には割り切れない。

今まで根付いた物があるから。

それでも・・・。

戸惑いを覚えつつも少しずつ変わっていく。

それは関東魔法協会全体に言える事だった。

さて、エヴァさんちに帰る前につと。

「ネコんどこに寄ってくか。」

癒されに。

なんだか嫌な予感がするのよ。

こっ……寒気がするというか……。

何かが近づいてきているような……。

「……アーーーーー!!」

物凄く嫌な予感なんだよね……当たった試しがないけど。

色で例えるなら、赤？

あー、マジ鬱だ、ネコに会わなきゃやってられん。

さっさと行こっ、すぐ行こっ。

「・・・リアーーーーー！」

茶々丸いないけど大丈夫かな？

あ、電話してみるか？

・・・エヴァさんち電話あつたつけ。

エヴァさんは使えないからな・・・たぶん。

機会音痴ですからね。

なんかもうやばい。

すぐそこまで迫ってるような・・・。

「アリアーーーーー！」

・・・これは夢だ。

そつだろつ、なあ、アーニヤよ・・・。

「夢だといつてくれ・・・アーニヤ。」

「夢なんかじゃないわ！」

お姉ちゃんが助けに来て上げたからにはもう大丈夫！

金髪幼女に弱味を握られたのでしょうか？可哀想なアリア・・・。

さあ！一緒に帰りましょ！」

誰か、この暴走っぷりを止めてくれ。

とりあえず、暴走と言うかももう覚醒に近い何かがあったアーニヤを何とか宥め（三十分かった）、エヴァさんちまで連れてきた。

どうしようもないでしょ。

修行は終わらせたみたいだし。

なんか俺が帰るまでここにいたとか言い出すし。

・・・もう現実から逃げたい。

逃避はここまでにして、エヴァさんに説明しなきゃな・・・。

「ただいまー・・・。」

「えと、おじゃまします?。」

「ん?遅かったな・・・って誰だ?。」

「あ!出たな金髪幼女!。」

あー、まずいな。

エヴァさんが、きれる。

幼女は禁句なのに・・・。

お子様ですら怒るのに。

「だ、誰が幼女・・・だと？」

ほら、笑顔なんだけど青筋が浮かんでるし。

なんか引きつつてるし。

「あんたよ、あ・ん・た！」

「アリアを誑かした罪は重いわよ！」

「お前……私が誰だか知らないのか……？」

「知るわけないでしょ金髪幼女なんて！」

大体初対面なんだから当たり前じゃない！！

「そんなこともわからないお子ちゃまなのかしら？」

7
 15
 15
 •
 •
 •
 15
 15
 15
 •
 •
 •
 ○

そうか……。余程殺されたいと見える……。

小娘、祈りは済んだか？済んだよな・・・。

[illegible]

なんという戦い。はっきり言ってアーニヤの毒舌が痛い。

エヴァさんの急所に的確に打ち込んでいってる。

いつの間にか成長したんだな・・・。

とか考えてる暇なんか無い。

エヴァさんがどんどん魔力溜め込んでいってるから洒落にならない。

昨日血分けたのがまズった。とりあえず・・・

「エヴァさん、ストップ。」

「放せアリア！そいつを殺せない！！」

「落ち着いてって。」

エヴァさんにも責任があるんだから。」

「・・・なんだと?」

少しは落ち着いたか。

いや、いつ魔法が来るかわかんないから怖かったよ。

「この子はアーニャ。」

アンナ・ココロウアが本名でアーニャは愛称。

前エヴァさんが冗談を言ったあの手紙を本気にしてこっちに来たんだと。

俺を助ける為に。」

「待て、何故そうなる？」

「よくわかんないけど、俺が弱味を握られて・・・って想像をしたらしい。」

「つてか俺ってそんなにおつちょこちよいに見られてたのか・・・。」

でも、俺を心配して来てくれたのは素直に嬉しいな。

ちよつと、いやかなり面倒なことになったけど。

帰すことが出来ればそれでいいんだが・・・。

修行終わらせてるから時間はあるみたいだし。

何より、頑固なんだよなあ。

アスナに近いっちょ近いかな。

おしゃまだけど。

素直に帰るとは思わないし・・・かと言って長くは滞在させられない。

難易度高くないか？

自業自得と言ってしまえばそこまでなんだけど・・・。

とりあえず、今日は別荘にアスナとネギ呼んで話すか。

「」
「むづうう・・・!!」
「」

おいそこ、いがみ合ってんじゃないねえ。

「あ、アーニヤ。」

ちなみに金髪の子はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさん。

聞いたことくらいあるとは思っけぞ。」

「え・・・エヴァンジェリンって・・・あの?」

「うんその。」

「吸血鬼の・・・?」

「吸血鬼の。」

「い・・・いや—————!!」

たべられる—————!!」

そんなことはないから安心しなさい。

エヴァさんも胸張らない。

微笑ましいだけだから。

別荘に入ってネギ達を待つ。

やはり最初は驚いたみたいだ。

しきりにはしゃぐアーニヤが年相応で可愛かった。

エヴァさんが称えろってうるさかったけど。

なんかもうあれだった。

犬猿の仲。

「アリア……。」

「どした？」

なんか色々考えてるうちにアーニヤが近づいていた。

全く気づかないなんて……。

少し怠けてるなあ。

久しぶりにフェイトと模擬戦しようか。

「アリアは、なんでここにいるの？」

「・・・どういう意味？」

「何で麻帆良に・・・エヴァンジェリンの家にいるのかってこと。」

そっつう風な目で見ちゃうか・・・。

なまはげだから仕方ないけど、少し寂しいね。

「理由なんかいっぱいあるさ。」

修行だから、エヴァさんちに決まっちゃったから

ネギが心配だから・・・それこそ探せばいくらでも。

まあでも、一番大きいのは麻帆良ですることがあるから。

エヴァさんちにいるのはその理由の他に、エヴァさんがいい人だからだよ。」

「いい人？吸血鬼なのに？」

「うん。俺家賃とか払ってないんだよ？」

それなのに文句も言わず、追い出しもしない。

気に入られたからかもしれないけど、だからってそこまでする人なんか滅多にいないよ。

居心地いいし。それがここに留まる理由かな。」

「むづう……。」

「むくれないむくれない。」

偽りの無い本音だ。

それに……ここで石化解除の薬を作れば助けられるんだ。

アーニヤの両親も、ね。

後はたわいの無い話をしてネギ達を待った。

ネギはとても驚いていた。

パニックになっていたのが面白かったけど。

その気持はともわかる。

俺も現実逃避したくらいだったからね。

アスナとは同属嫌悪とでも言うのだろうか、とてもそりが合わない
みたいだった。

お願いだから、厄介ことは引き起こさないでくれよ？

そう願わずにはられない。

ああ、原作はもう当てにならないなあ。

俺は独りごちる。

この先の読めない展開に不安を抱えて・・・。

乙女達の戦い・・・。

アーニヤは一目見てなんとなく悟った。

アスナのアリアを見る目が恋をしている人のそれだと。

なんとなく嫌だと感じたし、どうも気に入らない。

そしてそれはアスナも思っていたことだった。

アーニヤはアスナの体を見て嫉妬していたのはまた別の話だが。

「ふ、ふんっ。」

アリアを誑かそうなんて神が許しても姉であるこのアーニヤ様が許さないんだから！」

「誑かすってあんた・・・。

それにあんたには関係ないでしょ？」

「なによ！」

「そっちこそ！」

「」「むづうう・・・！」

これはアリアのいない所での二人である。

どちらも一步も譲らない。

「ま、まああれね。」

私はアリアと一緒に寝たこともあるんだから！」

「そ、それがどうしたっていうのよ？」

私なんかアリアの秘密を知っているんだか！」

「「むづううう・・・！」「！」

これを見たネギは後にこう語る。

二人の間には火花が散っていて近寄りたくなかった。女の人怖い、と。

「まあアリアは私のものだがな。」

「金髪少女は黙っていなさい！」

「エヴァちゃんはネギで我慢しなさい！」

「・・・喧嘩売っているのか貴様ら？」

「「「がるるるるる・・・！」「」「」

そのころ、アリアは悪寒に苛まされていたそう。

乙女達の戦いはまだ始まったばかりだ。

「ケケケ、モットヤレ。」

「彼も罪作りな人だね。」

「面白いからいいけど。」

それを遠くから眺める初代従者コンビ。

彼らには止める気なんてないことをここに追記しておく。

アリアの苦悩はまだまだ続くことで。

第拾笈話 正義の在り処、思わぬ再会（後書き）

今回は本当に難産でした。

最近あまりいい内容が思い浮かばなくて困っています。

小説読んだり、漫画読んだりもしばしば。

気分転換と脳に刺激をつて意味ですね。

最近のお気に入り商業誌（店で売っているラノベとか）は「ソードアートオンライン」です。

非常に読みやすく、最近の人向けではありますが……。

主人公が強いファンタジーものなんですけどね。

漫画は「ピアノの森」っていう、まあ題名で判る通りのピアノの漫画なんです。

個人的には凄く好きな漫画です。

ピアノなんかもやっていましたからね。

多趣味な自分って結構浮気性かも……。

機会があれば読んでみてください。

無駄話が過ぎましたが、感想が怖いですね。

自分でも凄く中途半端な気がします。

それでも感想はやはり欲しいですが……。

些細なものでもいいので、疑問や質問、矛盾点、誤字脱字等もあれば気軽に感想へどうぞ。

時間はかかっても次の更新時までに戻します。

皆様のご協力をお待ちしてます。

改訂版に活かすぞー、おー。

ではまた次回、早めに投稿できるように努力します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4763m/>

正義の反対はまた別の正義？

2010年10月9日19時39分発行